

石垣

東・西日本リアリズム演劇会議合同機関誌

演劇会議

発 言 1

■ 総会・ゼミナール特集

第14回東リ演劇会のまとめ 黒 沢 参 吉..... 2

どこで読みとどまるか 栗 原 省..... 5

「劇場における演劇活動の自由」 合 田 幸 平..... 10

「続けていくために」(分科会からの感想) 後 田 正 子..... 13

京芸—その中に私はいた 早 見 栄 子..... 17

東リ演における専門劇団とは 岡 部 政 明..... 22

「モデル上演」分科会のでんまつ 萩 板 桃 彦..... 25

□ 関西における戦前プロレタリア演劇の研究 大 岡 欽 治..... 27

■ 劇団通信

「関東プロダクション」から 城 谷 護..... 51

<なかまの頁> 木々の会 石部久人・林 清子..... 53

ドイツ民主共和国「労働者芸術祭」に参加して よしだ はじめ..... 55

■ 劇 評

「宮の歌」(劇団潮流) 関 口 晃 宏..... 63

「鐘と呼ばれるあいつ」(関西芸術座) 岸 本 敏 朗..... 65

「奇峰亭先生の幻の壺」(人間座) 井 上 義 寿 夫..... 68

国鉄演劇祭 新 木 祥 之..... 71

演劇雑感 萩 板 桃 彦..... 74

八田先生・追悼 黒沢参吉・岩城 薫..... 78

戯 曲 盆 待 ち 淺 野 良 二..... 83

34

1976年11月

¥350



中国料理

浜松華勝楼

本 店 浜松市有楽街 TEL (0534) 53-6532・6534

サゴ-店 浜松市モール街 サゴ-プラザ地階

西 武 店 浜松市鍛冶町 西武デパート地階

天 竜 店 浜松市西鹿島 天竜オークラ・ボール内

食品工場 浜松市馬込町 231

創造のカベを破り、幹部を創るための 第2回東り演<演劇大学>にあつまろう!

日程 1977年2月11(祭) 12(土) 13(日)
会場 東京都内
参加費 12,000円 (宿・食・資料代共)
定員 60名

3つの全体会

- ① 講演
福田定良・いづみたく・長岡輝子
(各氏交渉中)
- ② パネルディスカッション
「劇団について」
パネラー劇団
末踏・劇団名古屋・仙台小劇場・さっば
司会 こばやしひろし
- ③ 作品演出演技をめぐって
のシンポジウム
早川昭二ほか銅鑼の皆さんによる



5つの分科会

- ① 演出の問題 (チューターこばやしひろし)
- ② 演技<ボドテクストと物云い> (松波喬介交渉中)
- ③ 舞台美術<ゼミ分科会を継いで> (佐藤張二)
- ④ 経営の研究—東京芸術座の沖繩公演など— (佐藤克男)
- ⑤ 作家・作品研究 (芳地隆介にみる労働者演劇) — (ゲスト芳地隆介・司会萩坂桃彦)

問合せ先 244 横浜市戸塚区上矢部1329
TEL 045 811 3318
黒沢参吉方

ロッキード疑獄が戦後政治の金権、戦犯、売国性の三悪政治の象徴としてあばかれた。しかし、腹が立つのはあの国会での証人喚問風景である。

その度に「存じ上げません」「記憶にございません」などとすりすりするりと逃げまわり、嘘に上塗りをして演説する者もいた。

テレビの国会中継を見ながら、あの人等、いま心の中はどんなやろなア。早よ質問を終えて欲しいやろな。ウツカリ本当のことが口から出てしまうんやないやろか。等見ているの方が何や心配になつたりして…。しかし立派というか何というか「こりや役者やなア」と変な所で変な感心をさせられたりもした。

「私は天地神明に誓ってその様なことはございませぬ」。その後の捜査でこれらの人物は悉く黒であることが判明した。

「記憶にございません」「存じ上げません」は時の流行語となり、学校では先生の問いかけにまで生徒が「記憶にございません」「存じ上げません」を連発して先生を困らせたという話も聞いた。

「記憶にございません」とは「記憶にございます」ということであり、「存じませぬ」は「存じます」の意味であり、「天地神明に誓ってその様なことをした」ことであった。

今や、その言葉が本来持っている意味を逆立ちさせてしまった。日本語は正しく使ってもらわねば困る。「天

地神明に誓って…」等に至っては、これ程国民を馬鹿にした話はない。

自分を国会議員に選出してくれた国民に責任を持って誓えないので、わざわざ天や地や神等という何やら判らんものに誓って見せたのだ。本来持っている言葉の意味を逆転させ、国民の前でいつわって天地神明に誓うとは…。果してこれで国民が納得してくれるもんだらうか。

さて、演劇活動であるが、「地域に根ざした演劇活動を」と叫ばれて久しい。西リ演劇会のゼミでも相当深く論議された。しかし実情は仲々むづかしい。

「地域が必要と感ずる作品」「地域の必要物となる劇団」ということも云われた。

演劇は片手間には出来ない。しかし劇団員の中堅は職場や地域においても仕事や活動の上で中堅である。どうしても演劇活動は片隅に追いやられて、又とりたくない歳もくって来た。

犠牲の上に立った演劇は辛どい。「何故こんな辛どい目して多居せんなんのやろ」「つまり政治的文化的課題にこたえた演劇活動とはこんなところやろか」

地域が必要性を感ずる作品を通して、地域の必要物となる劇団になるには正に「天地神明」ではなくて、地域の、おいやんやおばんや兄やん姉やん達に誓ってその努力をはらうことになるんやろうと思うけれどいやはや難儀なことではある。

(劇団いこら・佐々木敏明)

第一四回 東り演 総会のまとめ

黒 沢 参 吉

総会とゼミがおわると、秋がかげあしでやってくる。各劇団とも、目の前にせまった公演のとりくみで、夜に目をつけている筈だ。例年、その頃になってぼくはこうして、まとめを書く。奇妙なことに、大概の年のこの頃にぼくは風邪をひく。ことしも、チャンとそうなってしまった。だるくて頭が重いから、考えることも健全でない。

たとえば、こんなまとめ何の役にたつだろうと考える。総会にしろゼミにしろ、必要なメンバーは原則的に集まっているんだし、大事なところはテープやメモにとってるし、頭にもはいつてる筈なのだから、こんな作業は蛇足ではないか。

すると萩さんが、いやいやそうでない、演劇会議にまとめとしてのせるには、西り演もふくむ広い読者に周知するとか、一個の記録としての意味とか、いろいろ有るのだといっ

たことを電話のむこうで概々説くので、ぼくは思いなおさざるをえなくなる。会議のとき、メモをとらないでテープに入れているのは寔に気楽で爽快で、いいものだと悦にいつていたが、いざこういう作業になるとヒゲヤで、とうとうぼくは十数時間の総会を一人で再体験する破目になった。

東り演一四回総会。於江ノ島竜口寺。
八月二〇日(后一)五時・運営委員会)
后七時総会開会。三四劇団五〇余名。
総会議長に久保田(名古屋)、林中(さっぽろ)両氏。西り演より藤沢薫氏が来会、冒頭挨拶をうける。当方からはこぼやし事務局長が、九州での西り演総会に出席。

テープをきいてまず、議案説明はムダとわ

かった。一人で喋ってる、気色がわるくなる。日本語で書いてあるのだから、説明は不要、すぐ討議に入った方がいい。

もうひとつ。皆喋らない、妙な間、いやな間の連続。劇団での討議してきてもらうため、議案を苦勞して早くつくって送ったつもりだが、それをやって来てくれてるにしては、発言がすくない。又、実践に裏づけられたい同意なり反論なりが、ともに弱い。

「はじめに」の章。

ぼくらの活動を成立させ発展させる基本的な保証、第一にぼくら、第二に観客、自分それだけというおさえ。仙台が反論。民主戦線の前進との連関をたちきった評価は、ベシミステイックな英雄主義に通じる。新型ファシズムの台頭の中で、われわれが国民的合意をとりつけている情勢の中で、ぼくらの運動を評価せよ。わかりきっていても、遠慮せず、明確に触れよ。総会決定は、劇団の合意の成立基盤であるから。

正論。(だが、正論のまま負けている状況もある。この辺論争にした方がいい)

一、二年前しょぼくれた評価だったのが、いきなり、さかんだのしぶといだのと変わったのは、どういう総括によるのかと名芸。大学

で島田豊氏の話きいてからではないか。

大学もあるし各劇団報告の内容もある。危機がなくなつたのでなく、対応する劇団の実践が具体的にわかり、運営委の頭が切りかえられてもいる。(ぼくが書いたせいもある)

創作劇の章。

重苦しい沈黙を、例によって萩さんが破る。「吹雪のうた」と「夜明け前にうたえ」の評価、議案でやるべし。「夜明け前」の古さ、二〇年前の古さ、これでは駄目なのだ。創作の基本、悩んで体をぶつけて書く、その構えがみえぬ。停滞はすでに長い、必要なことをはじめる時期なんでものじゃない。「日本ガン文オベラ」「元禄中野村犬政談」飛翔のころみなど感じられない、等々。

仙台。ヘタでも創作劇は劇団のエネルギをつくる、そこにメリットがある。四日市。今日のリアリズムとは何かがつかめなければ、書けないと言われれば、まさに書けない。しかし、八方破れでも書くしかない。(ウツカリ書けない、及び腰の感じ、気持わる)

矢野氏。書けない原因。かき手の非力、観客と共有できる素材発見の困難。劇団としての要求でかき手と重なれ、濃密に。「吹雪の

うた」幕切れのお芝居よくない、作者は何が言いたいのか、一般的解釈でなく大胆な実験精神が必要だ。

書くしかない。ぼくも然りだが皆書かなさざる。今日のリアリズムとは何かも、書く作業の中で手さぐるしか仕方がない。

レバの章。

レバは劇団の長期計画―展望の基礎、という発言(さっぽろ)。青年にフィットするところが、青年のことわかっていない。劇団の言いたいことと、若い人が面白く感じることの関連、つかめない(京浜)。

劇団の若い人と指導部のレバ選定基盤のちがいが、良い本だけでも……ではぐらかされる(仙台)。指導部が、議案書のいうところまで行っていない、どうしたらいいか出口なし(さっぽろ)。

岐阜。どうフィットするか、それは常に考えている。フォークの好きな若者達、それと入れ「ひしめき」は共感されている。

また、名古屋の「野麦峠」三千人あつめ、既成の本でもいいものは若い人がはいる。子ども劇場から、青年へ、又一般公演へ、系統的につなぐ意味で、レバ選定は重要だ。やまなみ。「河」初演で難しいと観客の声

あって、動揺。しかし、本の理解ふかめ稽古重ねる中で変化、実行委員会つくて五ヶ所の移動公演をすすめてくれたのは、若い観客だった。(レバを、ほんとうに劇団のものにする、ということ)

第一日終了にさきだつて、東京芸術座の東り演加盟を提案。銅鑼、青年劇場よりすいせん、東京芸術座決意表明。満場拍手で、同劇団の加盟を決定する。
このあと、交流会。
二二日前九時再開。

児童劇の問題など、ゼミ分科会にもちこめるもの除き、舞台成果、組織運営、経営、劇団の展望を一括討議。

展望は、単なる劇団の長期計画とはちがう。見えていないものを見るようにするのが展望、そこに東り演のはたす役割があると演集の指摘があった。(しかし、劇団の計画にもう一つ息の長い見とおしが必要だ。それなしに、東り演の展望はつけれない)

舞台成果にかんして、演出の重視が当然と受けとられ、論議もだが他面、役者やスタッフの強化も強調された。(さっぽろ・土の

会) 演出主導型の芝居づくりから、役者の主体性が失われ退廃をまねく、新しい技術、科学的の導入、また専門俳優との共演等々。

しかし、演出強化は殆ど全劇団の課題。とくに、開発途上(仙台の舟)劇団において切実。そこで、仙台、さっぽろ、湘南、京浜などから、演出を外から招いたブラスの経験が報告され、それは当然一定の説得力をもったのだが、一方四日市が若い演出者を設定し、皆でよってたかって信頼の中でそのひとを育てている状況とか、湘南が長い見とおしの中で新しい演出を生みだそうとしている努力とか、埼玉がプロットの日常的な交流を通して演出の強化を期待していることとかが、正当に評価されねばならないだろう。

また萩さんが、「血の婚礼」の汲田演出を引例して、稽古場の創造的充実―皆の力を結集した面白く、たのしい稽古場づくりを強調したが、速効的な方法をさがす前に地道に足もとを固めよ、との教訓であった。

三重県三劇団の地域での小まめな活動は、自然発生的な出発かもしれないが、舞台の質の変革にもつながる内容をもつ。参加者の感想などもふくめ、総括がほしい。こうした実践が昔のカッコつき文工隊と混同され、簡単

に否定されるようでは、お粗末すぎる。「決められたことが実行されない」に始まる組織の悩みは、言いだしっぺのふくしまだけのことではない。自由と民主主義は、本来ほくら創造集団のベースである筈だ。

組織問題に関連して、ほくらは健やかなサークル性の尊重を主張した。サークル性を打倒の対象にする考え方、反対。(この辺、こんな書き方では分るまい、又改めて) プロロック活動の章。

(全プロロック活動の要約報告) タチマエはにおいて、B活動だの交流だの、よその劇団の芝居みるだの、本音として必要感しているのだろうか。

埼玉。身を切る痛みで批判しあわない、オブラートに包んでいる。芝居みて何か違うというが、何かがなんだかつこまない。

京浜。東リ演は運動の柱だが創造についてはちょっと違う。過密スケジュールの中でよその芝居に目が向かない。仲間という実感が乏しい。プロロックが空洞化している。

土の会。東働演の活動がかなり活発にやられているし、芝居も見あっている。B活動をそれと別にやれない。 萩坂氏。以上の発言関東プロロックだが、B

活動の芯がない。誰が口火をきるか、自分がやるしかない、自分がよその芝居みるところから始めるしかない。サークルから専門劇団まで、本当は関東Bぐらい活動しがいのあるプロロックはない筈だ。

演集の丸子氏から、岡崎の芝居に誰も行かなかった、それがキッカケで中部に創造委員がつくられ、観劇交流が定着した。仲間芝居みれば必ず学ぶものあり、又見るのもクセ、見ないのもクセ、見つけられていると劇団の変化発展がわかり興深まる等の発言。

「演劇会議」の章。 萩さんの説明。論議ほとんどなし。

活動計画案(来年のゼミ、第二回演劇大学、プロロック活動、「演劇会議」他)、ほほ原案にそって可決。 后四時閉会。

ゼミナールに就ては、9月10日付「赤旗」に必要な最小限は書いたので参照されたい。 総会・ゼミを経過し、発展させなければならぬ事柄の多くは、二月開催の演劇大学にもちこまれた感だ。秋の実践総括も加わり、ゴッタ煮大学は賑わうことだろう。

どこで踏み止まるか?

——西リ演総会報告——

栗原省

(劇団・いこら)

は決して形式にはならないだろう。」ということも十分考えたいと思います。

(二) 劇団は真に創造的集団になっているか?

第15回総会。ところ・福岡志賀島荘。とき・東リ演と同じ8月20日21日。参加、28集団64名。新加盟劇団は尼崎の「劇団ファール」と福岡の「劇団道化」。総会に参加出来なかった劇団は西リ演32劇団中6劇団。

一、仲議長による基調報告にそっての問題提起

(一) 我々のリアリズム演劇とその大衆化の問題

いうまでもないことのようにですが、演劇の大衆化とリアリズム演劇とは相反するものではないと、この一年を振り返ってみると、

①観客数の減少②創造内容のよわさと共に③劇団のせまいワクの中でしか物が考えられなくなっている傾向も出ているのではないでしようか?我々の演劇を①もつともつと数多くの観客に②もつともつと生き生きとした、そして楽しい芝居を③地域の土壌にしっかりと定着させるために、だからこそリアリズムの追求がもっと厳しくなされるべきです。

(冒頭・東リ演こばやし事務局長より「大都市文化からは創造的なものはや生れない。演劇は本来地域に根ざして発展してきた。」と挨拶入講演?Vがありました。)

少くともブレヒトのいう「現実自身は広くて多様で矛盾にみちんでいる存在であり」「リアリズムとは「せまき」の概念ではなく「ひろさ」の概念である。「どんなに多様な方法で現実が描けるかがわかれば、リアリズム

この一年間の各劇団の上演レバをみると、西リ演加盟劇団の創造的姿勢の衰弱を指摘しないわけにはいきません。例えば劇団とのかかわりでつくられた創作劇は4本。(関芸「大枝の鬼」クラルテ「平家女護島」月曜会「仕立職人」大阪「けんさかん」)他には「演劇会議」掲載等の「東西リ演もの」(四

紀会「ひしめきあう不毛の季節から」大阪「豚」海の墓」息吹「河童証文」現代劇場「豚」赤毛ものでは演集和歌山「アンネの日記」道化「奇蹟の人」京芸「橋」坊やのお馬」やぎ・ファールの「イルクーツク物語」関芸「タルチュフ」どろ「第三帝国の恐怖と貧困」四紀会「女の平和」こじか座「人形の家」ファール「新しい自由を求めて」と大変多く、又「左翼名作路線」乃至「右翼名作路線」?ともいうべき「若者たち」「キューボラのある街」「無法松の一生」等々。その他児童劇も多くあるが計60本近い上演作品(25劇団の報告)中創作劇が4

本というのは決して積極的創造姿勢を示す数字ではありません。これをやればぐうけるだろう」というレバ選定の姿勢や知らぬ間に創造の基準をマスコミにおき、体制内で現状肯定的になっている点がないでしょうか？

これにはいろいろ原因も考えられます。生活と創造の仕事との矛盾。消費文化・退廃文化の影響もあり個人主義的風潮も生れて作品の出来よりも個人の演技だけを重視したり、劇団内の民主主義が確立されていなかったり、指導層が高令化し劇団員の生き／＼した要求がつかめなかつたり、又やりたいものはあるが創造的力が伴わないところからくる消極性もあるでしょう。とくにわれ／＼の演劇活動に対する企業からのフアッシュヨ的攻撃が、最近とくに強まっている点も指摘しなければなりません。なおこの問題はゼミナールで特別分科会を特設して十分現状を明らかにする必要があります。

(三)劇団が地域のたたかいかいにとって真に必要な存在となるような活動が創造的に行われているか。

私達の中には「地域」を単に地理的・行政

範囲としてのみ捉える弱さがないでしょうか？「地域」とはそこで私達が生活し、人間として生きる喜びと成長の土台であり文化と歴史がそこでこそつくられてゆく創造の場であります。その「地域」が破壊され、人間存在が侵されているのです。私達の地域の(つまりは生活の)今日の非人間的状況から生れる課題と、劇団が主体的に「これ以上一步も退けない」というぎり／＼のところから自らに課している課題とが、ぬきさしならぬ緊張関係としてとらえられるところから私達の創造が生れるのではないのでしょうか？

私達のリアリズム演劇は広範な観客に生き生きとうけいれられるものでなければなりません。かつて私達はかたくなといわれるほどに現実変革の「せめ手としてのリアリズム演劇の創造を主張してきました。今日それが現実変革ではなしに「現状肯定」の攻めではなく「受け身」の創造姿勢に後退していかないかという検討こそ、この総会でなされねばならない課題であり、これから一年間の課題でもあると思います。

私達は、我々のリアリズム演劇のこの混迷は一体どこまでつづき、どこまで後退するの

か？という危機感に立ってこの総会に臨みました。そしてそのことは何も西り演だけにあるのではなく、日本の文化のすべてに共通する民主主義の課題でもあるのです。

以上は仲議長の報告にそってではあります。が討議で深められたことも含め私の適当？な潤色があることをお断りします。総会は基調報告と事務局報告のあと特別報告「職業劇団のかかえてある問題」(京芸)「地域公演の経験」(きづがわ)があり、共に大変感動的なものでした。なお今年からはじめて「ブロック報告」が行われました。

二、ブロック報告からのぬき書き

九州ブロック：「道化」の加盟によってブロック体制が確立し運営委員会や事務局が決定された。ただし「九州」とは名ばかりで現在まだ「福岡」だけ。今後名実共九州ブロックにしたい。(高尾氏生活舞台の報告)

四国ブロック：現在松山だけ。高知、徳島、

香川の演劇状況をつかむため一周した。高知の「筏敷」「笛の会」が加盟の用意あり。

(野呂氏こじか座の報告)

中国ブロック：自分たちのやっていることが自分たちにわからない(もっこ)(兼清氏もっここの報告)

兵庫ブロック：音楽家や他ジャンルの専門家との提携がすんだ(四紀会)公演前に『星をみつめて』を中止し演出家が退団(荷車)うちの芝居をみにきたという理由で観客が職場から攻撃をうける事実(どろ)週5日稽古です(ファーベル)(合田氏どろの報告)

和歌山ブロック：創造活動は弱いにもかかわらず文化運動における地域での役割りは大きい(尾代さん演集和歌山の報告)

大阪ブロック：「きづがわ」の地域公演はごつい。ママさん劇団員中心の公演レバを組んだ(大阪)(杉本氏劇団大阪の報告)

京都ブロック：京芸は①京都の観客の立場に立った②実験的な仕事も③教育とむすびついて④京都の伝統に根ざした……という四つの基本方向を確認。劇団員を大事にしその能力を引き出すこと。若い劇団員を育てるため研究所を創設。(早見さん京芸

の報告)

三、討議で出されたいくつかの問題

(一)前進面

(一)劇団が地域の自分達の観客の中に一步一歩確実に根づいてゆき、一回の公演ごとに劇団そのものが一回りづつ大きくなっている(きづがわ・四紀会)

きづがわは以前の名は南大阪演劇研究会だったが地域を明確にし創造の原点をそこに求めるため「きづがわ」と名前を変えた。「若者たち」では地域の支持者が劇団からお願ひしないのに自分の方からピラくばりまでして必死に動いてくれた。その人達は自分たちの文化を「きづがわ」と一語につくるのだという意識に立ってやっていた。

劇団側ではその人達と稽古場交流や地域の合評会を重ねてきた。「立ちんぼうの詩」以来「若者たち」まで公演のたびごとに劇団の創造姿勢をきびしくして一まわりづつ成長してゆかねばこの観客の支持にたえてゆくことが出来ない現実出来るようになった。「お前ら大変熱心だが芝居はまあまあだ」などといわれたがいっつもでもそれでつづくわけは

ない。「きづがわ」と一語に木津川地域の文化を創るのだという観客に支えられ劇団は創造に対する自信をとりもどしてきている。現在「涙と笑いのある芝居」を眼目にしているが、いかにして「笑いの質を高めるか」課題だと思っている。(劇団きづがわの和田氏報告)

(二)創造団体にふさわしい主体的条件や体制をうちたてるために自分たちの稽古場をつくる劇団が増えてきていること。これは京芸・関芸・2月・クラルテ・人形京芸・潮流・人間座、道化等の職業劇団の場合は勿論必須条件であり、その他の非職業劇団でも当然のこととは云えるが、しかし大変なことであり、今日余程の覚悟がなければ出来ないことである。劇団大阪が約三五〇〇万円で「たたかひのとりで」を構築したことが西り演にとって非常に大きい刺戟となり、昨年今年に比べて未来、尼崎ファーベル、四紀会、わだち、福岡現代劇場が新たに稽古場を確保した。これらはいづれも月6万円から15万円に及ぶ家賃乃至経費と一定の購入費乃至改修費償却のための費用を捻出しなければならぬ。「芸術創造のために」どうしても毎月きちん／＼と必要経費は支払ってゆかねばなら

ない。生活を賭けねばならない。劇団活動がマンネリ化したり、停滞したりして会計が苦しくなればいよいよ劇団責任者や事務局員の個人負担となり不団結も生じようし、「芸術創造」どころか毎日の金策に疲れ果て重苦しくなったりすることは必然である。稽古場建設は劇団の創造理念さえ左右する可能性もある。さて四紀会では早速「二十一夜待ち」で稽古場披露公演と相成ったが、今後西リ演ゼミの中にも「稽古場公演について」一分科会をつくる必要も生じてくるのではなからうか。

(三)、「稽古場」の問題とも関連するが、各劇団とも、その力量を次第に蓄積しながら、5周年・10周年・15周年・20周年・25周年等々創造目標のフシをつくり、計画的に堅実に展望のある活動をすすめている。

例、更に(三)とかかわって「クラルテ」の一貫した創造姿勢の美事さがある。「お夏清十郎」(近松もの第四作)について西本事務局長は「人形劇の原点にかえて操作、姿勢、舞台機構とかかわりその歴史を追求したい。現代人形劇の手法で近松ととりくみリアリズム劇をつくってゆきたい。」と発言。

△問題点▽

(一)、私達は激動する情勢にこたえた、今日のリアリズム劇を創造し得ているか?

総会ではとくに「リアリズムと大衆化」にかかわって「きづがわ」の「#涙と笑いのあな」の芝居の追求」ということはとりもなおさず人物が何を一生懸命やろうとしているのか、ということの追求であり創る側自身が人物や状況をどれだけリアルにとらえ切れるかという「おもしろい芝居とは何か?」論争を中心として討議された。例えば未来からは「謀殺」の経験がふまえた「この劇は泣かせたり笑せたり芝居ではない。事件がどうなっているのか」という興味、ドラマが展開され真実が徐々に明らかになってゆくおもしろさ、現代劇場「豚」の公演から「この劇を徹底的に喜劇にしようとして成功した。劇をつくりごととして安心して笑えること、笑の中に#真実の生活#が表現されることとの関係がみえてきた」。劇団大阪「けんさかん」「ギャグ」をふんだんにとり入れても涙も笑いも出て来ない。それが目的化されている。四紀会「ひしめき合う」「題材で観客の泣き笑いを期待できない。#われくが高校生をどうみている

ち。自分自身が底のところまで現状肯定的にっている。熱烈に現状変革をねがう自己が、地域や職場で確実に息づくのではなく同化し稀薄になっている。」

というきびしい発言が今総会をならぬく主調であったと思う。前記創作劇の貧困(基調報告参照)もそこから生じたものであり、西リ演が総会から与えられた課題は実に重いものだった。

(二)、プロダクション活動の強化について

毎年かけ声だけかけてもだめ。リアリズム演劇創造における地域概念や創造内容を深めるため「プロダクションの組織化」(運営組織や事務局を確立)すること及び具体的活動について申合せた。

(三)、その他

規約を改正し会費値上げ決定、会計関係承認決定。綱領問題は「検討委員会」をつくり引つづき検討。「演劇会議」についての申合せ。役員は前年に引つづき次の人々を選出。

議長 長 仲 武 司(関 芸)

副議長 土 屋 清(月曜会)

事務局長 岸 本 敏 朗(四紀会)

以上

のか?ということが我々自身はつきりしなかったし、#どうしてもこの芝居をみてもいい。演劇的に共有したいというねがいが、それ自身がかみ切れなかったためしっくりこなかった。」関芸の新人公演の経験から「劇団の芝居ではみせない燃え方をした。自分たちが皆中心になりそれぞれアイデアを出し合いい事実舞台もおもしろかった。何かいつの間にか僕達が失ったものを#新人公演#で見せつけられた。」はぐるまのこばやし氏「創造的力が高まることで券売り(普及)にも燃えてくる。その相関係数の中で地域に根ざすということが具体性をもってくる。自分たちがどうしてもやりたい芝居は大衆の要求に合致しているものだ」等々発言の角度はさまざまだったが、月曜会の土屋氏が

「勿論やりたいものはある筈。しかし#創造的力がつけばよい#か?その前に#やりたいもの#のなみだ。#やりたいもの#という場合のそのなみだ空洞化しふやけて来ているという問題はないか?」「劇団荷車」が「星をみつめて」を公演直前に中止したことにかわって、あの「星をみつめて」は、幕開けの2週間前になっても集まらない。稽古場へくるには来ても芝居と別の話ばかりして



西リ演ゼミナール船上交流会

いる。ここから一步退ってしまえばおしまいだ……ということが作品の中味だ。もうこれ以上一步もひきさがれないという劇団のざりぐりの姿勢。皆がやるならやろうというのでなくどうしても、ここでこの芝居をやらなくては、それなしにはずる／＼後退してしまふというものがある。例えばわしの場合、創造の内容としては逆説的になるが#地域に根ざさない#どこでもうなずけるような芝居をつくりたいと思う。がそれをつくるためには#地域#にしがみつくと以外ない。毎日／＼一語に生きている人々の中にどれだけ我々の仕事や劇団が根づいているか?大衆社会状況におちこみ本当にそこに生きる自分自身を失っていないか?そこに不安がないか?#どうしてもやりたいもの#という時わしらとしたらどうしても広島だ。何十回/何百回/耳にタコが出来る程訴えてゆく。なぜなら被爆の実態が風化しつつあり、それをぬきにしては現代はあり得ない歴史が空洞化されようとしている。何ぼ肩がこるといわれてもわしらがそれにとりくまんことには、#」

と例のごとく自問自問して絶句したこと。及び未来の森本氏の

「このすごい現実感動もしない自分た

「職場における演劇活動の自由」について

——西リ演ゼミナール分科会から——

合 田 幸 平
(劇団どろ)

西リ演ゼミナールの当日、急遽「職場に於ける演劇活動の自由」というテーマの分科会が持たれる事になり、当初まったく予想もしていなかった訳ですが、劇団で起っていた問題をかかえていた時だけに、私にとっては大変嬉しい計らいでした。

もともと企業の労務管理体制が労働者の思想や行動や趣味、私生活にまで、こと細かに及んで、様々な圧迫を加えてきたこと、その中でも特に、文化的な運動への神経のところが格別のものがあり、演劇活動のようには、多数の人を対象として行なわれる「影響力」の強いものへの企業の敏感な対応も、これまた、今さら始まった訳でもないでしょう。

しかし、今回西リ演ゼミで話し合われたことで、かかえている問題の深さと広さ、それ

への対応の足がかりの様なものがかめた感があります。

私の劇団のことから入りますが、今年の五月「第三帝国の恐怖と貧困」の公演が終ったあと、M電機に勤務する若い女性の劇団員がケイコ場へ来るなり「もう演劇を続ける自信を失なった」というようなことをこまぎれに話し、いきなり泣き出してケイコ場を去っていったことがあります。あとで事情を聞くと、演劇を観に来た彼女の職場の友人が会社から攻撃され、それを聞かされた本人が、自分のやっている事がそんなに恐ろしい影響を与えているのかと、ショックを受け、これから演劇をやってもだれも観にきてもらえないのではないかと考えて、自信を失なっていることでした。

劇団ではこのことを重視し、再三みんな

ただ、「そんな事があるのか」というおどろきばかりで、対応のしかたについて意見を持ち切れない人達。もう一方は、大企業に勤めている「経験豊富」な古い団員、こっちは「そんな事はよくあるし、当り前のことだ、まあ気にせずがんばろう」という風な、これまた具体的な対応としては意見を持ち切れない人達がいて、実際にはなかなか討議が深まらないという状態があるという事に気付いたことです。又指導部の中にもこんな問題を余り話している若い劇団員の中には何も解らない人も多いし、かえて劇団の団結にマイナスになるのでは、という危惧もあつたりしましたが、しかし私たちが公演を持ち、わざわざ観に来てくださったお客様に迷惑がかかっているのだ、このまま放って置くことは、主催した劇団としては無責任ではないか、という事で、あくまでこだわり続けました。その中の話し合いの中で、今までそういう事で黙っていた劇団員の中から、「私もこう云うことがある」という事例がどんどん出て来ました。それぞれが職場の中で色々な圧迫や攻撃を受けながら、これまで一人一人が自分で「解決」し、というより、なるべく波風を立てないよう、こっそりとかくれて

演劇活動を続けている状態であることがだんだんと判明してきました。自分が演劇をやっていることを職場で堂々と云えない、したがって公演のチケットを売るのも、こそこそとやる。そういう事で普及も安易な方へ流れていく、そんな劇団の状況があることも浮きぼりになってきました。

私達が演劇を創るのは、いったい誰に見てもらいたいの為にか、本当に観てもらいたい人に来てもらっているのか、このまま、この様な状況を放置して、はたして今後劇団は存続していけるのか、そんな重大なことを内包している問題だという事がおぼろげながら明確になってきました。

そこで、私達はまず、二つのことを考えました。一つはそういう攻撃を二度とやらせない様にするにはどうするか。もう一つは、その友人、私達にとっては貴重な観客を今後とも劇団の公演のお客として維持すること、そのためにはどうするか。

ここまで話が煮詰った時、私達は、ハッとある事に気付きました。それは、私達が上演した演劇はいったいどういう意味があったのか、という事です。「第三帝国の恐怖と貧困」プレヒトが、あのファシズムの吹き荒れ

話し合いを持ったのですが、まずそこで問題になったのは、当の本人が友人への迷惑や会社での人間関係への悪影響を気にして、話し合いをすることすら望まない、という態度をとったことです。その友人に観劇したことを注意した人は、会社の労務の命を受けてはいるが、同じ職場の同僚の男性であるし、攻撃というよりは、彼女やその婚約者(彼女は婚約者と一緒に観に来ていた)の将来への忠告の形をとっていました。明らかに私生活や、余暇の自由な時間への干渉であるのですが、実際に被害を受けた本人がそうとは自覚出来ないし、おもうとしないという現実にはまずぶち当りました。彼女はそんな状態をそのままに、「自分がそんなに深く演劇というものを考えずにやっていたのが悪かったのだから、やめよう」と考えながらも、本当はなかなか演劇への未練をたち切れずにうじうじしている様子でした。

そして、もう一つの問題は、劇団内でこの事を話し合おうとした際に出てきた二通りの態度です。

一つは団員の中の学生や公務員や中小企業等に勤める人達で、大企業でのキビシイ実態をほとんど理解出来ない人達、したがって、

るナチスドイツの民衆に、その本質を明確に認識させる目的で描かれた劇。私達はそれを日本でも今、正に職場の中で自由や民主主義が踏みにじられていく状態を観た人に認識させ、闘うことを自覚させる為に上演したはずではなかったか。だとしたら、それを観た人が、いやそれを演じた彼女までもが、何故、現状の中で、それに負けていくような態度をとっているのか。私達の演劇がどんな力を持っているのか、いや持っているいなかったのか、まさまざと見せられた様な気がしてゾッとしたのでした。

そのことはさておき。私達はとりあえず、彼女に、事の不当性を認識し、闘う姿勢を持ってもらい、友人に意見をした人に会い「なぜ私達の演劇を観に来るのが悪いのか?」「なぜその様な事を云うのか?」を問い直すことを実行しようと考えました。そして片方で、その友人に劇団員の一人一人が手紙を書き、励まし、私達の考えを伝え、今後にも観に来てもらえる様に訴えかけることにしました。

その後数人の団員から手紙が集まって来、そういう動きの中で彼女もだんだんと自分と向き合い、劇団活動への復帰をはじめまし

た。
私達はそういう状態をかかえながら、西リ演ゼミに参加しました。

各劇団の参加者の報告は控え目でありませんが、各地でそれぞれの企業で演劇活動をやめさせる為のあらゆる大きな圧力にさらされながらもがんばっている姿と接触することが出来、まず何よりも大きな励みとなりました。劇団をやめなければ仕事を与えない。親戚や友人を通じての様々な働きかけ、経済的な圧迫。我々の活動を締め上げようとする力が、こんなにも強いのかという事を今更のようになり実感させられた訳です。しかし問題は、まだ、その様な状態があるという事が認識されたという段階にしか過ぎません。それに、劇団内で一人一人が持っている問題を出しにくい、全体の話しになりにくいと事も共通した意見でした。

◇附記・ゼミの最後に次の様な事が、当面の問題としてまとめられました。

①私達は私達の文化、とりわけ演劇活動を重ね、広めていく上で、特に職場において色々の圧力、攻撃がある事を自覚していました。しかしその事が各劇団の創造活動の中にどう持ちこまれていのか非常に疑問に思います。

②地域に根ざすという事の中に、職場にまずどうかかわっているかという事も大きな一つだと考えます。しかし、普及活動の中で、孤立化された自分を職場に見つける事はないか、その事をどう打ちやぶって展望を見い出すのか。

③自分が、あるいは他の劇団員がどの様に職場で疎外され、差別されているのか、余りにも無関心なのではないか。又は、演劇と無縁なものと思っていないか、劇団の中に掘りおこす必要はないか。

以上

続けていくために

東リ演ゼミ特別分科会の報告と雑感

汲 田 正 子
(劇団はぐるま)

特別分科会11は、当然のことながら、参加者の多くが若い仲間でした。
「私と劇団」——私などには、いささか漠然としたテーマに思われたのですが、そのかわり誰でも発言できるというよさもありました。劇団歴一年の人も二十年の人も、それぞれに語るべきことを持っているのです。

苦勞人らしい中沢さんの親切な司会と、穏やかな中にも風雪をくぐりぬけた気骨の感じられる山崎さんの助言に話はずみ、会場はしばしば華やいだ笑いに包まれました。

その話し合いが、企画の意図に添うものだったかどうかはともかく、参加者のすべてが、それなりに現在の自分をみつめなおそうとしたことは確かだと思えます。

はじめに、山崎さんが歩んできた道のこと、数年前につきあった壁のこと、それを

のりこえて「若い人たちと共に歩きたそう」としている現在のことを話されました。劇作家として、静芸という集団の指導者としての山崎さんが、どんな壁につきあたり、どのようにつら悩まれたのか——(若い人たちには理解しにくい点もあるという配慮からか)詳しくは言われませんが、その卒直な話しぶりに感動した人も多かったと思います。(私などは、そこをもっと深めていただきたい気もしたのですが、たしかに劇団歴一、二年の人たちの悩みとは喰いちがうことがわかるので、つい遠慮してしまいました。ついでに言うなら、それは中沢さんのお話——主として「コーカサス……」での役づくりにおける——についてもいえることかもしれません。経験ある(?)三人のチャーターが、自分のことを語る場合に遠慮がちでありすぎた

のではないかと、というより、私などが、もつと二人の先輩の話に自分なりの興味で、喰いつくべきだったのではないかと反省しています。この日の話し合いに、何かもうひと味コクがないと感じた人がいるとしたら、きっとそのあたりだと思えます。

山崎さんが、その話の中でくり返し言われたことの一つに、「続けることのたいせつさ」がありました。

後をうけた私が言いたかったことも、実はそれでした。十何年まえ、こばやしは「続けることこそ才能だ」と書きました。出産、育児、仕事、母の病氣……さまざまな条件を抱えた私が、曲りなりにも続けてこられたのも、仲間や周囲の援助と共に、この言葉にささえられたためかもしれません。私だけではない、当時はそれが劇団の合言葉のようなものでした。集団の結束が弱まり、荒廃した一時期には、「続けさえすりゃいいのよ」という自嘲的な反語に使われたこともありましたが、そんな時でも、言っている当人が心のどこかで、この言葉を信じていたと思えます。

続けること——そうです。創造の喜びを知ったばかりの若い仲間贈る一番はじめの言葉は、やはりこれ以外にありません。どんな

つねに
働らく人たちがともに
歩んだ作者の、劇団の
苦節二十年をここに

こばやしひろし 作品集2

劇団はぐるま創立20周年記念出版

収録作品 「書けない黒板」「つくられた英雄」「植の木」「豚」「ひしめきあう不毛の季節から」

装幀/板板晋治 頒価 1700円

○発行/演劇会議発行所

○申込先/演劇会議発行所 川崎市川崎区渡田4-11-3萩坂方 TEL (044) 333-0775

劇団はぐるま 岐阜市西野1丁目 TEL (0582)65-1852振替名古屋4525

すばらしい素質があっても、半年や一年でやめてしまつては意味がないのです。私は三月ほど前に聞いた話を思い出していました。はぐるまの研究が定って言われる言葉は「とにかく三年は続けること。シバイの面白さがわかるのは、それから」だというのが。古株ではなく、近頃では若手から若手へひきつがれていくらしいことが、面白くも頼もしくもありました。さしづめ、今年の研究生にそれをいうのは、小道具をつくりながらその話をしてくれた三年選手のTちゃんあたりになるでしょう。

「私と劇団」——大きすぎるテーマに一本すじが入り、自己紹介やら現在の悩みやらが語られる中でも、「続けること」のたいせつさが、くり返し確認されました。

「入ったばかりで何もわかりませんが……」「むずかしいけど、とにかく楽しい……」職場の条件や家族の心配やら、いろいろ抱えてはいても、劇団歴一、二年の人はみずみずしい希望にあふれています。屈託ない口調がひとしきり続いた後で仙台小のHさんが、ぼそりと言いました。

「私は劇団入って五年ですが……続けていくってことについて、今……ほんとに困って

います。自信がないんです」

数年前、体あたりで演じた「島」のおきんと、あどけない素顔がどうしてもくつつかかったHさん。へえ、もう五年選手かと思つた時、この人の悩みがずしりと胸にきました。

「今までは、とにかく夢中だったけど……後から入ってきた人のめんどろ見なくちゃいけない立場になつても……実力なんてないし……他にもいろいろ条件がでてくると……」

同じような悩みをもつ五年組がもう一人いました。最前列でひざ小僧をかかえていた、すがおのKちゃんです。はぐるまの公演にもよく来てくれるKちゃんは、くりつとした瞳を輝かせて、いつでも元気そうな人でした。そのKちゃんが、「にんじん」の舞台をのぼせる沈んだ口調でいうのです。

「うちの劇団は人数も少ないし、指導者の伍藤もずっと休団してるんで……とにかく何でも皆で手わけしてやるしかないんです。私も今までは夢中で、何でもやりました……」

70演劇行動で「ぜんそくの街から」を書いた伍藤さんが休団してからのことは、人づてに聞いたことがあります。けれど最近のすがおは「ゆきと鬼んべ」で千七百人の観客を集めるなど、若々しい奮闘ぶりが伝えられています。

の女性が誰でもぶつかる結婚のことがあるのではないかと思うのです。結婚——これもまた避けることのできな大きな問題です。

はぐるまでも、今年、二人の女性が退団しました。「血の婚礼」の花嫁Mは十年、フラメンコのソロを踊ったFは六年の劇団歴をもつ中堅です。やっと本当の声がはじめたMの端麗な立ち姿と、ほんの一瞬だけれどドゥエンデを感じさせたFの踊りを胸に浮べると、思わず「むなしいな」と呟いてしまいました。業余劇団の宿命といってしまうには重すぎる現実が、そこにあります。

四分の三をしめる女性参加者を見わたすと、あらためて「続けていくこと」のたいへんさに胸をつかれます。結婚のあとは、出産、育児——疑いもなく女性だけに用意された、いくつかの壁がひかえているのです。むろん、そこをのりこえて進もうとしている仲間もたくさんいます。

結婚して、からっかぜから京浜協同劇団に移ったAさんは、少女のように若いママでした。息の長い活動を続けるためには？と問いかけるAさん、役者としての欲求不満や、マちゃん「血の婚礼」をつくったように、いつかは演出もしてみたいというAさんに、

るだけに、Kちゃんの発言はちょっと意外に思えたのです。

「うん、劇団は確かに活気づいてきてるんです。皆もがんばってるし。けど、何て言うのか……もっと……私自身の問題として、いろいろ……。それと、才能とか言うことも……」夢中で走りつづけてきた人間が、ふと立ちどまって自分を見つめた時の、灼けつくような不安——覚えのないことではありません。才能とか実力という捉えがたい言葉のもつ残酷さも、わかりすぎるくらいわかります。

創造者としての自覚とでも言えたいのでしょうか。入団いろいろ夢中で、のりこえてきた障壁とは、比べようもなく厚い壁です。けれど、そこを避けて通る道はありません。きびしく言えば、血みどろになって、その壁をのりこえた所からこそ、創造者としての出発がはじまるのです。私は私自身がぶつかってきたいいくつかの壁や、時には徒勞とも思われた長い道のりを思い、「続けることこそ才能だ」という言葉の重さを考えずにいられたら、五年めの迷い——には、もう一つ、おまけがあるような気がします。二人がそろって口をにごした「いろいろ……」には、この年令

私は何年前か前の自分や、何人かのはぐるまの仲間を重ねあわせてしまつたのです。

長女が生まれる前の私は、専従のいない劇団の雑用も含めて、文字どおり劇団活動がすべてでした。若い劇団の常として、慢性的な裏方不足から舞台にたつことは殆どなく、舞監助手やらプロンプやら、その合間には大道具の助手でした。紙はり、ノリ吹き、ミシンもかけられない家庭科ぎらいが、洋裁を習ったりもしました。そうした活動が無理だった（と医者は言いました）のか、何回も流産したあけく長女が生まれたのです。

それから十五年——子供を抱えての劇団活動は、予想以上にたいへんなものでした。いま奮闘している仲間をみても、そう思っています。たとえ家族の理解や周囲の援助があっても、です。京浜協同劇団のように、劇団ぐるみで保育にとりくんでいる場合でも、例外ではないでしょう。

公演の日に熱をだして楽屋に寝かされていた加納ちゃんの一人娘や、「タルチュフ」公演の前日入院した二才の長女が目には浮びましても、それがオムツがとれ学校へ行くようになっても、それなりの苦労はあるのです。小さい時から母親の留守になれている次女は、中

学生になった今でも私の顔をみると、きまっけ「お母さん、今夜どっかへいく？」ときき、「いかない」と答えると、ほんとに嬉しそうににっこりします。私のキップを一番先に買ってくれるこの子にとって、私の劇団活動は当然まえになっていきますし、子供劇場で役についたりすると、大喜びで声援してくるのですが、中学三年の時「私も両親のように生き甲斐となるものを見つけない」と作文に書いた長女も、小学時代は何人かの先生から「どこことなく寂しそう」と御注意をうけたものでした。

ほんとのところ「そんなにしてまで、なぜ？」と呟いたことのない母親劇団員がいるでしょう。Aさんにしても、きつと同じような壁にぶつかる時がくる筈です。どんなにいい条件に恵まれていても、そこでくじけたらおしまい。続けていくことは、ある意味で闘いそのものかもしれません。

私の場合は、二人めが生まれてからの一番忙しい時期が劇団の昂揚期と重なったこと、長女より一つ年上の娘をもつ加納ちゃんという先輩もったことが、大きな幸でした。「郡上の立百姓」「書けない黒板」を生み出した劇団は、いつ行っても活気があり、いつ

でも人手を必要としました。核家族で、夜の稽古に参加できない加納ちゃんが買ってきた、機関誌編集の手伝いも楽しい仕事でした。若い仲間の子供をあずけ、おっかなびっくり二人で広告とりにいったことも、今では笑い話になりました。改築記念公演の「夕鶴」のように、創造の喜びと怖さを身にしみて感じる機会も、時にはありました。

それにしても、出産前の活動に比べたら、確かにもう少しよい日々でした。たまたまどしい十五年の歩みの中で、焦らなかつたと言ったら嘘になるでしょう。同世代の男の人たちがしきりに羨やましく、出産前の、雑用にあけられていたように思える日々を悔んだりもしました。

考えてみれば、そうした焦りは、いくらか余裕ができてからの方がひどかったようです。久しぶりに演出させてもらった「白い晴着」の再演が、予想外に不本意なできに終わった時、胸の奥にたまっていたものがわっと溢れてきました。十何年かけてやってきたことの意味は？ つまるところ、現在の自分自身とは？ 才能は？ 創造的力は？ そう、HさんやKちゃんのぶつかっている壁は、(二人には無いけれど)、のりこえてものりこえても立

ちはだかってくる永遠の壁なのです。

「続けることこそ才能だ」という言葉が、複雑な社会状況の中で色褪せてみえた時期でもありました。入団いらいの仲間Sが、育児と転居のために退団したのも、この頃でした。「自分がやめるなんて夢にも思ったことがありませんでした。けれど今では落着いた気持ちでいます」決して落着いてないSのハガキを、くりかえし読んだ日々、忘れられませんが、ひきとめようにも、私自身が迷いの中にいたのです。

この時の壁は厚く、迷いは長く尾をひきました。正確に言うなら「血の婚礼」を演出する過程で、どうにかのりこえられたのだと思います。「血の婚礼」の長い困難な創造の過程については、すでに紙数もなく、ふれる余裕がありません。手短かに言うなら、仲間と戻りました。とりにかのりこえられたのだと深く、私をいやおうなく謙虚にさせ「白い晴着」の失敗もそれなりに領けるようになりました。再演というによりかかった安易さ、読みこみの浅さ、何よりも自分が先頭をきるつもりでいた傲慢さが、はっきり見えたのです。「カッコヨサ」をなくして学ぶ立場

に身をおいた時から、壁は少しづつ崩れはじめました。力量のある仲間に関まれて仕事のできる幸せをしみじみ感じました。雑用にとびまわっただけのようには思われた数年も含めて、劇団での月日がむだでなかったのだと、思えるようになりませんでした。

Aさんの話から、ついペンが滑りました。ゼミナール報告としては少しおかしいのですが、迷った頃のしょぼたくれた部分など、ゼミナールでは話さずに終わったので、あえて書きなおさずにおこうと思います。私もまた、コスモスの花群の様な、初らしい仲間達に「続けること」のシンドサばかりを強調するよう思われはしないかと不安だったのです。

仕事との板挟みに悩んでいる上野市民劇場の人の場合をはじめ、幾つか心に残る話題もあったのですがもう紙数がありません。いずれも続けていくための真剣な悩みでした。

司会の中沢さんが、しめくくりの挨拶をされました。今日の話しあいにはふさわしい中沢さんの言葉を、そのままここに借りしてペンを置きたいと思えます。

「皆さん、来年もまた必ずゼミナールで会いましょう。とりあえず来年のゼミナールまでは続けること」

京芸—その中に私はいた

△西リ演総会での報告のつけ足し▽

早見栄子

(劇団京芸)

一九四九年十月、劇団京芸創立。爾来27年活動を続けて来た京芸の現状報告とあれば、当然京芸の歴史を正確に説明する必要があると思うのですが、あまり自信はありません。それで、かなり私見をまじえて、京芸の歴史を考えて見ましょう。私は五二年入団ですからそれ以前のところは資料にたよります。

劇団は戦後の民主主義の昂揚の中で、強力な民主的新劇団を京都に作ろうという発想で生れた。最初、「京都演劇アカデミー」をつくり、三ヶ月の講座を進めながら、劇団の綱領、規約を練り、十月結成の運びとなる。メンバーは、北川鉄夫、岩田直二、北島三郎、を中心に、民主主義文学同盟同志、社大演劇部部長、青服劇場のメンバー、アカデミー卒業生 等30名位で発足。

戦前の新劇、プロレタリア演劇の伝統と

戦後の新しい新劇運動、自立演劇、学生演劇の経験が一つに結びついて、関西の民主的な演劇運動の拠点となった時期があった。(49年～53年頃まで)

仕事は多様で、総力を結集した。「一週間の記録」「検察官」「北京のどぶ」などの一般公演の他に、農村の小型移動、市内地域公演、学校公演、労働組合による移動公演、メーデー前夜祭等の構成演出等々。レパトリイは、ヒューマニズムの立場に立った親しみやすい作品が多く、形式も人形劇あり、民衆娯楽版ありで、普及活動を重視した劇団の姿勢が伺われる。

最初2人の常任、翌年の後半10人となって常任のみの公演体制確立。活動量飛躍的に増大する。

さて、その後世の中が変化するにつれて、京芸もその波にもまれることになるのです

が、一口に云って、適切な乗り切り方をして来たとは思えないと思えます。私なりに問題をはっきりさせるため、京芸の二十七年の歴史を5つの時期にわけて見ます。

- ①創始期 49年～52年
- ②岩田直二指導型の時期 52年～55年
- ③仲武司指導型の時期 55年～60年
- ④鎌圭介指導型の時期 60年～62年
- ⑤藤沢薫指導型の時期 63年～76年

①の時期については前述の通りで、当時の時代の要求と劇団側の意欲とが合致していたと思えます。

②の時期。世の中が安定して来ました。本当の意味でどんな劇団をつくって、どんな芝居をするか、方向を定めなければならぬ時期にさしかかったと思えます。創始期のピークは「検察官」「北京のどぶ」でした。その成功を基盤にして、創造的に専門劇団としての力量を身につけようとする企画「ワーニャ叔父さん」は、惜しくも挫折するのです。

そのことについて、後見のように京芸をみてこられた故谷口善太郎さんは、京芸20周年の文集でこう言っています。

「『北京のどぶ』の成功は、そのあとに、

二つの意味を残したと思う。一つは階級的立場をはっきりもった民主主義演劇としての成功であったが、もう一つは、日本の新劇団の中での京芸の位置を、これを機会に定めようとしたのではなかったろうか。岩田君がその後『近代化を通らねば』という問題を、劇団に提起したのは、そのことかかわっていなかったらうか。ところが、そのことについて討論が、岩田君と、若い諸君との間で、自由にやれなかつたように思う。——と。

そしてこの頃は幾つかの問題を曖昧なままに残して、今も評価がつかかかっています。

例えばその一つに、その直後おこなわれた演出部長の選挙のことがあります。芸術評価をぬきにしたあるグループの組織的な投票で岩田氏を除外したやり方などには、私などは大いに腹立たしく思ったものでした。

③の時期、仲武司は指導者がやめたあとの混沌の劇団を吹田にうつしました。関西規模で劇団を考えようとしたと思えます。創造的立場としては、創始期の劇団の原点にかえり、京都の地域住民の喜びや悲しみを劇化しようとし、その中で「西陣の歌」が生れしました。そして「西陣の歌」は好評の中で100回公演を記念することになります。しかし「西

陣」の成功が劇団の次の発展につながるにはあまりにも劇団としてのつみあげがなかったと思われまふ。創造的にも、経済的にも。

この時期、京都の他劇団との合同公演がしきりに行われ成果を上げます。又夜の部の劇団員もどんどんふやして力の拡充をはかろうとしていました。

時は昭和三〇年代。戦後経済は復調し、世は高度経済成長をめざします。安定してゆる一般庶民の生活と、今日食べる米代に頭を痛める劇団員のくらしとのギャップ。そしてテレビの開局。

この状況の中ではっきりと職業体制をとりされる劇団にどうかと討論が右往左往しているとき、そのスキを狙って、また別の方からの火の手がさがりました。非常任劇団員の中の「西陣の歌」に代表される京芸の創造をよしとせぬ人たちがです。

「西陣の歌」のナチュラルイズムでは真実を描けない。生活が今のように貧困では豊かなバイタリテイのある現代の人間は描けない」といって中心的な仕事をして来た劇団員を攻撃しました。古い劇団員はまた有効にこの意見とたたかえませんでした。その結果、これまでの活動の結果出来た借金100万円

を、古い劇団員12人で10万円づつ分担させられて、はっきりとした論争はまま、常任体制を解くことになりました。当然のこと、旧い劇団員は生活上の問題を表面に立てて、次つぎと辞めて行くことになりました。

この時期、人形京芸は、人形劇ジャンルの専門化と職業体制の確立をめざして劇団京芸より独立。人形京芸の二十五周年の文集にはこうあります。

「あらためて私たちは劇団とは何かを考えはじめた。観客と劇団とのつながりとは何か、舞台上の表現は、観客の要求をみたすものになつていくか、新しい劇団員を養成しているか、ときびしく点検しなおさなければならなかった。」「子どもを守る運動や、教育運動、その他たくさん民主運動の中に身を置くことによって劇団の位置を見出したとき、私たちはトンネルをぬけていた。」

④の時期。年4回の一般公演をめざして夜稽古の体制。今迄常任だった劇団員は職がなく、夜中パン屋で働いたりして、昼間「乗鴨」を稽古し、中学校移動等していました。

レバトリイとしては、「ロシア問題」「反応工程」等、そして、やはり芝居に対する考え方、感じ方がしっくり行かず、非常任夜体制のグループとの訣別を宣言し、「ひかり学園」に移ります。

メンバーは、藤沢薫、岡崎繁、早見栄子、増永昭人、恵島良樹、中内道子と研究生6、7人でありました。

63年。ひかり学園に移って、先づ最初の仕事は、「装甲列車14-69」。スタニスラフスキー生誕百年合同公演。上野仙吉再入団。土曜劇場で10月「嫌われ者」(作・東川宗彦)「日本と朝鮮を結ぶうた」。12月「三年寝太郎」。全員再建の意志に燃えており、小さいながらも生き生きとした舞台でありました。又、京都の民主的文化センターとしての役割を果たすという気持ちもうけつがれていて、月曜会の「河」(作・土屋清)京都上演を、オルグと舞台をふくめて全員が手伝うといったことが無理なくできた時期であります。そして再び昼間活動に復帰します。

64年。土曜劇場。「駅裏」(作・浅野良二)その後、広島及び京都での集会で上演。小沢文也、織部千恵子入団。

65年。「獅子」「テントからの報告」(作 岡崎繁) 京都公会館にて上演。「獅子」は大津、彦根労働例会となる。土曜劇場。「貨物船武勇丸」(作・東川宗彦)。

職業化の第一歩として、児童劇、学校公演再開。「プレイメンの音楽隊」(作・諸井)潤滑な出来上りとなり、評判。全員オルグで頑張る。上演中、幕の間から子供の反応を見て喜ぶ。「天満のとらやん」を赤旗びらきで上演。とらやん役者仙吉は大人気を博す。「とらやん」「佐渡狐」「テントからの報告」等で小集会公演に積極的になり組み、職場とつながりを持つとうとする。映画「テントからの報告」を企画し、自主製作、自主上映にとりくむ。

このあたりの記録を見ていると水に放たれた魚の様な感じがあります。60年から抑制されたものが、エネルギーとなって放出されたのでしょうか。入江和再入団。10名余の人員でよくこれだけのことが出来たものです。が、今思うとこの時に京都でどういう劇団を作るか、冷静に考えねばならなかったのではないのでしょうか。職業体制をしくかどうかも含めて。創造面に対する打込みは真剣そのものでありましたが、経

営面、劇団員同志の間柄は実に仲よしサークル的であったようです。例えば「プレイメン」の公演が和歌山できました。久しぶりの移動公演でみんなについて行きたいというわけです。「行きたい人は全部つれて行こう」という意見が殆んどで、「それでは採算がとれない」と言った私の意見など、誰もきこうとしないといった有様だったので。

69年。金曜劇場ふたあけ。「狐とぶどう」上演。好評。高校公演巡回。「プレイメン」継続。小型形式移動公演継続。佐々木從、波多野光一等入団。経営部岡崎、事務局山田の専従を置く人員充実す。

67年。「雪崩」(作・下戸明夫)「牛鬼退治」「狐とぶどう」を上演。上野、中川、生活と劇団活動のバランスがとれず退団。織部千恵子結婚して退団。代りに山内じゆん子、橋本和子、八尋の3人入団。

68年。「でっち上げ」(作・沢田あきら、小沢政作)。「雪崩」改作。丹後、北桑、舞鶴、島根で上演。京都府下では熱狂的な感動を呼んだが、島根では普遍性がなく、あまり受けず。「金魚修羅記」(作・黒沢参吉) 京都労働例会。人間座と合同公

演。労演にかかるといので堅くなったのか、作品の受取り方が観念的になって、労演会員の評価が真二つに分れ、藤沢、演出ノイローゼ気味となる。「狐とぶどう」「牛鬼退治」巡回継続。京都府による府下中学校移動公演始まる。リアリズム演劇研究所開設(人間座と合同)。野崎善彦入団、大いなる戦力。この年、移動公演のスケジュールをめぐって、藤沢と岡崎激しく対立、両者一步もゆづらず。オルグは創造者の心を知らず創造者はオルグの苦勞を知らず。劇団づくりのはっきりした青写真をひいていないので大変感情的なってしまった。結局、高校一校ことわる。

69年。「赤い陣羽織」。一般公演。高校巡演、府下府民劇場。児童劇「コントラスト物語」(作・増永)。金曜劇場「カルラールのおかみさんの銃」狂言「ぶす」。「赤陣」は労働者の生活を基盤にした大衆性、たのしさ、はりつめた意欲を。「カルラール」は、観念の切れ味のよさ、新鮮さ、役者の熱気を、観客から買われたが、劇団の内部での評価はあまりなされず、納得する所まで話合われなかった。総じてこれより先、上演作品に対する討議が対立す

ることが多く、まとめがはっきりせず不十分な上にも不充分になって行く。リアリズム演劇研究所より、加藤小夜子、高橋松代入団。福島伸夫、内藤陸入団する。この年、中途半端な常任体制による経済的矛盾顕著になり、岡崎退団、商売を始める。恵島は教文センターを根拠に、裏方の組織「アートステージプロ」を始める。山田退団。松井氏の好意により、敷地80坪、建物40坪のプレハブ住宅を月賦にて購入、淀へ城を移す。

70年。合同公演「どん底」。文化芸術会館こけら落し。研究会「炬燵」。一年間、朝一時間の勉強会の成果として、若者だけで取り組む。本格的に役づくりに取り組みそれぞれ個性的な役をつくる。外の評判もよく人形劇団の研究生触発されて、これより研究生だけの発表会を毎年持つ。されど内部の評価悪く、若者たちケチンとなる。山内、内藤、高橋、退団。70演劇行動。「7つの挿話による二部構成」。人間座、自立劇団と共に上演。中学移動、「白い晴着」「悪党」(チエホフ)。「赤い陣羽織」で移動の予定が、急にレパートリーさしかえとなる。入江オルグショックを受け

敗れて退団。「ひやごたん」がやれて本当によかったと言いながら……。総会は異常なふんいきとなる。後援会発足す。

藤沢指導型による25年の中で、創造的に最も華ひらいたのは、「獅子」から「いたち」までの7年間で、人員も拡充し、5、6人の人間が創造の中心を担当し、舞台上火花が散っていたと評する人が多いようです。そしてその次の4年間、こじんまりとして来たが、気持良く見られたと。

レバは「にんじん」「ひやごたんの杼」「小狐」「アンネの日記」「トタン」の穴は星のよう。二十五周年の記念公演「森は生き一度に噴き出して、舞台創造にまで影響を与えようになります。

創造の成熟期に京都の状況を知り、自分たちの力をはかり、劇団の主流として目ざす仕事をさせ、職業体制をしくことが是非か、はっきり見定め、エネルギーを統一していたらと、それが口惜しい想いです。今は、「京芸」の名前や、やって来た仕事にこだわる時ではないかという思いがしてなりません。若し私が一観客であつたらこう考

るでしょう。

- ①現代に生き、ヒューマンイズムの立場にたつた京都を代表するような劇団がほしい。
- ②その形式は問わない。現代に生き、その矛盾を強く描きだしてくれる劇団がほしい。
- ③学校や地域で子供のための仕事をやる劇団がほしい。

そうした劇団が京都に存在してくれたらと思います。後援会の若いメンバーにどんな芝居が見たいかと聞いたら、「共感する芝居。触発される芝居。」という言葉がかえってきます。劇団の常駐メンバーは現在、四〇代3人、二〇代8名です。

子どもたちのことを考えるには未だ力量がないので、とりあえず、①か②の線をとくりに考えたいと思います。②の場合の主人公は完全に若者です。かつて、岩田、北川が若者と劇団を作ったように、新しく青春期の劇団を創り出そうというところでありましょう。

青春から充実に入ろうとする所で、失敗をくり返して来た私たちの劇団であるので、そのことが気がかりだが、肝腎なことは何に向って一緒に血が燃やせるかということにあるのでしよう。

るが、市内中学校移動に取り組み、成功する。「朗読と芝居の夕べ」(チエホフ、斎藤隆介他)。「いたち」(作・真船豊)一般公演。府下移動。市内では大人のこつてりした芝居といわれたが動員悪く300名位。出演者の中で、自分は切符は売らず、人にも売らなと進める人間が出る。府下ではおとり(「いたち」の登場人物)は敵と白い眼でみられた。入江退団。浜村恵子入団。

71年。「ベトナム、沖繩そしてわれらは」(作・大橋喜一)。「ぬは・はつえの物語」(作・赤木三郎)府民劇場。「賢女氣質」(作・田口竹男)合同公演。「にんじん」キャンセル騒ぎ起る。荒田康代、市原やす子入団。増永退団。稽古場支払い不能になり、コーヒー二千個売ってきりぬけ、やっと自分のものとなる。周囲の人がよく協力してくれた。劇団員勇気づけられる。

72年。「ひやごたんの杼」府民劇場と府下。長年認められ下戸明夫の作品や々と完成。久しぶりに千名以上の動員。「赤陣」以来である。「小狐たち」(作・リアン・ヘルマン)人間座と合同公演。「にんじん」続演。この年の総会で、小沢経営部長、佐々木事務局長、福島財政部長、闘い

今年の仕事としては「狐とぶどう」中・高校公演。創造的に全力投球してみようということを取組んだが、未だ50%の仕上げです。ねばって頑張ります。研究所、俳優養成に今までより本格的に取り組んでいます。外部の講師、茂山千之丞さん等にも手伝ってもらっています。二月、文化芸術劇場京芸公演をやります。今やっている仕事の中で、お互がぶつかり合って来年度の方を出したいと思っています。

以上、長々と書きましたが、総会で私の報告した話が、現象的で判りにくかったと思うので、この誌面では無理とは思いましたが、劇団創立からの問題点を書いて見ました。62年、72年までをくわしく書いたのは、藤沢指導型になってからの京芸で、成熟期に、何故もっとよく考えて置かなかったかといううきやしきがあるからで、その前後の劇団の動きを、少しでもわかってもらえるようにと思つたからです。それ以前の歴史は参考程度に考えてもらつたら有難いと思います。劇団員が共通して燃えられるものを見つけない。若者に期待したい。財政にふりまわされたくない。そんな気持で一杯です。

東り演における専門劇団とは

岡 部 政 明

(演劇集団・未踏)

東り演ゼミの分科会「専門劇団」に参加したので思いつくままに。

分科会はむし暑い屋内や炎天を避けて緑蔭の竜口寺瀟椽で行われました。複雑で重苦しい内容とは裏腹にまことに爽やかな、すがすがしい環境でやられたわけです。参加者は、劇団さっぽろ一名、演劇集団銅鑼一名、青年劇場三名、東京芸術座二名、未踏から私。それに地域劇団の静芸、世仁下乃一座等の人達、そして特別参加として、こばやし・ひろし氏が加わり、およそ十二、三名でした。

テーマの「専門劇団の課題」について追究する角度は色々ありますが、先ずは新劇人会議の機関誌「新劇人」9号の特集「作家からの便り」(これにはこばやし氏も寄せています)で、月曜会の土屋清氏が「日本の新劇全体の体質がもはや反体制的でも反商業

とらえて論議を深めていくことこそ急務ではないか—というような意味の附言をされ、そこからスタートしました。

ちなみにここで今回の総会議案のうち、専門劇団の項として、次のような報告と提案がなされていることを紹介しておきます。

「専門劇団グループは、前総会の提唱をうけてゼミの一分科会を組織し、東り演における活動のありようを討議し、それは今年もひきつがれていますが、従来曖昧だった位置づけがはっきりと明瞭になったわけではありませんが、

創造の基本、観客との関係など総論での差異は専門、非専門の間にはないといえますが、具体的な各論に入ると違いがあり、またその違いを認め合うところから連帯もできるのです。

この一年東り演は、統一劇場、東京芸術座、文化座、新人会等呼びかけを行いました。今後専門劇団の加盟は増加していくでしょうし、それが双方と全体の利益であるのも自明のことですが、それには各論まで行き届いた合意が必要です。現在のところ、地域劇団主体の東り演に、専門劇団が客演格で加わ

った感じがないとはいえず、それは本来のありようでないからです。

専門—非専門をとわず、といった非現実的なことではなく、双方の性格と任務と条件を明らかにし、対等に要求しあえることが最も大切で、そこから、日本演劇の民主的発展をめざす東り演として積極的な共同作業が可能になります。」

さて、色いろな発言が飛び交いました。創造上の理念、或は運動意識そのものについては、参加の5劇団共、おおむね共通し、大きな差異があるとは感じられませんが、各劇団の活動方針、運営、機構、体質等については当然のことながらかなりの違いがあります。

たとえば活動方針一つとってみても、その実態は、ある劇団はその劇団の存在する地域を主な活動エリアとしている。ある劇団は、北は北海道から南は沖縄まで全国を、或る劇団は全国公演を希求しながらも、それにみ合う諸条件がととのわず一定地域がその範囲、等々です。従ってそれに伴って、運営・機構・体質等もそれぞれ異なるわけです。又自明のことながら集団の歴史、構成員の数、そのキ

アリア等々についてもそれが云えるのです。ですから新劇全体の状況認識という意味では一定の一致した見解が出て、つまり、今や

日本の新劇全体の体質が、反体制的でも反商業主義でもない云々については、たしかに全体を覆う風潮という傾向というか—としてはその認めざるを得ないという一致した見解が出て、そこから先のことになる、それ

ぞれ(各劇団)多少の、そして微妙な差違をもつようです。ここにいくつかの発言を例にとるならば—

A「もはや新劇は反体制的でも反商業主義的でもないという認識が『常識』として定着しつつある、つまりそういういわば曖昧模稜とした存在になりつつある風潮、傾向だからこそ我劇団はその『常識』となりつつあるものに抵抗している。そのあらわれとして、レパートリーの選択・決定に、集団の運営・経営に、機構の在り方に、日夜苦慮している。

又新劇人会議、東り演なりをテコとして、或はベースとして、そのいわゆる『常識』をくつがえす、またははびこる『風潮・傾向』に歯止めを喰らわしたい。」

B「それはわかる。しかし又一方で、理念意識がたとえば反体制的であっても、運営・経営的には商業主義的にならざるをえない現実。この矛盾をどう受け止めればよいのか」

A「……………」

B「矛盾は矛盾として仕方がないとするのか。それともその現実を直視し、それを克服するあくなき追求をするのか」

A「無論、後者だろう。しかし、その方法は気が遠くなるほど非常にむづかしい」

C「そう。だからこそ、多くの劇団がこの問題で苦悩し、試行錯誤を繰り返しているのだろう。現にここでも問題になるのだ」

D「うん。それはわからないわけでもないが、しかし矛盾は矛盾として割切らなければ、ニッチもサッチも行かないんじゃないかな。その為に活動が鈍るんじゃないや」

B「いや、何もそのために活動がぶるなんて言っちゃいけないよ」

D「あそうか、これは失言。とに角ウチは旅公演が多いせいとか、売りが買いの関係は大問題、何しろ劇団経営と構成員の『食う』問題もかかっているのだから」

B「売りが買いの『食う』こと、イコール商業主義的と、短絡に問題にしてるわけはないんだが……」

D「何にしても、『新劇とは一体何だ』に

対しては、今日の余りにも複雑、多様化している状況の中で、いろいろなとらえ方ができるとしても、明解に、「こうだ」と言い切れないのではないか」

B「しかし、こういう状況だからこそ、より明確な創造理念・運動意識・体質が要求されるのではないか。要は『社会の認識』という問題だと思いが、このことについての学習は、それぞれの劇団でどのように行われているのだろうか」

E「ウチでは特に学習という機会をもうけて、そのための勉強をするということはしていないが、集団に主体的にかかわるといふ積極的な姿勢をより強くながすことを含め、社会を鋭く正確に認識させるために幾つかのグループをつくり、それぞれから自主企画を提出させるシステムをとっている」

F「何も特に学習会をもつ必要はないのではないか。ウチの場合、宣伝・普及活動が多いので必然的にいろいろな地域に行き、多くの各界・各層の人々にあいよく話し合い、交流を深めている。このことが非常に有意義な学習になっているのだから」

C「そう。特別に学習会なるものをもたなくても学習の機会はいくらでもある。たとえ

ば公演体制で一つの作品と取組む時、その作品を理解し、かかわるために社会をより認識する学習が当然要求される。さてこの辺で先ほど出ていた『食う』問題や、まだふれられていない観客の問題にいかがではないか」

G「ウチは『食う』問題については、どうにかうまくいっている」

B「運動意識との矛盾はないか」

G「いまの所、まあまあ、ない」

F「ウチはたてまえとしてはその方針でやっているのだが、全員が『食え』るという状態ではない」

等々発言はつづくのですが、以下は「新劇人」9号の「若手放談会」の発言と酷似した内容のものでした。

つまりは、創造理念や運動意識の問題よりも、生活の問題の重みが大きくのしかかってる雰囲気でした。まさに現実の一面を如実に示していると感じました。

また、新劇人会議、東リ演なりをテコとして云々という発言がありました。本当にテコたりうるのか。良い意味の『せめぎあい』の場『たりうるのか。そうするも、しないも、一にかかって我々の今後の課題だということも含めて……」

最後に、対観客という観点から、地域劇団と専門劇団の問題について示唆に富んだこばやし氏の発言を紹介して終わります。

「地域に根ざして二十年。漸く観客が見えてきたように思える。観客が見えるということは、この地域しか活動の場がないおかげと言っている。こうした観点から見ると、日本の新劇運動は根無し草のような気がしてならない。東京で二、三週間上演し、あとは全国を移動して廻る劇団の形態が諸外国にあるだろうか。」

日本の特殊性を考えても、こうした移動劇団の時代がいつまでも続くとは考えられないし、演劇本来の姿から見ても間違いのないような気がしてならない。演劇は、村芝居の時代から地域に根ざし、地域に依拠して創造を生みだしているものではないだろうか。業余劇団では限界があり、地域の要求に応えられない。

強力な地域に依拠する専門劇団が生れたらどんなに心強い。これこそ運動を本当に民衆のものにする仕事だと思ふ。拠点をもった演劇が必要な時代に入った。私はそんな風に考える。」

モデル上演分科会

のてんまつ

萩坂 桃彦

この分科会が不成功（もっぱらの評判）におわった責任のかかりの部分は進行介添役を務めたぼくが負わねばならぬだろうと思う。もはや取返しがつかぬ乍らあれこれ考えてみた。

参加者は名簿では29名ということになっている。後半の頃は話らなくなって抜けた人もいるらしく、それでも20名位は車座になっていた。上演劇団湘南アートシアターの北島淑江（ジェーン）岩田さとし（ムーニー）石橋宏（演出）の三氏を難壇に据えたかたちになって、時間の節約も考えてそのほかの人は自己紹介を抜きにした。（これがそもそも良かった）

先ず、モデル上演を観ての印象ということから始めたが、全員まことに点が辛い。僅かに静芸の西瀬太氏あたりから北島さんの体当

りの演技の評価や京浜の細田寿郎氏あたりから、湘南としては精一杯やったのではないかとのおさえ方があったが、いづれにしてもそこから先どう進めるかが難しいことになった。

「坊やお馬」の上演意義と創造過程についての演出担当の石橋氏の報告は、「『解釈上』では銅鑼の山田善靖氏に教えられ、『稽古の仕上げの段階』では劇団の貞包巖氏に負うという中身であって、自ら受けて立つという意味では可成弱かった。弱すぎた。そのことで参加者の発言が可成恣意に流れたことは否めない。

しかし、テネシイウィリアムズという作家に関してのことや、「坊やお馬」という本の捉まえ方や、上演スタイルの探求（演出）の問題は、それ自体非常に興味のあることであり、この苛立つ夫ムーニーの現状脱出に未来があるとするかどうかなどは深い興味を呼んだのだ。湘南は、簡単に言って「救いの劇」としてこれを描いている。これに対して、この状況にはもう抜け道がないのだ、だからこれは一種の喜劇だとする説。ぼく自身や後者に属しながら討論の渦中に入っ

た。そして石橋氏の作り方は非常に微温、観

念的であり、ムーニーの表現などに到ってはリアリティがないときめつけ始めたのである。年甲斐もなくうろたえ気味になって、発言を促すのにも挑発的になったりした。

話は湘南の基盤を離れると、各人各様の高説が出て来、京浜の細田氏あたりからは、演出と俳優の仕事というものは密室の仕事であり、出来上がった舞台は観客との関係で成り立っているのだから、こういう形でもやかくする次元のものではない、とくにゼミのモデル上演の観客ほど悪質のものはない、という根源的な問題まで提起されるに到っては、とてもこんな席では論議しすぎるものではないということになった。一しきり、モデル上演の分科会の在り方がとり交された。

いづれにしても、「坊やお馬」は成功した舞台ではないという結論が、午前中に出てしまった。はぐるまの藤本昭氏などもこつこつとそれを説明していた。

ではもう一回、全員が演出や俳優になってこの戯曲を逐一、観た舞台と照応させ乍ら解明してみようということで午後の部に入った。これがまた間違いのもとであった。

午後から、湘南の代表者貞包氏が出て来

た。どうやら、昼休みに、午前中のモデル上演分科会で湘南の人はいじめられっぱなしだということに耳にして、他の分科会から脱け出して急遽参加したような様子であった。

早速、殆んどの人が持っているプリント台本に即して、幕開きのフニイド・インから始めたのだが、座が白け切っているのに気がついた。つまり、もう一回、岩田さとし、北島淑江、石橋宏の三氏を魚に、湘南の舞台の酷評になりかねない気配になったのである。

そこで当然、貞包氏の発言が多くなった。石橋演出は湘南で、今度初めて育てる意味で起用したので皆さんの批評に耐えるものではない。しかし、いろいろと皆さん仰有るけれど、そういう皆さんのお仕事も拝見してみなければならなくなる。つまり、彼は午前中の経過を知らないで、俗でいえば居直ってきただけである。

モデル上演がこき下ろされて、じゃお前さんのところはどうか、となると話は簡単すぎるけれど(勿論あの貞包氏がこんな卑俗に出た筈もなかったが、結局)わが分科会の決着はこんなことになったのである。

この云い方では身も蓋もないけれど、ぼくのチューナーとやらの仕事の失格ぶりを示す

にはこの方がいい。

しかし、実は多くの真意は別にあったのである。ぼくは、一般観客に見せた初演(マリオフラッティ「橋」を併演。ジョウジフの役で貞包氏が強かな演技を見せた)とゼミの時の上演と二回見ている。初演は、これはまだ戯曲のセリフづらを熱演で上無でしている感じ、そこに生活の描写が乏しかった。一つの話が、どう見てもムーニーとジェーンが夫婦に見えない。再演では殆んどが一新していた。よしよし、よくここまでこぎつけてくれた。特に北島さんの演技には、もの怖じせぬ必死のとり組みがみられる。これなどは是非、分科会でクローズアップしてみたいと心にメモしていたのである。

そういう意図であったにも不拘、自ら湘南こきおろしの先鋒に立った観のあるのは寔にザンキに絶えない。どうしてこうなったか。やはり、高所深所に立てなかつたぼくの未熟(この輪で)さである。

芝居づくりの実際からはなれてぼくは久しい。稽古の苦しさのしさも早や記憶にあるにすぎない。いつの間にか「批評家」になつてしまったのである。

「モデル上演」の分科会が、舞台の批評のサイクルで終始したのでは全く意味がない。

ひとつには、湘南は厄介な作品を提示してくれたとも云えただろう。テネシイウィリアムズを研究するなら別の方法もあるのだし、上演された舞台と観客との接点・劇団の位置づけの問題・経営の問題などもとぼしてしまつた。また分科会の参加者が演出者と俳優の混濁も事態をこみ入らせる。どうしても「演出家」めいた発言が俳優を抑えるのである。

よこはま青年座の松本栄氏のように実際にムーニーをやつた体験で、怖じけずに出してくるような例は、誰にもあてはまるというわけにはいかないだろう。俳優は口が重い。深所高所に立てなかつたぼくは、小さな気配りばかりして、分科会をつまらぬものにした。

わずかに、「モデル上演ということ」で金縛りになつていたが、幕あきと同時に、東リ演のお偉方も南爪畑に見えてきて吐が坐つた」という北島淑江さんの言葉は、そのことだけで、どれだけこの人が育つたかということの証しになって、或はこれがモデル上演の意義だったのかと自分に云いさせたりした次第だった。



関西における戦前プロレタリア演劇の研究(二二)

大岡欽治

大阪地方のプロレタリア演劇

日本プロレタリア演劇同盟

プロット大阪地方支部の活動

一九三二(昭和七)年 四

脚本検閲の実態

前号予告の如く、大阪戦旗座がIATB国際演劇デー記念公演において上演した久保栄作「ファッシュ人形」の台本が、如何に検閲において取扱われたかを、これから見てみようと思う。

一九三二(昭和七)年の日本の政治・社会が大きな変化をもって動き始めたことは、本稿第十八回(本誌三一号)に掲げた年表を参照して頂ければ、すぐ判ることであるが、この年二月の上海総攻撃開始、三月の満洲国建国

宣言、九月の満洲国承認という太平洋戦争開始の前奏曲が吹かれ始めた時であった。

従って、治安維持法という悪法を、いよいよ強力に使用して、人民の権利と自由をふみにじることを推進してきている時代だった。演劇面においては、先づ検閲の強化(前号においてふれた如く)によって制限、取下げ、却下、禁止など、演劇会場の取締強化と小屋主に対する圧迫による小屋賃しの困難、警察法による公演中止、公演禁止、俳優、劇団への弾圧強化など、あらゆる角度からプロレタリア演劇に対する圧迫は進められてきていた。

その内、検閲制度の強化は、一つの関門であった。その実例として、検閲済の大阪戦旗座の公演台本をもって示してみよう。先づ第一の例は

久保栄作「ファッシュ人形」である。これは、その時の公演に上演を予定していた三好十郎作「八月十五日に向つて」と、島公靖作「農民を救え」という二本のシュプレヒコールによるアジ・プロ劇の台本が禁止されたので、代りに検閲係に提出したものである。従って、この台本の受付は二月十日であるが、制限付許可の下りたのは二月十三日という異例の早さでもあった。

ところで、久保栄作の「ファッシュ人形」

最初に「久保栄全集」第一巻創作に出ていて「解題」(内山鶴)によって一応の理解をもつてから、実状を見よう。

「ファッシュ人形」解題

「ファッシュ人形」

一九三一年一〇—一月、日本プロレタリア文化連盟(コップ) 結成を記念する東京左翼劇場と新築地劇団の共同公演において「文化連盟結成万才」(村山知義)とともに「生きた新聞」の第二輯として上演された。これはドイツ・アジプロ劇の翻案である。

新築地劇団は、はじめプロットに加わらず、この年の三月に「プロット」加盟に関する「声明書」を発表。五月のプロット第三回全国大会ではじめて正式に加盟した。そして間もなく、コップ結成を機に「風の街」(キルシロン)と「生きた新聞」第二輯をもって左翼劇場との第一回共同公演を行なったのである。一方プロットは、この十月に開かれた第四回全国大会で国内的にはコップ加盟、国際的にはムルト(国際労働者演劇同盟II A T B)加盟が決議され、劇団単位の技術幹部組織「劇場同盟」から、個人単位の大衆団体「演劇同盟」に組織がえした。

翌三十二年二月には、大阪戦旗座が構成劇場とナッパ服劇団の協力のもとに「ファッシュ人形」と「装甲列車NO1469」(イワノフ)を上演した。後者は、東京では何度か上演が計画されながら禁止されていたもの

で、検閲で大幅にカットされたといえ、日本では唯一の舞台であった。さらに同年三月、構成劇場の公演にも「ファッシュ人形」はとりあげられている。

脚本は、三十二年一月、雑誌「プロット」(プロット機関誌) 創刊号に「文化連盟結成万才」とあわせて掲載され、のち選集N「林檎園日記」および「テアトロ」五十七年四月号におさめられた。台本は残されていない。ここでは選集を底本としたが、二四八頁三行目八ええ、待て、待て、待て、待てたら。Vは「プロット」では「まあいい」であった。「テアトロ」は選集と変らない。

〔上演記録〕

東京左翼劇場・新築地劇団 第一回共同公演のうち
一九三一・一〇・二八—一一・一一
於 築地小劇場
大阪戦旗座I A T B 記念大公演(構成劇場・ナッパ服劇団助演)のうち
一九三二・二・三—二四
於 今里劇場
構成劇場 一九三三年度第二回公演のうち

一九三二・三・二六—二七
於 港館

(左翼劇場(大阪戦旗座)構成劇場)
演出 村山知義 九木芳夫 渡辺三郎
大岡欽治
装 置 村山知義 浅野猛府 吉田太郎
照 明 外山秋一 大山・小林 小林孝一
宮原
舞台監督 西郷謙二 小寺 健 小島正一
人形売り 伊藤晃一 吉岡義夫 吉岡義夫
〔版権〕
「プロット」一九三二年一月創刊号(発禁)
「久保栄選集」N一九五二・五 中央公論社附「あとがき」
「テアトロ」一九五七年四月号 KKテアトロ 附「再録する小形式脚本について」
「久保栄全集」第一巻創作 一九六二・八・五 三一書房 附「解説」

「ファッシュ人形」検閲の実体

今、手もとに残っている戦旗座公演台本の正式検閲本によって、そのカット制限をみることにする。当時は、日本紙十行野紙に複写

したものを袋綴にしたもので、台本は二十頁となっている。

〈表紙〉

戦旗座公演台本

久保栄作
ファッシュ人形

申請者 大阪市北区中野町

三丁目九三

工藤義夫 団

検閲側の受付印

(尾崎) 印

大阪府 七・二・一〇 №二八五

保安課

制限(織田) 印

〈註〉 上演台本は「プロット」一九三二年一月号掲載のものよりとっている。

以下は、検閲台本によるカット箇所を棒線によって示して行くが、現行「久保栄全集」第一巻所載の頁数を付記しておく。

〈検閲台本〉 (全集第一巻)
(1) 二頁四行 (二四三頁九行)
赤の集會

(2) 三頁二七行(二四三頁一一一—一五五行)
………といてえが、ロシアはいけねえ。ついでこの間でも、あの国の腕っこの人形作りが、仏蘭西から原料を仕込んで、産業党人形でえ素晴らしい珍型を拵えたんだが、眼のねえお役人にかかっちゃ、耐らねえ、こんな代物を売りひろめちゃ、社会の秩序がみだれるってえんで、おさしとめになつたという情ねえありさまだ。だから、あの国は別として、欧米各国津々浦々の果てまでも、羽根が生えて飛ぶような売れ行き。

(3) 四頁八一〇行 (二四四頁六一七行)
………手前の味噌いえ、何？、そんなものは、こちとらの仲間ちや流行らねえ？何だつて？ プルジョアの旦那に値を好く買ってもらえって？——しょうがねえな。……

(4) 五頁五行、六—七行 十行 (二四四頁九・十・十一行)

(5) 六頁十行—七頁二行 (二四四頁十八—一四五頁一行)
丁度その頃イタリで、ボルシエウイキ会社発売の鋼鉄製の赤人形が禁止を食って、その人形を売った奴も、散々お上のお叱りをうけた跡だったから、瞬くひまに……

(6) 七頁五・五・六・七行 (二四五頁二—三—四行)
………中々このお百姓とか小市民とか、とか赤い色の嫌いな頼もしい手合はしきりと、こいつを珍重したもんだ。ファッシュ人形、又の名を独占資本主義の突っかい棒という位だから、セルロイドはセルロイドでもかけ値なしの頭丈一色……

(7) 九頁一—四行 (二四五頁二—四行)
………大抵気の利いた奴は、このファッシュ人形の骨喝押売りの一手販売元になる。も

検 閲 済	大 阪 府	劇第 285 号	昭和 7 年	2 月 13 日	期年	織 田 印	
		昭 和	7 年	2 月 13 日	期年	織 田 印	
		有 効	効 式	有 間	効 式	織 田 印	織 田 印
		検 閲	官	検 閲	官	織 田 印	織 田 印

一、朱線の箇所削除スルコト。

制 限

以上が検閲の結果であるが、台本の最後の
一頁は、次の如くなっている。

「……もうだいぶ前のことだから、廃兵、遺族の扶助料もできるだけ削りとり、下級官吏や下っ端軍人のお給金も切り取って、小の虫を殺して大の虫を生かそうてえ魂胆……ま、こういったあんばいで、この資本主義の世の中に、社民人形だ、ファッショ人形だと、あとからあとから種々さまざま流行品が現れて、つかいか棒のお役目をつとめるから、赤人形の効能書きに書いてあるような夢みてえな話はなかなかもって通用しねえ。何？——こんなセルロイド人形が突っかい棒になるもんかって？」

10 十三頁三行 (二四六頁二〇行)

「……何？、そりゃ、ブルジョアだけの安全だろうって？——よけいな半量を入れちゃいけねえ。……」

11 十頁七—八行 (二四六頁三—四行)

「……赤の宣伝演説よりや、いくらおもしろいか知れやしねえ。ドイツっえ国は、……」

12 十一頁三—七行 (二四六頁七—九行)

「……失業保険の引下げをやりながら、それでも一方ちゃ、でっかい巡洋艦を造ったり、赤い仲間のメーデーを押しつぶしたり、何とか戦士同盟さえ恐しい結社を解散させたり、いや八面六臂の働き振りで金融ブルジョアにさんざ御奉公をしたが、もうこうなるってえと、……」

13 十二頁八—九行 (二四六頁十六—十七行)

「……世界の不景気もここまで来りゃ、もうブルジョア民主主義の議会政治のってえ、まだるいこい事を言っちゃいらねえ。ちつとやそつと横暴呼ばわりされても、……」

14 十六頁一—四行 (二四七頁十六—十八行)

「……ええ、うるさい、うるさい、むこう見ずの赤の連中が、民衆の不平不満につけ込んで、とんでもねえでたためのお説教を並べ立て、拳國一致の足並をかき乱し、労働者に仕事をサボらせるからだ。——仕事をサボるからドイツ全国の生産力が衰える。……」

15 十六頁九行—十八頁六行 (二四七頁十六—十八頁十行)

「……で、この手前どもで宣伝中のファッショ人形のありがた味は、国粋主義が看板、日本で国も、この国粋保存てえ思想にかけちゃ、世界万国に劣らねえはずだが、——何？——ファッショが国民主義的で排外的なのは、侵略戦争の準備だって？——ええ、待て、待て、待てたら。とにかくこの、小うるせえ議會を飛び越した「緊急命令」という奴で、一方じゃ株式会社や有価証券の税金を引下げて今の世界の大量物金融ブルの懐ぐあいを楽にして、景気の立て直しに御尽力を願う一方、一般民衆にもせいぜい辛抱してもらい、世界大戦

16 十五頁五行 (二四七頁十三行)

「……日本でもそうだが、ドイツの国も失業者の大洪水だ。……」

次は、第二の例として

戦旗座公演台本、戦旗座文芸部作「仁吉と娘」の検閲を取り上げてみる。

この検閲は、昭和六年七月六日に、大阪府警察部保安課に提出され、七月九日に制限付で検閲済となったものである。

「仁吉と娘」解説

戦旗座公演台本、戦旗座文芸部作「仁吉と娘」は、本当は正統ではない。それには次のような事情があったのである。

この作品は、実は、小野宮吉作(小野は築地小劇場の演技部員であったが、築地の芸術的態度にあきたらず、前衛座に参加、後に東京左翼劇場、プロットの指導者となる。関鑑子氏と結婚したが病没した)「早鐘」という戯曲で、プロレタリア演劇初期の時代の農民劇である。

東京での上演記録は

- 一九二七(昭和二)年六月 前衛座 佐々木孝丸演出
- 新潟県葛塚町にて農村移動公演を企画したが、上演禁止となる。
- 一九二八(昭和三)年十二月

大阪での上演は

- 一九三〇(昭和五)年十二月 大阪戦旗座 九木義夫演出
- 一九三一(昭和六)年三月 「早鐘」 泉南加納公会堂 全農主催 大阪戦旗座 九木義夫演出
- 同 七月 大阪市小ホール巡回 「仁吉と娘」と改題提出
- 大阪戦旗座 佐野春日座
- 一九三二年十二月 大阪戦旗座 多田俊平演出
- 大阪・大江ビルホール

最初は、小野宮吉作「早鐘」として提出許可が出たが、二度目の時は却下されたので、戦旗座文芸部作「仁吉と娘」と改題して提出。制限付にて許可が下りた。現在ある検閲台本は、佐野春日座にて上演した時に提出し

たものである。

「仁吉と娘」検閲の実体

大阪戦旗座公演台本

戦旗座文芸部作

現代劇 仁吉と娘 一幕

大阪府保安課

(昭和) 六年七月六日(受付)

NO. 1460

制限 織田 〇

台詞削除

(1)「こないだの太平橋の騒ぎの様にサーベルがガチャンと鳴れ。あお終えた。暗えとこへぶち込まれるのが関の山じゃねえか」
(一枚目裏)

(2)「だからと云って、今さら這えつくばって、元の鎖につながれた日にゃ、牢屋へ入った二十人の者の前に、どの面さげて出られるだ」(九枚目裏—十枚目表)

(3)「手前の生命あねえぞ」(十枚目裏)

(4)「朝は五時から夜は十時迄」(十五枚目裏)

(5)「一足だって外へ出られるじゃなし、手紙は皆封をしない前に、監督がしらべて、ち

よっとでも会社の為にならねえ事が書いてありゃ、呼びつけて目の前で書き直しさせるだもの」(十六枚目裏)

(6)「ただ、お前ひとりのうっ憤を晴らしただけ、世の中はびくとも動かねえ。おら達小作人ばかりでもねえ、弱いふんづけられた人間、みんなのうっ憤は、みんなの手ですっかり勘定しなくちゃならねえ」(二十枚目裏)

(7)「おら達が二度とこんな目に会はねえ様にするにゃあ——おら達の力をどこまでも強くして行かなきゃならねえんだ。」(二十一枚目表)

(8)「合図があり次第、おら達は皆一辺に、ミノカサつけて出かける事になってるだ。見ろ、茂助は、もうその用意して来てるだ。」(二十一枚目裏)

(9)「仁吉ミノカサをつけて」(二十二枚目表)

(10)「おら達の仇と一緒に、お前の仇もうってやるぞ」(二十二枚目表)

(11)「農民歌」(歌声)「(二十二枚目裏)

以上が、科白ト書の削除箇所であるが、他

る人々が消えて行く現実を、じっと見つめることは堪えられない思いである。

三人の思い出、記録を残したいと書きとめてみた。

三人の方々の冥福を祈る。

伯井紫郎(谷紫郎)のこと

一九七六年三月十五日、東京で死去した。私がそれを知ったのは、葬式が済んだあと三月下旬だった。

伯井紫郎が、プロット大阪支部、大阪戦旗座に在籍していたのは、いつからいつまでであったかは明らかでない。

私の年表で調べた処は次の如くである。

- 一九三一年(昭和六)三月 於大阪市内 大阪戦旗座 労働者ニコニコ大会
- 小野宮吉作「仁吉と娘」に出演
- 小作人木村仁吉……谷紫郎
- 村山知義作「馬鹿の療治」に出演
- 医師の助手……谷紫郎
- 三好十郎作「おまつり」
- スキヤップ……谷紫郎

一九三一(昭和六)年五月 吹田・朝日座 大阪戦旗座

に「制限」として
一、農民歌、メーデー歌等は歌わざること
二、襷笠、鉢等を用いざること。
の二項が付加されている。

検閲済の印には

劇第一四六〇号 昭和六年七月九日

有効期間式年 検閲官 織田

となっている。

(〇〇〇)

附

なくなった

伯井紫郎・久板栄二郎・八田元夫

三氏をいたむ

今年になってから、私の周辺の知人が次々に、あの世に旅立っていった。

それを知るたびに、次第に淋しくなっていく気持ちをどうすることも出来なくなってしまうのだ。

本稿を書き出してから、この歴史に関連す

局、党コップ責任者、文化連盟大阪支部所属、職業無」

これを「大阪地方労働運動史年表」と対照してみると

「昭和八年の『文化・科学運動』欄(一八八・九頁)に次の如き記事がある。

文化運動の全面に弾圧
7・12 大阪地方文化団体内の共産党フタクを一せい検査、北野照夫、工藤義夫、米沢哲ら、つぎつぎに検査起訴。この前後文化団体の活動ほとんど半非合法となり表面より姿を消す。」

に関連する。
当時の大阪のコッププロットの状況は追って書いていくが、プロットには大きな打撃だった。

その後の消息は不明なのだが、戦後、彼は東京へ居を移し、小企業の会社を経営していたが、その内に、かつてのコップ関係者で大阪から東京へ転居した人たちを集めて「大阪会」を結成、ニュース発行の責任者となった。やがて私とも文通するようになった。また彼は「大阪戦旗座史」を書きたいとも言っていたので、私の書き足りない点を補足してもらえると期待している内に、本年二月に、

彼の故郷、大阪の富田林に祖先の資料を尋ねているうちに取材した記録を中心に「慶応二年富田林村方惑乱記」一冊を書き上げ出版したのが最後だった。

細長い身体でつぶやくような声だった伯井繁郎はもう見る事が出来なくなった。

四月になって伯井夫人から頂いた手紙で彼の最後の病状を知ることが出来た。

最も多難な時代を共にした大阪の同志を失ったのは誠に残念である。

昭和八年検挙の時、二四才とされているから、私より三才若い六十七才だったのだ。

久板栄二郎について

六月九日、突然新聞に劇作家、シナリオライター久板栄二郎氏の死去の記事が発表された。一九二五（昭和五）年に、ナップ（全日本無産者芸術団体協議会）の関西オルグとして、東京左翼劇場員だった久板さんが大阪に転在して、関西のプロレタリア文化運動の指導に來られた。私が久板さんにお目にかかったのは、昭和四年三月五日、東京で衆議院議員だった山本宣治先生（私は山本先生の大学での最後の生徒だった）が、治安維持法改悪

に反対したためにファッショ団員に刺殺された事件があり、十五日東京と故郷だった京都で労働者が、全国の労働者農民によって行われることになり、その五日前に急遽結成された日本プロレタリア劇場同盟京都青服劇場に参加して、有名な「山宣追悼劇」を上演することになり、大阪戦旗座と京都青服劇場が協力することで宇治の花屋敷に参集した時が久板さんとの初対面だった。直ちに企画をたて、稽古することになり、久板さんを主体に脚本の共同創作が進められ、当日私は裏方となった。それが起縁でその年、青服劇場の小公演を行うとき、久板さんの「餓死隊とピケット」を「父」「早鐘」などのアジプロ劇の演出の準備をしたが、京都警察の保安係や特高の策動で、会場が貸りられず中止しなければならなくなった。しかしその年の十月に、東京左翼劇場の大阪・京都での関西初公演が実現することになり、村山知義作「全線」（「暴行団記」を改名された作品）を予定して、大阪戦旗座、京都青服劇場（共にプロレト加盟劇団）の援助で上演することになり準備を進めてきた。

ところが、その「全線」が上演禁止になったので急遽ゴリキイ原作「母」をとりあげ

ることになり、脚色を久板さんが受持ち、私は青服劇場員として、演出の佐野碩の助手として参加することになった。また上演に際しては人手不足もあって、久板さんは獄吏となって監房を見回る役に扮して、房前を靴音高く歩き回った印象は、今でも生々しく思い出すのである。

その後、久板さんは東京に帰って、左翼劇場の文芸部員となり、プロレタリア芸術家同盟・トランク劇場の時代から書いていた小型戯曲から次第に長篇戯曲を書き初めるようになり、国際労働者演劇同盟（IATB）のモスクワでの演劇オリムピヤードへ、日本代表派遣員としてプロレト代表として参加メンバーの一人になった。その時の上演脚本として久板さんの「北樺太油田」は築地小劇場では上演禁止、モスクワ派遣は許可が下りずに実現しなかった。さらに、左翼劇場最後の公演のための「畑の安治川」も上演禁止となり、今日まで闇に葬られているのである。

プロレト解体以後、東京では新劇団の大同団結論によって創立された新協劇団に参加、戯曲作家として新しい段階に入り、「断層」を始めとして「北東の風」「百万人と誰も我行かん」「神聖家族」などの創作劇によっ

て、リアリズム演劇の系列に沿った代表的作品を書き、劇作家としての地位を確立した。

その作品の内、「断層」は、大阪でも大同団結によって結成された大阪協同劇団でも取り上げることになり、久板さんから上演の許可をえて三六（昭和十一年）年に私が演出・上演することが出来た。それから四〇（昭和十五年）年八月の新劇団解散という悪法治安維持法による弾圧まで、戦前新劇の最後まで闘ってきた。

やがて、戦後の活動の再開と共に、シナリオライターとして頭角を現わし「大曾根家の朝」「わが青春に悔なし」「女優」「破戒」などの秀作を残し、戯曲面では「親和力」「巖頭の女」「赤いカーディガン」「原理日本」の他藤原三代記三部作の二番目「西行と秀衡」を最後としたのである。

そして、もう一つの仕事として「小野宮吉賞選衡委員会」の代表として、リアリズム演劇の発展のためにつくしてきた。

この日本のプロレタリア文化演劇の先駆者として残した功績を思うとき、全く惜しい人失ったと深い敬意を表したい。今年の年賀状に「なにとぞよいお年をお迎え下さい」と書かれていたのに、惜念の想いにたえない

思いである。

戦後派の演劇人も、もう一度、久板栄二郎の足跡について考察することを望みたいものである。

八田元夫について

八田元夫、モッチャんも死んでしまった。丁度、劇団潮流の「霧の旗」の稽古が、いよいよ本格的に始まろうとする時だった。九月十七日の夜遅く、稽古を終って、帰りの電車の中で夕刊を見ていたら、私の眼に飛び込んできたのは、写真入りで報道された八田元夫氏死去という処であった。下車して、今工事中の駅の下を深く掘っている未完成の国道を飯橋から見下す心も眼の中も真黒だった。長い間、そこに立ちつくしたあと、私はやっとな「霧の旗」を八田元夫に捧げようと決心して家へと歩き出した。

思えば、昭和二年、京都で始めて、八田元夫、山川幸世と私という三人の演劇的出会いが始まったのだから、五十年の新劇仲間だった。戦前・戦中・戦後を通じて、会う機会は余りなかったにしろ、会えば昨日も会っていたと思える仲だった。

彼も自伝などに、この三人の出会いのことを書いてるし、私も山川の追悼文で、本誌にもその事を書いた。

「悲劇喜劇」に連載された自伝（抄）の「演劇莫迦の足跡」が未完で終わったのが全く残念だ。

告別式に配られた「八田元夫・略年表」を松本克平さんから送って頂いて、ほぼモッチャんの全貌が示されていると思うので、今はこれ以上書かない。

いづれ機会をみて、実践の人モッチャんの思い出を綴ってみたいと思う。



劇団通信

アンケート依頼の要領

- ① 八月総会・ゼミ参加の感想
- ② 最近の公演活動
- ③ 明年二月位までのスケジュール
- ④ わが集団の問題点

その他

(通信はほぼこれに準じて答えてある)

劇団北芸

皆さんごぶさたしました。春の小劇場№7「出口なし」はこの誰が何と云おうと成功しました。大成功までにはいきませんが、「大なし」が問題です。

目下№8の準備中。作品は井上ひさしの「道元の冒険」より文芸演出部構成の「本末もみな偽の九十九髪おもひの乱れ一夜」。(№9に例の「熱海殺人事件」を検討中)とところが僅か二人の貴重な男優のうち北山権也がバレエ公演に特別出演(?)したり、有馬聖吾が照明の仕事でとられたり、果ては二人

共、目下「チリー一九七三年」の実行委員会事務局員となり、多忙極まる状況下で四苦八苦。

劇団はかねてより創立周20年記念作品として創作劇「アナマ収容列島」(仮題・北方漁民の現実と領土問題)をすすめています。思うように進展せず、いろいろ。文芸演出部三人の共同作業で叩き台の第一稿を書くことになっていますが、その大筋が発表された途端にダメ。劇団の創意とかなりズレていることと一人よがりが見えすいため徹底的に叩かれてチョン。チーフ交代して諸充が青くなりつつ総意を作品化するのにやっき中。前チーフのソ連女監視とのラブロマンスまである壮大な大河ドラマから、「ピカの薩から」的なごじんまりした中にもどーんと迫り得る地味な作品になりそう。それが「劇団の総意」なのだと、肩たたかれながら諸充氏懸命にやっております。(北村)

劇団支木

① 八月総会・ゼミ参加の感想―各分科会での感想は大へん良かったです。今後つづいてほしいです。特にモデル上演は担当の方は大変苦勞をするかもしれませんが、続けていって

もらいたいと思います。

②と③に関連して―最近の公演活動は、テネシウィリアムズ作「ロング・グッドバイ」です。現在、よみの段階です。来年一月一五・一六日、3ステージをもつことにしました。

④ わが集団の問題点としては、三ヶ年計画と題して、観客動員数、レバの問題、ケイコ場建設などが織りこまれていきます。この三ヶ年計画を成功させることにより、劇団支木のより大きな発展を、九月の臨時総会で確認し合いました。

劇団ふくしま

① 八月総会・ゼミ参加の感想―ゼミの分科会や分散会の人数が多すぎる。初めて行く人はどうしても発言しづらくなる。一部の人たちだけの発言みたくなる。少くとも8-10名位の人数にして、本当にゼミらしい討論の場にしてほしい、というのが全員で確認し合ったことです。

② 最近の公演活動―目下、基本訓練と脚本の分析、行動の線をおさえるための学習をすすめており、参加者は生き生きとはじめられている。だが完全に結集している人員は6名とな

った。しかし、未だサークル的発想の残存が認められる。けい古場が月一万円で定着したことが成果。また、他の場所も検討中。

③ 52年(一九七七年)2月頃までの計画―12月3・4日(金・土) マリオ・フラッティ「橋」「奴の風平」(多田徹作)を第9回公演として上演。於福島県文化センターホール(3ステージ)。1月下旬、県演進交流会に参加予定。「奴の風平」は地域巡回したいと、検討中。

④ 劇団ふくしまの問題点―演劇を趣味として考えている者が多い。革新的な考えを持つ人々の中にさえ、演劇は暇人がやることだという者が多く、そういう中でわが集団の活動を深刻にうけとめて、こつこつはじめている。全く振り出しに戻った感じである。

(福島市笹木野梨下14-13 嘉藤方)

東京協同劇団

① ゼミでは実行委員会の事務局を担当しましたが、手落ちが多くてごめいわくをおかけしました。ご協力ありがとうございました。

② 第31回公演は金芝河作・小田健也脚本演出・安達元彦音楽で「金冠のイエス」―ソウル三文オペラーをとりあげました。5団体60名の合唱隊の協力を得て、まったく新しいドラマ

マを創りたいと思います。11月17(水) 18(木) 川崎市労働会館。11月24(水) 26(金) 川崎市立高津市民館。12月6(月) 7(火) 8(水) 横浜・教育会館。そして久しぶりの東京公演は2月3・4・5日労働会館です。これまで私たちが体験したことのない形式と規模にやささとまどいながらも、「言わずにはいられない」衝動と作品の新鮮さに魅かれてすさまじいとりくみをしています。仲間みなさん、是非観て下さい。

(川崎市幸区古市場二一〇九)

劇団潮流

いつもお世話をおかけいたしております。劇団の近況は10月1・2日に松本清張作・寺島アキ子脚本・大岡欽治演出の「霧の旗」を上演し、ほっとしているところです。今回は俳優座から松本克平・清水良英両氏を客演にたのみ、去年より一層、いろいろと勉強になり、舞台成果もあがったと思っております。さて、これから年内は、移動公演がピツリつまっております。「左の腕」「鬼だいいこ」がそのレパートリーです。

年明け早々、新春お手玉公演として、1月5・6日、大阪郵便貯金会館で「鬼だいいこ」の一般公演を行います。それと嬉しいニュー

スは、劇団の支持者の熱い要望から、「劇団潮流後援会」が愈々発足。10月16日発足総会をひらいてもらうことになりました。益々張りたいとハリキっています。(藤本栄治)

(大阪市西成区松一七七一六)

福モーターブル内

演劇サークルやぎ

① 初めてゼミに参加しました。夜行の往復という強行日程でしたが、参加者の心意気に我々も大いに燃え、エネルギーを身体一ぱい吸収して帰りました。「仲間がいる」「アッ、あいつ俺と同じことを考えとるやないか」「お前もか」。初めて会ったのに初めての気がしない。来年、又会おうぜ。

② 九月四(土)五(日)日、尼崎ファーベル「イルクーツ物語」に協力参加。於尼崎文化会館。

③ 十月下旬と十一月中旬、市内小学校。十二月十九日伊丹市立中央公民館のスケジュールで児童劇「ジャックと豆の木」(脚色・筒井敬介・やぎ文芸部補色)スライド紙芝居「ごんぎつね」(作・新美南吉)を公演。十二月下旬、サークル総会。

④ 編集スタッフの皆様お疲れサンです。がんばって下さい。(宇間太郎)

(伊丹市千幡字船原20-9坂上)

前略。私的な問題で新住所などを知らせるのが遅れ大変御迷惑をかけたことを詫言びます。「聴耳頭巾」公演後、集団内部で「集団のあり方」などを検討。3ヶ月にわたって基礎訓練と演劇の実際の二部に分れ、集団運営をしてきましたが、この間に新たな問題点などを総括。12月17・18日の両日、民文フォークグループ・おけらによるフェスティバルを計画中です。なお「おけら」は宮本研作「人を喰った話」を上演することになりました。今後ともよろしく。誌代は後日郵送します。

劇団つくし (水戸市元吉田一六八四荒井俊夫方)

①ゼミの感想とに角熱く長いゼミでした。「児童劇について」の分科会でのチューターとして責任を充分果たせなかったことが一番よくやまれます。東り演の各劇団の児童劇に取りこんでいるキャリアがまちまちで、まだ児童劇について特別な考え方をもっている劇団が少なく、全体として話し合うためのたき台がもちにくく、参加劇団全体の討論になりにきれなかったのが残念でした。(望月27号)

◇弘演第十三回公演「泰山木の木の下で」(作・小山祐士、演出・青山司)の稽古中です。公演日は十月二日、弘前市民会館です。◇第十三回公演が終了次第、総会の準備に入り12月中に劇団総会を予定しています。同時に春の小劇場(三月か四月)に向けて活動が始まります。(秋本博子)

劇団十年実 (弘前市品川町一)

①ゼミに若手一名が参加。若手がハッスルできたという報告有。
②10月22・23日青少年会館小ホールに於て5周年記念公演、創作劇「酒を飲みながら死にたい」(作・瀬戸洋)。11月6日同作品を隠岐島の隠岐高等学校公演と一般公演を行います。
③明新春自演速大交流会に参加。現在自演速企画中の大阪府とのタイアップで「自演速フェスティバル」の推進。予定は来年五月頃。そのための取組みを計画。
④より大阪的な活動に発展させるための自覚を各自にどう身につけさせたらよいか。小回りのきく小劇団として確立。若者を定着させること。

(大阪市平野区喜連東三の六32-101)

多数の仲間が全国で活動していることを知りこれからの劇団活動に励みになった。(野添女24号)

②最近の公演活動 10月24日富士宮市「秋の子供祭」野外劇上演。10月31日三島市「親子ファミリー劇場」公演。11月21・28日山梨県南巨摩郡四会場四ステージ公演。「三びきの子ぶた」他。
③その他 来年劇団創立25周年記念公演のため、今年は基礎訓練を積上げているので新作はありませんが、基礎練習の中の班活動から生れた寸劇が各地で好評を得ています。(富士宮市西町20-2)

中野勤演

①夏の東り演ゼミには新人を含めて七人が参加。湘南アートシアターのモデル上演にさまざまな意味で刺激をうけました。東り演参加の集団的位置づけの弱さ(他集団に較べて)を感じます。プロダクションなどで具体的な問題提起をしながら内部検討をしていきたいと思えます。
②七月、「元禄中野村大政談」の再演は約七百の動員。中野の歴史に焦点をあてた創作劇でしたので、区民の方々の援助や百枚をこえるアンケートのご意見など創作的に意義ある

演劇集団息吹

②11月7日(日)八尾・山畑会館自主公演「河童証文」(作・栗原省・演出・坂手日登美)。落語と芝居のお楽しみ劇場で、八尾の信貴山麓の町内の人々を対象に村芝居の小屋づくりを追求します。
③11月中旬より「牛」3幕(作・東川宗彦、演出・大坊晴彦・木田昌秀)のテーブル稽古にはいります。来年5月公演の予定。
④劇団かみがたと合流準備公演を重ねてきましたが、先日年内合流を確認し、実務面での準備に取りかかっています。合同総会の後、新集団として出発し、「牛」は第一回公演となる予定です。今後ともよろしく願っています。

人形劇団京芸

①八月総会・ゼミには都合で参加出来ませんでした。
②最近の公演活動 劇場公演班が親子劇場の例会として西日本一円を「おしゃべりな玉子やき」と「りすとくるみの木」をもって回っています。学校巡回公演班が京阪神を中心に「藤戸」と「風船学校」をもって巡回しています。

(八尾市堤町一四〇)

舞台成果を得ることができました。しかし同時に集団の裏の力の不足と演技力量の未熟さを指摘された点では、今後の活動の出発点ともいえます。

③11月26・27日。中野文化センターにて、「海が碧いのは空のせいさ」―ベトナム以後症候群―上演予定。作・小坂チェウ、演出・佐伯藤哉。12月定期総会。来年一月中野区「成人のつどい」参加予定。
④実働メンバーの不足と指導力の弱さが問題です。来年は演劇学校を企画しますので少しでも向上したい努力の上に努力の現状です。(牧山記)

劇団弘演

◇総会・ゼミおつかれ様でした。特に事務局並びに開催地劇団の皆様本当に御苦勞様でした。お蔭様で楽しく有意義な二日間を持つ事が出来ました。弘演は初めての参加者が多かったのですが、それぞれに感動を持ち帰りました。分科会の時間ももっと欲しい。他劇団の多様な活動に触発された。モデル上演のとなえ方があいまいだった。秩父屋台ばやしはすばらしかった。等々の感想が出されました。

(東京都中野区新井二丁目一八一五)

③明年二月迄のスケジュール劇場班は十一月中旬迄公演を続け、十二月に新しい作品マルシャーク作「猫の家」今江祥智作「鬼」のけい古に入り、明年一月六日・九日迄正月公演を京都で行います。学校公演は十一月一ぱい続けられ、明年二月に新レバ仕込みけい古に入ります。明年一月から総会準備に入り、二月に定期総会を行います。一月には二十九・三十日の両日「研究生発表会」があります。
④わが集団の問題点
イ劇場公演の増大により公演体制の充実強化を計ること。
ロ人形劇運動と企業的劇団運営の両立とその矛盾の克服。
ハ劇団活動と構成員の生活の両立とその質的向上。

ニ新人養成のための研究所の設立をどのよう恒常化するか。
(宇治市白川鍋倉山35-20)

劇団未来

●ご健斗のことでしょう。劇団では今、「阿波座小劇場No.1けい古場披露公演と銘打ってチェホフ作、森本景文演出「街道筋」のけい古にけんめいです。(11月21・25・29・30、12月1日の10ステージ)。

初めての赤毛物であり、「どん底」を目指しての習作劇上演です。

●ところで西リ演総会・ゼミの後、劇団では演劇教室第二期生の卒業公演にとりくみましました。(土屋清作・寺下保演出・星をみつめて)9月15日)高校生が半数を数える教室でしたが、清新な、熱気あふれる舞台でした。

●この卒業生の内4名が入団して、劇団に新風をまきおこしています。(刺激された古手たちが体操に身を入れた位ですから)

●劇団も15年目を歩きだして、20年を意気高く迎えられるかどうか、気をひきしめなければならぬ大切な時期だと考えています。

●今年は冬が早いとか、お身体を大切に、「演劇会議」の発展を祈ります。(事務局N)(大阪市西区榎本町四・五八・一うつぼビル)

劇団からつかぜ

①みなさん、江の島での総会のあといかがおすごしですか。色々な所から集った人達、そんな中で、今回初めて参加した僕の感想としては、よくもまあこんなに集ったものだったただ感心する次第です。そして各分科会に分れての話し合いetc。他の劇団の状況、演劇をやることのきびしさ、たのしさを漠然と知りえたこと、話に花を咲かせた交

流会。ここで知った劇団の人と話をするのに大声でないと話せない位の熱気溢れた大交流会には、いささかときも抜かれました。そして来年のゼミがたのしみになっております。

②浜松市芸術祭にむけケイコ中です。
③11月14日浜松市芸術祭。「わんぱく地獄やぶり」(作・かたおかしろう)1月19日同レバにて県移動公演。この間にも移動公演を2回予定しております。期生は「煙突のあるオアシス」(作・大橋喜二)11月頃に公演。

④今回の芝居をつくるに当って劇団員実働数がキャスト・スタッフの必要数を下回ってお一人の受持つ部所が兼業になり、一つでも大変な所を二つ持たなければ劇づくりが出来ない状況になっています。でもこの芝居を面白く楽しいものにするためケイコを増やし、時間を延長して劇団員全員張切っている次第です。

(浜松市曳馬町一四〇九)

劇団やまなみ

①一年に一度の総会・ゼミの場は古い人たちにとっては自分の活動についての点検の場であり、新しい参加者にとっては、新しい大きな広がりの中で自分を見つめる貴重な機会です。

不参加で残念でしたが、集った二〇〇人の先生方からは大好評をいただきました。

②夏休みから九月一杯主に劇団林(まだほんの僅かですが)の松の手入れや野菜畑に冬野菜の種播などで過しました。九月三十日夜は大分市の南、佐賀関町幸崎の海を埋めて大企業(昭石など)を誘致しようとする県・町に

対し地元幸崎の人々が果敢に反対運動を進めています。その人達に「吉四六さん」を呼ばれ、創立以来最も感動的な舞台を創りました。

十月四日・九日は福岡県筑後地方を巡り、十月十二日・十一月十日迄高知県・十一月十五日・年末迄筑後地方に戻ります。

③来年は公演を休んで牛を飼います。又脚本を書いたり、地元でやらねばならぬ教育・文化の仕事を書きます。素晴らしい本を紹介し、講談社の砂田明著「祖さまの郷土水俣より」九八〇円です。私の親友です。新しい哲学です。石牟礼道子、森崎和江、松下竜一、山下惣一氏らの著作と併せ読んで下さい。

(大分県大野郡野津町板屋 野呂祐吉)

劇団荷車

劇団から五名参加しました。いつも劇団で話題になるのは皆、実によく酒を飲む(自分

あり、劇団活動を支える共通の認識が多忙な劇団活動をすすめる力になっています。

②現在、三班のけい古が進行中。「象の死」と「結婚申込」が10月17日市民劇場で、「はだしの青春」が11月6日市民文化祭で公演。

来春までは三本のレバで県内移動公演の予定。去る9月11・12日富士吉田で、小川・若尾・牛丸・金森氏を招いて、山演協照明講習会を開き、地域劇団・青年団・中学教師など60名が集り、大変好評でした。来春は吉田で同日公演計画。

現在市のきも入りで甲府文化協会設立の準備が進められ、他分野とのつながりや市行政への文化問題の反映等を考えて積極的に参加しています。

③公演活動とけいこ場建設を統一してすすめてゆくための意志統一とその具体的な展開が最大の課題です。

(甲府市青沼一八一五)

造形劇場

拜啓、演劇会議33号の戯曲八ともたちノ興味深く読みました。
①八月ゼミ当日、私共は二十四年目を迎える北九州市小中学校国語研究会の主催する英彦山集會に「吉四六さん」を上演しましたので

らも心おきなく飲める)ということですが。

◇総会・ゼミは参加者全員に劇団再出発の為の新たな活力源となりました。

◇前回の公演中止によって得た教訓を基に、今とり組んでいる脚本は「雪女風土記」です。公演日は未定ですが何としても年内には公演をやります。そのために今奮闘中です。(姫路市市川台2-2市住16棟10南里幸男)

劇団労芸

労芸第四回稽古場劇場は真船豊作「裸の町」を上演しました。観客動員は約90人で客席が寒々としていた。いかに創造を主体とした公演とはいえこれでは意味がない。公演後の反省会で、新しい団員たちは初めての舞台

なので視られたら、はずかしいから友だちを呼ばなかったけど、あまり観客が少いので張り合いがなかった。今度はなんと少しでも観客を動員して張り合いのある公演にしていかなければと云っていた。創造と普及の問題は我々のような劇団の場合大変なことであるが、この両輪の発展なくしては運動になっていかないことを劇団ぐるみで再確認したことは、今後に期待がもてるような気がする。

劇団は、早々、次回公演モリエール作「女学者」を決定して稽古に突入した。公演予定

二月初旬にしている。この公演こそ労芸があらゆる意味においてためされる公演になると思う。来年は年間の上演計画を立てその一つひとつを成功させて行き創立十五年歴史を意義あるものにしなくてはならないと考えている。そのために東リ演プロックを本当に意義あるものに作り変える必要を今公演で痛感した。(文責荒井)

(東京都品川区南大井一四一六)

劇団名芸

総会・ゼミでは関係プロックのお世話になり、どうもありがとうございました。
名芸では今年前半期の活動(「文七元結」研究公演「笛」子供劇場「かさしそ」等)をもとに今後の方針を話し合い、楽しい芝居づくりの発展として、シェイクスピア劇場を行うことになりました。(脚本・名芸版、演出・池田博・ロック演奏付)

シェイクスピア劇場No.1
「十二夜」11月20・23日稽古場小劇場
シェイクスピア劇場No.2

「ロミオとジュリエット」
来春7月16・17日 市民会館中ホール
少人数でおまけに金もない地元劇団が大変な課題を背負ったと思いますが、これから研

究生募集も含めて創造・普及とも一つのピークをつくろうとはりきっています。御観劇の上、厳しい批評をお願いします。

(名古屋南区汐田町三二四〇)

演劇集団和歌山

◇総会・ゼミ御苦勞様でした。総会は難しい議論が多かったですが、ゼミに参加したママさん団員はぜひ続けなければと決意を新たにしました。

◇8月には民話「三年寝太郎」を題材にした創作劇「寝太郎の夢」を「花刀」と紙芝居を組合せて神社の境内で行いました。炎天下の中で二百名以上の観客に見ていただきましたが、家族が一同に集める場にしたと願っていた私たちにとっては、大人の私たちの参加が少なかったのが残念でした。

◇今、10月17日の「アンネの日記」再々演のけいこの真最中です。和歌山市から百キロ離れた田辺で、地元の劇団が公演するのは二十数年ぶりとのこと。みんな頑張っています。

◇「健康で美しくなれる」というキャッチフレーズで始まった日舞教室は元団員も参加して月3回の練習はみやびやかな雰囲気をかもし出しています。4ヶ月目を迎え少しはサマになってきました。(屋代)

(和歌山市湊二一九三別院清方)

大阪協同劇場

一九七四年末、劇員四名中二名退団の後は公演活動は全て中止。西り演、関西新劇入の会とも現在休会中です。

なお、今後の連絡は左記をお願いします。
(奈良県生駒郡三郷町大字勢野961-44
奥井一雄)

劇団四日市市民劇場

劇団員が14人と相かわらず小粒です。しかし多方面よりの劇団への要請が出て来て、じっくりと本公演へ向けてのみケイ古していればよかった昔がなつかしくなる昨今です。

八月の総会・ゼミの感想についてはブログ活動がいかにかに大切であるか、ブログ活動の集中に、劇団が積極的にならねばと痛感。

中部ブロック創造委員に森を送り、来春予定の中部ブロックの一泊しての観劇、リクリエーション交流会を、四日市に立候補しました。

東り演のキマリとなってしまった夜の大江流は一定の就寝時間が保証され、翌日の分科会を穿えた頭で参加できるようにならないものかという意見が強く出ました。なお、来年のゼミには劇団員全員が参加の方向で今より

取り組むべきだと、積極的な姿勢も出ています。

最近の公演活動は、ことも向き、中学校などの移動は省いて、本公演としては、10月30日(土)市民文化祭公演、しかたしん作「はやてに走れあまじやく」(山本淳子演出)四日市市民ホールです。この公演の終わった夜劇団やまなみの仲間を迎え、隣の劇団がその仲間にも加わってもらい、三劇団合同交流会を四日市北部の湯の山で行います。

明年二月二十六日(土)二十七日(日)にかけて、結成十五周年を記念して第十八回公演「戦中派」をやはり、四日市市民ホールで実施します。森賢郎が三年前より、書く書くとかけ声していましたがやっと陽の目をみることになり、本公演へこぎつけそうです。

明年三月六日になると結成十六年へ入りまかながら十五年を期しての記念集会をしよかと考えております。

集団としての問題点は、やっとこの四日市に根が少しはえかった所で組織面ではいつも元氣よく協調し合っている行動力が伸びて来ています。しかし新しい仲間を迎える素地をきびしく蓄えてゆき、明年四月からは何とし

ても研究生システムを確立したいと考えています。そして念願の稽古場建設へ懸命に取り組もうと真剣です。

森の「戦中派」は今回、第一部「執念」が脱稿した所で引きつづいて第二部「耐久」第三部「平和」と、この三部作の完成に劇団全体が、協力、保証してゆかねばと思っています。

(四日市市栄町四一九アンデレセンター内)

劇団山形

第11回定期公演が相沢嘉久治作「北方の記録」に決定し、その追込みに入っています。今回はレバ選定の段階から揉めにもめたせいか、各々の熱の入れ方がいつもと違うようです。現在劇団の中に「北方病患者」が流出しています。その原因として、作者が身辺に居るといふこと、同じく作者相沢さんから出された木下論文の「主体的に創造的であることとの必要性について」なども関係があるようです。

この脚本についての現地調査(山形県北村山部の東根市神町と同郡大高根、戸沢の両村)にも二度程行って来ました。この成果が舞台の上に出せればと思っています。とに角今は、不安と焦りと緊張の中で、それぞれ精

一杯というところです。

「演劇会議」33号に「雪の墓標」の劇評が仙台小劇場の早川さんより出されました。劇団員一同この劇評を読み、あの舞台を思い起しながら、今までの舞台も含め改めて考えさせられたようです。

7月26・27日に東北ブロックゼミナールをやり講師に劇作家相沢嘉久治氏に来ていただきました。

8月の東り演ゼミには6名という少人数の参加ではありましたが、各自大いに収穫があったようです。ゼミ実行員の皆さん、本当にお疲れさまでした。

(山形市緑町四一八一松井光義方)

名古屋演劇集団

◇10月ともなれば、東り演ゼミの感想は?と問われても、ハテどうだったのかなと首をひねったぐらいです。楽しく、盛大で、充実感があったはずなのですが、そのくらい目前の仕事に今は追われているのが実状でありま

す。参加して得たものを劇団全体に広げる前に、こういう劇団生活への埋没が先行するのを許してしまうこと……。参加した者の姿勢にも問題があるが、ゼミー東り演運動自体マ

ツシンののはっきりしない危機にあるのではないのでしょうか。

◇東り演の目的は……といったカタい話もさることながら、単なる交流ということに就ても物足りないというか、親切がないというか、到着して集会やって、モデル上演を見て、すぐ交流では話はずまず、古顔さん達の間を上げるのを見ているだけの人も多かった様です。分散会を先にやってはどうかという意見も多かったのです。またモデルは東り演の見本(モデル)と云えるものをやって欲しい。藤沢の若い俳優さんが専らマナイタの上で切り刻まれるに終ったことに大変な不満を感じました。お金がかかるなら集めた

らよろしい。演劇人は舞台が勝負であること忘れられているのではないか。
◇目下名古屋芸術祭市民の劇場演劇の部、という一寸わかりにくい企画ですが、ユーリビデオ作「トロイヤの女」の立稽古に入っています。(11月16・20日、名演小劇場)合同公演という形式ですが劇団員が、プロデュサー、演出、主演からクロス(群衆)まで19人も参加するし、演集の稽古場を使っているので自主公演に近い取組みになっています。演出の内山千古は舞台美術専門なので初の仕

事に意欲十分です。能の表現もとり入れた異色作です。

◇移動学校公演は9月23日、10月5日と、奇蹟の人々が続き、あと11月6日・26日他数校と目白押しに続いています。また「夕鶴」で11月17日「三家福」で12月18日……まだまだ増えそうです。次に来年3月名古屋市青少年芸術劇場に「奇蹟の人」上演がきまり、劇団名古屋の達成した三千人動員を上回るべく準備研究を始めています。

◇けい古場立退き問題は移転先が依然として未定のまま、とに角資金を作ろうと、劇団財政方針を転換して、団費値上げで経常費すべからぬ、他の収入をすべて積立てることにし、また物品販売の活動も劇団ぐるみで取組みがはじまりました。品目も多種揃え、機会ある毎に何う予定ですので、その節にはよろしく願います。(丸子礼二)

湘南アートシアター

東り演の皆さん、八月のゼミには連絡はるばる御苦勞さまでした。私達は地元でありながら受入れに充分な体制がとれず京浜協同さんにオンブしてしまい申訳ありませんでした。

説教節・小栗判官「賽の河原の船遊び」を上演します。第14回東京働く者の演劇祭の参加上演です。岡安の第四作目の創作劇であり、運ぶばかりで帰しちやくれぬ連絡船は地獄船と謳われ、朝鮮人を強制労働にかりたてた運搬船の中の物語です。物語りの前後には三味の音等も入れまして「世仁下」の説教語りが入ります。是非御覧いただき皆様の手厳しい批評をお願い致します。

演劇サークルトラム

みなさん今日は。西り演のゼミでは大変お世話様になりました。一年間演劇活動をしてそろそろくたびれ出した頃、ゼミに参加してカンフルうたれ今は生き生きとしています。いつもサークル団員内で話し合っていた自信の持てない所が、ゼミでは中心に話し合われたので大変プラスになりました。しかし、山口に帰ってトラムの現状を考えますと前途多難ですが、地域に根ざした演劇の一步前進を願って張りきっています。

さて、11月13日公演予定の「陽気な地獄破り」に今は必死に取り組んでいます。人数いっぱいキャスト、その中には初舞台の人も2、3人、演出も本格的なものは今回が初め

モデル上演(テネシイウイリアムズ「坊やのお馬」)については、いろいろと御不満の様子でしたが、私達としては、東り演の優れた観客に対しては失礼かと思いますが、あの舞台は力一杯のものでした。厳しい御指導をいただきありがとうございます。現行のモデル上演のやり方については異議のある方もおありのようですが、私達は実際に演じてみて、この冷い視線を熱いものに変える舞台を創ることは可能だと思っています。私達が一般観客と相対した時の、舞台と客席の、あの求めあう関係をつくりだすことは、東り演ゼミでは不可能とは思いません。今回は私達の力量不足で果せませんでした。次回に期待したいと思えます。

次回第十三回公演は、11月12・13日の両日藤沢市民会館小ホールにおいて、かたおかしろう作「牛鬼退治」を上演いたします。本公演には、すでにこの作品を上演されている埼玉さんから衣裳をお借りすることになりました。又、銅鑼の萩原れい子さんが、葉奈の役で賛助出演して下さいます。地元藤沢の新進作曲家藤沢道雄氏による音楽も出来上りました。大人も子供も楽しめる舞台にしようと頑張っています。

てというし、制作は途中で盲腸炎でダウンというハンディだらけですが、毎晩遅くまで練習に頑張っています。

この後は12月5日、6日に「公民館まつり」。これは「陽気な地獄破り」を続けてやる予定です。

今、トラムの問題点としては考え方も創造的にもバラバラなサークル員をまとめる力が弱い事と、若い人を育てる事がむづかしい、普及面が遅れているという所です。

劇団上野市民劇場

江の島でのゼミからもう二ヶ月たちましたが、仲間の皆さんお元気で、秋の公演の取り組等に御奮闘のことでしょう。関東ブロックの皆様、本当に御苦勞さまでした。お蔭で楽しく、意義深いものになりました。年に一度のゼミナールは、私達の活動の節であり、仲間の皆さんとの交流を通して、力強い連帯を感じます。しかし、ゼミで学んだ事柄を日常生活に実践的に活かすのは少々難しいようですね。そういった意味においてもブロック活動の具体的にきめ細い学び合いや交流の強化が望まれます。

◇最近の主な活動

劇団群馬中芸

- ①参加できませんでした。
- ②児童(小学生向)「タロ・ジロ・ゴンザと山賊の城」(作・中村欽二) 中学生向「絵巻女房」(作・木村次郎)
- ③12月中旬まで、日曜をのぞくすべての日。明年度は未定。
- ④課題。自分自身と対決し、ないものを探し求め、いつも新しい創造、集団としての創造を。

世仁下乃一座

◇八月のゼミは緊張の余り、全員どっど疲れ帰って来ました。一週間前のわらび座での強化合宿の疲れもありましたが、東り演の仲間の前で「秩父屋台ばやし」をやることで必要以上に皆緊張したようです。春の公演始めいくつかの集いにも参加させてもらいましたが、こんなに緊張したのは初めてでした。しかし我々の集団を皆様に知って戴くという意味でも有意義だったと思っております。

◇秋の公演は11月12・13日於・四谷公会堂 岡安伸治作

- 9月 三劇協総会参加。小型移動2ヶ所。
- 10月 照明(唄と踊りの発表会)
- ◇今後の活動計画
- 創立二十五周年記念公演
- 12月4・5日 上野市産業会館ホール 「狐とぶどう」 杉森正美演出
- 12月 恒例クリスマスパーティー
- 来年一月 劇団総会。新稽古場披露会。

人間座

移動のこあいさつ

◇人間座は御蔭をもちまして来年は創立二〇周年を迎えます。これひとえに観客の皆様はじめ大方の変らぬ御支援のためものです。あつく御礼申し上げます。

さて、二〇周年を機に、わたくしども、このたび下記へ居を移すこととなりました。保育園を振り出しにビル住まいなど転々いたして参った二〇年によく終止符を打ち「野原ノ松ノ林ノ藤ノ小サナ萱キノ小屋」ならぬささやかな居場所に腰をすえて、同人一同決意を新たに、京都洛北の地域にシッか

り根ざす演劇活動を展開する所存でございます。なにとぞ今後とも、末長く御鼻氣の程、よろしくお願い申し上げます。

なお、また遠來のお客さまと、隣り近所になに気兼ねなく、かつ飲みかつ語り明かすことも自由になりましたゆえ、ぜひお気軽にお立ち寄り下さい。一同楽しみにお待ち申し上げます。

◇公演活動。

京都を考へ、現代を考へる人間座の創作ドラマシリーズ二篇……

『奇峰亭先生の幻の壺』(三部)

『人形師卯吉の余生』(八場エピソード)

一九七六年(昭和51年)十一月一日 敬白

京都市左京区下鴨東高木町十一

電話(〇七五)七二二一四七六三

劇団大阪

人間座

東西両演の皆様、元気で御活躍のこととおもいます。

劇団大阪の総会・ゼミナール参加者は例年に比べ少い人数でした(5名)。全体にはリアリズム演劇というものが、西演演劇修正問題に象徴されますように、色んな事をやりながら追求され、より広い視点での芝居のと

らまえ方がされている事。ゼミは例年より時間が短く尻切トボンボに終わった感じがします。又、モデル上演をめぐる様々な意見にも考えさせられました。

さて、私達の劇団は9月16と18日(四ステージ)に、こぼやしひろし作「ひしめきあう不毛の季節から」を上演致しました。劇団創立五年目を迎え、「五年目にふさわしい十周年を展望した取り組みに」の合言葉での創造、普及の課題の追求になりました。

古い団員の(演劇歴わずか十年にして)マシネリ化の打破、中堅(五、六年)の育成、新しい団員の芝居創りの方法等の把握などが創造面での特徴的な課題でしたが、もう一つかみ合った形での創造が弱く、自分のカラにとしこもる傾向が出て来ました。その中でも個人々の課題もはっきりしつつあり、次の十一月十一日の京都文化芸術会館に於ける再演に向け引き続き追求を深めて行きたいと思っております。

普及面では年間五千名のお客さんを集めるためこんどの公演は「三千名のお客さん」がスローガンでしたが、それには大分速い千六百名でした。でもこの観客数は、私達の劇団としては最高(従来は千四百五十名)

でした。各個人のお客さんの伸び悩みや、府民との関係での観客数、大阪の地に根ざす事へのアプローチなど課題は山積しています。

今劇団がかかえている問題は、何と云っても今後十三年間の毎月30万円づつ借金を返済して行くことです。大変な事ですが、一年一年積み重ねて行きたいと思っています。創造面でもどうなってるか、十二年後が楽しみです。

今年十一月十一日の京都公演後、12月10日と12日、第六回劇団総会を迎えます。この中では十周年を展望した来年度以降のための総括と計画、方針が話し合われます。A・T

(大阪市南区谷町七丁目二一)

新谷町第二ビル(〇三号)

劇団演劇集団

お元気ですか。去る九月十・十一日「俺たちのヘガサス」アトリエ公演№3として上演二日間五〇〇人の動員、目標を下回る動員で少々がっかり、元京浜協同劇団の21期生嶋崎雅子さんがはるばる来劇して、およそ一週間滞在し交流しました。(美人な彼女は劇路の男性を魅了しました)この「ヘガサス」の上演をめぐるいろいろな意見が出て、劇団の創

造課題として大きな取組がありました。

尚、この作品は十一月十三・四日小樽市で開催の「北海道演劇祭」に参加し、目下稽古もやり直します。(参加経費のねん出に頭痛)アトリエ公演№4は、モリエールの「スガナレル」(加藤たけはる演出)で十一月五・六・七日の三日間公演。初めての古典劇に戸惑いながらがんばっています。

来年は五周年、集団創作を計画し、劇団の問題点・創造と普及の問題、チケットの個人売りの低下していますので、今日的な創作システムの確立が急務です。

(鋼路市員塚一六一九加藤方)

劇団もっこ

近況をお伝えします。先ず低迷を続けていた劇団に最近少しばかり明るい風が吹きはじめました。劇団O・Bの面々より様々な形で助言やほめを受け、来年は再起できるめどが立ちました。今年のはじめ、劇団創設者のM氏が急逝して以来、彼の影響を受けて演劇が頭からはなれなくなった僕やO・B達と話合っ(彼の事について)いろいろうちに、劇団再起の話が持ち上がったという訳です。まだ具体化していませんが、生前氏の念願であった「夕鶴」を僕らの手でつくりあげようと

話合っています。これには現在全解連の専従としてのS君、隣の町で町会議員をしているD氏より全面協力を得られました。近々具体化の話に入ります。この次の通信では更に良い報告をいたします。

(追伸)最近になって僕の街には若者を中心にフォークソンググループが紛々誕生し、にぎやかになりました。そこで先日来より会合を重ね、光市を中心に民主的な文化運動を

劇団なぎ

(山口県光市島田赤道)

前略。通信おそくなり申訳ありません。秋に入り各劇団とも益々活発な活動を展開されていることでしょう。頑張ってください。

さて、劇団「なぎ」ですが、現在は腰をしっかりと落付けて一幕物戯曲研究、及びことばの勉強会を統行中ですが、別に、「なぎ」の屋台劇場を計画しております。味の良し悪しは開店の上で……

(東大阪市鴻池本町三一六福岡方)

劇団静芸

総会ゼミの場途、乗り合せた東海ブロックの仲間たちは、来年のゼミに、どうしたらうまい味噌汁を皆さんに食べさせられるか大討論(?)。来年をおたのしみに!

劇団の公演は、静芸おやこ小劇場「瓜子姫とアマンジャク」を9月市内三ヶ所で上演。

(秋山・市児童会館・西部)。観客七五〇名。

12月3日、中学生の非行をテーマとした創作・小島真木作「旅立ち」2幕を上演の予定で稽古の真最中です。会場の都合で一回しか上演できませんので、来年三月、二・三ヶ所で続演のつもりです。

10月17日劇団やまなみ公演に東海ブロック観劇交流が計画されております。

(静岡市昭府町二八九一二)

TEL〇五四二一七三〇六〇四(夜)

劇団湖

一步一步冬の足音が近づいて来ている今、「湖」では「河童証文」の猛稽古中。

新人一人を加え数名の劇団員でガンパッています。と言っても仲間がほしいノといつも思っているのです。……でも少数の団員がフル回転して、南の作品を冬を迎える北海道で、と稽古稽古の毎日になりそうです。

(北海道三笠市幌内住吉町九加藤元方)
劇団すがお

東り演藝会・ゼミナルご苦労様でした。
たくさんの収穫をもち帰り活動に生かそうと
しています。

◇活動報告

第17回公演 ミニミニ親子劇場

演劇「どろぼう仙人」紙芝居「ゆうれい
船」桑名の民話から」映画、ゲーム、歌
など2時間のプログラム。8月8日、29
日七回、一〇二〇名動員。

会場はお寺、保育園、東会場、団地の公
園等市内のあちこちに移動し、町内ぐる
みの納涼観劇会となり、どこもほぼ満員
の盛況。創造面では稽古が少なく反省す
べき点は多く今後に残された。外部から
の声援(感謝の声)と内部の反省とのギ
ャップが大きい。

10月3日、県高校演連主催の演劇講習会
(於桑名高校)照明、メーキャップの実際
を劇団が講師として講習した。

◇今後の予定

次回公演、来春の予定でレバ選択中。
七年ごしの稽古場建設敷地の確保ができ、
いよいよ年内着工の展望ができました。

(桑名市小野山東養泉寺内)
劇団名古屋

①ゼミ参加の感想

ゼミ参加には10名送ることができました。
各分団に別れての成果は劇団の新たなエネ
ルギーの一つとして培って行くことを確認し
合いました。

②最近の公演活動

移動公演として9月7日に一宮東高校で
「あゝ野麦峠」(作・大橋喜一、演出・久保
田明)を上演しました。

③これからの公演活動

11月4、7日(6ステージ)名演小劇場に
て創作劇「見ている」一プロログとエビロ
グのある、すぐとなりの国に関わる10ほど
のエピソード(作・しかたしん、熊谷昭吾、
久保田明、富山信一、矢野喬、演出・久保田
明、清水甚也、安藤美生子)を上演予定。
「すぐとなりにありながら、そして忘れられ
るはずもないのに、なぜか知らない、知ろう
としない、知らないふりをする。そんな朝鮮
を私たちは、自分たちの日常の関わりの中か
ら見つめ探っていかたいと思っています。」

④わが集団の問題点

演劇は集団の創造であるにもかかわらず、

わが劇団では、多数を集めるのは困難な状況

です。一つは稽古場移転のために用いた費用
の返済のために、移動公演にとり組んだ事
による団員の疲労。もう一つは団員各自のモラ
ルの低下と、集団の中の自分の位置、役割の
認識不足(30名の時の自分と17名の時の自分
との相対的変化)が多々影響していることも
否めません。(歩)

(名古屋市熱田区新尾頭町五〇)

青年劇場

地方に出ています。大変おそくなりまし
てすみません。ゼミの参加は若い人が中心で
したので、さまざまなことを考えてみんな収
穫があった様です。

10月下旬から「真夏の夜の夢」は東北関東
へ、「かげのとりで」中国、九州へと旅だっ
て行きました。演劇会議の送金がおくれて申
訳ありません。私も土曜の午後6時頃しか劇
団へ帰りませんので、何とか班で工夫して集
金体制をつくってゆけたらと思っています。

12月末までは2班にわかれて活動します。
来年の2月頃は「かげ」の一般公演。1月頃
は「非行」(日立にて磯村記)

(東京都渋谷区千駄谷五―三三―六)

劇団さっぼろ

①総会での論議は若干、上すべりの感じがし
た。問題点や課題は出されているのだから、
もっと本質にせまる討議がほしい。それとリ
リズムということと現代の視点でつきつめ
ていくことが必要だ。ゼミでは専門劇団の分
科会に出さして頂いたが大変有意義でした。
こばやしひろしさんの提起と、それぞれの志
向の違いが良くつかめた。やはり我々は地域
と観客という事を大事していくべきだ。

②三回目を迎えた定期公演「西の国の人気も
の」を上演すべく稽古に入る。それと定期総
会を月にひらく予定です。

③学校公演「ポイントトム」。小劇場を11月
上旬まで各地で上演。

④たたくさんあるが、日常的なレベルでの演技
論、演出論が不足していることと、新人に劇
団の歴史や演劇人としての基本的なものを教
えていく機会や適当な人材が不足しているこ
となどがあると思う。

(札幌市西区手稲宮の沢四八五―四一)

劇団ニヶ崎フアーベル

①八月総会・ゼミ参加の感想

初めての総会に参加して、西り演の実態を
知った(?)。若い人の発言が少いのはなぜ
か?…。(4人参加)

尼崎フアーベル9名参加したゼミでは、新

人は皆な同じような悩みをもっていたのが解
ってよかったという感想。またモデル上演は
よかったのに、あとでその話が出ないのは残
念だった。船上交流会は賛否両論あり。

②最近の公演活動

「イルクック物語」9月4・5日(尼崎
文化会館)観客六〇〇名。劇団結成以来最高
の観客数。「尼崎まつり」に太鼓公演2ステ
ージ。観客数一五〇〇名程(10月3日)

③これからのスケジュール

12月10日、13日、15日、16日(11、12のみ
マチネー2時もあり)勝山俊介・作、三部作
「愛」をケイコ場にて公演します。8回。

④わが集団の問題点

団員が少いので困っています。来年は倍増
しなければ…。

(尼崎市杭瀬北新町三―47尾尻コーポ)

劇団新芸

11月13・14日北海道演劇祭が初めて小樽で
行われます。うちはラストで、芳地隆介・
作、宮津泰子・演出「人間蒸発」一幕三場を
上演します。ただし、後送します。団員13名
協力者数十名、厳しさを増してきた勤務との
闘い、自分との闘い、7月からびっしり参加

している者、まだ2回しか練習してない者、

ごちゃ混ぜの中でのスケジュール通りにはい
かないけい古。やっとうどいたベテラン客演
者の急の転動、主役の結婚式、おまけにイン
フルエンザまでがおそいかかり、倒れる者が
続きます。演出者のみ風邪もひかず、初演出
にはりきっています。言っていることが抽象的
でわからない、ダメの出し方が悪い、毎回稽
古が違うとか、役者にいびられながら…。

制作は両日で一八〇〇名の売上げ目標。一
枚千円。小樽では未だかつて出来たためし
ない数字です。赤字がでたら創造費の分が出
て来ないのがつらいところです。

今公演(第4回です)全力だしきっています
ので明年2月までのスケジュールや劇団の間
題点は公演後に考えることにしています。今年
の春は伊賀山昌三作「結婚の申込み」を3ス
テージやりました。(文責宮津)

(小樽市銭函二―四七―一六鹿角方)

劇団きづがわ

福岡現代劇場・生活舞台・道化のみなさん
ゼミ大変ご苦労さまでした。
わが劇団きづがわは目下「吹雪のうた」
(本誌32号掲載戯曲)にとりくんでいます。
九月の台風の中、青森に現地調査に出かけ、

作者のきしだみつおさん、東リ演の仲間劇団
友木のみなさんのご協力で二日間の日程では
ありましたが、津軽平野をひた走り、東北農
民の姿をいっばい存真いこんで、一行6名は
元気に帰阪。

本号発行の折には勿論公演は終り、次の課
題に向っていることと思いますが、現在は、
革新府政助成の大阪新劇フェスティバル初参
加の、「吹雪のうた」上演を目前に控え
連日の猛稽古。現地の青森出身者をはじめ地
方の農村出身者も幾人かはいますが、大半は
大都会に育ち、働く私たちが現代の農民の姿
にどこまで迫れるか、不安もまた大いなるも
のがあるというのが偽らざるところです。

第四回大阪新劇フェスティバル参加

第二回センター公演

「吹雪のうた」作・きしだみつお

演出・赤松比洋子

10月28・29日。大阪郵便貯金ホール

(大阪市大正区泉尾四一―二一七)

劇団に

皆さん、こん日は。私たち劇団にれでは目
下、12月3・4日上演予定のアントン・P・
チェーホフ作「ワーニヤ叔父さん」四幕に取
り組んでおります。相当な大作であるだけに

演出以下団員一同が日々四苦八苦の状態です
が、今回は従来にも増して、創造面はもとよ
りあらゆる面で今までにない新しい試みとい
うか、参加のしかたというか、私たちの日常
をより豊かに励みのあるものとする方法がと
られていきます。「桜の園」をはじめとするチ
ェーホフの戯曲・小説の分析から、ロシア革
命に至るまでの時代考察をグループ別に研究
発表したり、読みの段階を少なくして、動く
ことの中から一日も早く何かを発見できるよ
うに立稽古を大巾に早めたり：etc。

ひとつの作品との出逢いは一人の強烈な人
間との個性との出逢いに似ています。充分に
演出意図を反映させ、この作品と取組むこと
の中で私たち一人々々の日常に、生き方に何
かがえのない価値を見出してゆきたいも
のだと思います。

(札幌市豊平区平岸四条12丁目八四秋元方)

劇団弘演(追伸)

私共弘演も10月22日、泰山木の木の下で、
の公演を終えホッと一息ついた所です。札幌
から飯田信之さんと他二名の方々、仙台から
佐藤さん御夫妻、青森から支木の皆さん、八
戸から昔の仲間が……と遠路を厭わず駆けつ
けて下さり感激しました。

魅力あるブロック活動を

— 関東ブロック会議から —

城 谷 護

(京浜協同劇団)

東リ演総会とゼミナールでの興奮もさめや
らぬ九月十一、十二の両日、関東ブロックは
京浜協同劇団の稽古場で泊り込みのブロック
会議をひらいた。この会議には、公演等でや
むを得ず出席できなかった六劇団を除き、初
めて二ヶター十一劇団から二十名が出席
し、久しぶりに活気に満ちた集いとなり、観
劇交流を中心とした一年間のブロック活動の
計画などを決めた。なお、特別に黒沢議長と
萩坂「演劇会議」編集長の出席を得たことは
会議の中味を深めるうえで有効だったことを
つけ加えておきたい。

ゼミナールはお祭りだよ!

まず、八月に藤沢市で行われたゼミナール
について、その実行委員ブロックとしての反
省を行なった。

特に飯田さんはこの公演に合せて退院なさ
ったそうで、また要注意のお体なのに、打上
げ後翌朝までも私達におつき合い下さり、色
々お話出来ましたこと本当に嬉しゅうござい
ました。しかし、徹夜のままお別れした後ど
んなにお疲れになった事かと、御本人が平気
だとおっしゃってそんな暴挙が、体に障る
ことを誰よりも一番知っている私が御好意に
甘えすぎたことを悔みました。

仙台の佐藤さん御夫妻にも感激致しまし
た。私共の手不足から公演案内もロクにして
いませんでしたのに、公演の朝それを知って
急ぎよ駆けつけて下さったそうで、仙小から
初めて弘演を観に来て下さいました。

公演の成果は力不足の宿題は一杯残しながらも、いまの弘演の持っている力を一杯出
し合ったという事で好評でした。

観客数は六百足らずで地域に根ざす命題も
まだ残されたままですが、お蔭さまで第一歩
は踏み出しました。どうか東リ演の皆さん、
これからも見守って下さい。

(秋本博子)

城(開催地)で生まれた創作劇なり、東リ演
の運動路線に沿った意欲ある作品を、意識的
にとりあげるべきだ。」「一般観客を入れ
て、一般に観るやり方にすべきだ。」という
希望が強かった。

次に、分科会についても、参加者の経験年
数や要求がまちまちであり、何をどのへんま
で深めていいのかが、とまどいがちで、どの分
科会も結局、「もう一步」というところで終
ってしまったのではないかと指摘が多か
った。たとえば、「美術のしごと」分科会で
は、事前に課題(モデル上演作品の装置図を
描いてくること)を出しておいたにもかかわ
らず、ほとんどの人が手ぶらの参加であり、
中にはポスターなどの作り方を教えてくれる
分科会だと思っただけに参加した人もいたとい
う。美術とか、照明とかは、字び合うとい
うのとは別に、教える分科会(講義)があっ
てもいいのではないかと意見もあつた。
また、演劇を始めたばかりの人と、何十年も
やっている人とが、同じ土俵で話し合うとい
っても土台ムリな話だという指摘もあり、今
後の分科会は、あまり欲ばらず、若い人と
テランとを分けるなどして、テーマはあまり
細分化しない方がよいのではないかとという意

見も出された。

そして、ゼミナールとは、そもそも年に一度の、いわばお祭りに徹した方がよい、ゼミでいろんなことを学びとうとうというのがムリな話で、ほんとうは、参加者の多くが、お祭りを期待して来るのではないか——との意見が強調された。(筆者自身も、ゼミは一年間の経験を学び合うことに徹した方がよいと思うし、一定の金がかかってもその一年間に東リ演で話題となった作品のモデル上演を望みたい。)

ブロック活動は「荷物」か

次に、ブロック活動のあり方について討論した。

関東ブロックは、劇団数が多すぎるとして十六の劇団(東京芸術座が加わって今は十七)を三分割して活動をすすめる方針を一年前に決めたのであるが、これは、いわば「手」の問題であって、必ずしも当を得た方針ではなかったことが反省された。会議や企画を準備しても参加者が少なく、ブロック活動が「荷物」にさえ思われる感じがあったことは事実であり、こうした中からは魅力あるプロ

ック活動が生まれるはずはない。

ブロック活動を、各劇団にとって飛躍させる土台にするには、あれこれの企画より、他のブロックに学び、お互いの芝居を観るといふ観劇交流を中心にした活動からやり直そうということになった。

また、関東ブロックは、他のブロックとちがって、五つの専門劇団をかかえたブロックであり、専門劇団同士のグループ活動を特別に重視する必要があるとされ、さらに、専門劇団と非専門劇団とが、お互いのいい点を学び合う、具体的な協力体制(たとえば、演出家の派遣、役者の客演交流など)も、もっとやられていいことが話し合われた。

要望として出されたなかに、専門劇団、とくにその中でも指導者クラスは、もっと他劇団の芝居を観てほしいし、東リ演活動の中でもっとリーダー的役割を果たしてほしい、というのもここにのせておきたい。

夜ふけて、会議は懇親会となった。明け方まで続いた懇親会は、「ゼミのときの交流会より面白かった」とか。

観劇交流を中心に

して来られた人達が、職場や家庭の事情等で、やめたり、出て来れなくなったりしました。劇団の公演活動、日常活動は停退し、団員も減少して来ました。稽古場に行っても、わずか三、四人しかいないという日が続きました。それから「戦場のピクニック」・民話劇「ゆきと鬼んべ」・「人を喰った話」と公演して来ましたが、脚本の選定に手間どった事を覚えています。私自身も、公演レバに決まった脚本以外には目を通しておらず、普段の不勉強さをさらけだして、やりたい本を出しで呉れといわれても、一本もないという有様でした。

「ゆきと鬼んべ」の公演で鬼んべをやった私は演出に、あれこれ注意されてもその意味するところが分らず、演出を手こずらせました。演出は辛抱強く話し合いを積み重ねて、私にも納得できる様に、色んな角度から話してくれました。この公演の前頃から私は今のままではいけない。何とかみんなと一緒に劇団を盛り立てていかなければ、と思い始めていました。この私の心境の変化は、組合の役員をやり始めていた所にも起因していたと思います。とにかく、この時期から何とな

翌日は、稽古場の二階に居住する「ママさん劇団員」が作ってくれたおにぎりとお汁で開幕。一年間のブロック活動の企画を決めた。

(1)観劇交流会第一弾。中野勤演が十一月上演をめざしてとりくむ創作劇「海が碧いのは空のせいだ」(小坂忠作)をとりあげ、十一月二十七日(土)観劇、その夜、泊りこみで話し合う。

(2)講演会「東ドイツの業余演劇」最近、東ドイツの業余劇団の舞台を観てこられた土の会のよしだはじめ氏の話を、フィルムを観ながら聞く。十二月中旬。

(3)観劇交流会第二弾。小・中学校公演で忙しく、なかなか参加できない群馬中芸に出かけて行き、そこで舞台を観るとともに、翌日は一日レクリエーションを行う。来年三、四月。

(4)ブロック・ニュースの発行年四〜五回、ブロック・ニュースを発行し、交流をさかんにする。

(5)器具類の貸出協力。各劇団が持っている照明器具、小道具、衣裳などのリストを作りお互いに貸出協力を行う。

以上

なかまの頁

木々の会より

石部 久人

私が木々の会に入った時は、父に死なれ、その寂しさから、毎晩のように友人と夜遅くまで飲み歩いていた半分自暴自棄になりかかっていた時期でした。

中学校時代、演劇部に所属していた私が懐かしさもあって、その学校を訪れ、演劇部の顧問であり、木々の会の中堅メンバーでもあった先生と再会した時、もう一度演劇をやってみないかと誘われ、少しは気が紛れるかも知れないと思ったのがきっかけでした。

最初の頃は、芝居なんてどうでも良かったのです。だから自然、練習にも身が入らず、先輩の人の注意も耳に入らず、独りよがりの行動が続いていました。そんな中で劇団の人は、辛抱強く私が芝居の楽しさに目ざめるまで見守ってくれていたと思います。

そんなあやふやな気持ちで二年が過ぎた時、突然、劇団創立以来終始、劇団をリード

く芝居の面白さがわかりかけた様な気がしました。

そして今年に入って早や半年、脚本を選定する為に半年を費しました。六月に劇団の総会を開き、運営委員が若者で占められ、中でも私が代表者ということになりました。代表者が二十五才副代表者が二十六才という若い指導者で再スタートすることになったのです。

私も今後は、より一層勉強して、若いみんなと一緒に、もう一度劇団の最盛期を築いていきたいと決意を新たにしました次第です。

演劇と私

林 清子

「演劇と私」などと、タイトルを付けていますが、演劇以外の事も、ぼつぼつ書いて行こうと思います。

私は中学校の頃から、もう七年も演劇に関心があります。動機は、特別何かがあった訳ではなく、友達と賭けをして、それに負けてしまい、五百円支払う所を、演劇部(彼女は演劇部の部長で、丁度その時勧誘作戦を展開していたらしいのです)に入る約束で、五百円

を免除してもらったという、単純で不純なも

のです。その演劇部で、自分では別の人間になれる、つまり役者の魅力に取り付かれてしまいました。これは更に素晴らしい事ではないかと、毎日考えていた様に思います。その頃から、私の中には小さなピエロが、育って行きました。みっとも無い位悲しい「うずき」という名のピエロです。台本に目を通して見ると、自分でも意識しない内に、このピエロは目を覚めます。そして、徐々に頭をもたげて来ます。ゆっくり正確に感情を入れず、まず読んでみようとしているのに、私の中のピエロはだんだん、大胆になって行きます。まずは歩き出し、次はほんのチョッピリ走ってみます。最後には身体の中をピョコンピョコンと跳ね回って、外の世界に出ようとするのです。ピエロはその名の通り、うずうずしてゐるんです。仕方無く、私は少しだけ感情を入れます。表情を変化させます。それでも「うずき」という名のピエロは容赦しません。私は全身の力で、それを押え込もうとするのに、結局ピエロに負けてしまい、最後には、大きい声を出して、悲しんだり、怒ったりします。私は頭で考えるタイプでは無く、このピエロという限り身体で行動するタイプです。

よう。

このピエロと一緒に、中学校を卒業しました。高校でも、ためらう事なく、演劇部に入りました。高校時代は不思議で、限りなく暗黒の時代でした。楽しい事が沢山あるだろうと期待して入学したのに、事実は全くの逆でした。

まず私は、自分という人間について考えました。考えざるをえませんでした。具体的な悩みなんて何も無いのに、いつも何かに悩んでいました。自分の性格や、生きる事、死ぬ事、売春婦やかもめ、青い空、白い雲、そして赤い風船……。うんざりしました。

十トンの鉄を背負って、何のあても無く、のろのろ歩いている少女。今に気が狂ってしまふと思いつながら、精神病院も良いもんだと、シニカルに考えている少女。お洒落も、男の子にも興味を持たず、自分の思考の中で、二十日風のように同じ所をぐるぐる回ってばかりいる少女。哀れで、可哀想で、自分勝手に、物質的にも貧しい少女。世の中に自分は完全に孤独だと信じていたその時も、そう、その時でさえ、私は演劇だけは投げ出さず、いままです。いえ、だからこそ、演劇にすがってさえたのです。私は、開き直り、

自分の中の「うずき」を土壇場の切り札にしていきました。

人間は決して妥協してはならない部分があると思います。一人の人間が百の要因を持つとするならば、たった一つでもいい、これだけは決して他人に譲れない部分。エゴイズムと罵られても、自己満足と冷笑されようとも、どうしても譲れない大切な部分。それは自分への誇りにつながります。人間は自分に誇りを持たなければならぬと最近、頓に思うようになりました。そして、私の誇りが何かと考えてみれば、やはり、……やはり、演劇に結びついてしまうのです。

木々の会に入って、二ヶ月余り。まだまだ何もわからないけれど、まずは、じっくり眺めていようと思う、今日この頃です。

はじめて観た

はじめて話合った二週間

——ドイツ民主共和国「労働者芸術祭」に参加して——

よしだはじめ

(演劇集団土の会)

旅の第一日

飛行機はあっけなく、一直線に空に、雲海の上のぼって行く。日本海の上空あたり、何度かのゆれ。雲の切れまに見えるシベリアの大地だろうか、大きな沼がいくつもいくつも果てしなく続く、夏のツンドラ地帯。

機上で三回の食事、一食目、鳥肉のクリーム煮にライス付、サラダ、キャビアののった卵と野菜、チーズ、パンにバター・ジャム、それにコーヒーマたは紅茶。二食目は鳥のかわりにステーキ、卵にかわってサーजनとい

ったところ。デザートにはロシアケーキ。それにしても、どこまでもいつまでもの昼の光だろ。羽田を午後一時半に発って、モスクワ経由のソビエト航空機のバリ到着は現地時間夜九時半。だが六月のヨーロッパでは

まだ夕方の明かるさだ。

市内に向かうタクシの運ちゃん、フェルコ・ルリ(映画「眼には眼を」などに出演した、あの太った俳優)にそっくりのオッサんだ。窓によりかかり、タクシー仲間とどなりあい、狭い道路にきりこんでいく。ホテルはモンマルトルの丘の下、映画ではおなじみの屋根裏部屋のついた建物の並びだ。深夜、周りの街を歩きまわる。フォーリー・ベルジエールのウインドをのぞく、通りのカフェでコーヒを飲み、人々をながめる。明日はパリ北駅からベルリンへ向け、国際列車の寝台車で過ごす長旅だ。

同行のメンバーは、全連演サ協の芳地隆介と国民文化会議事務局長の山部芳秀の両氏。ドイツ民主共和国(DDR)で一年おきに行われる「労働者芸術祭」に、DDR文化省か

ら招待された旅だ。滞独中の中央大学五十嵐敏夫さんの尽力があって、日本の労働者演劇代表派遣の話が東京働く者の演劇祭実行委員会(東働演)にもちこまれたのが今春、何度かの討議の後、この三人が決まった。山部さんが労働者の文化運動を総括する立場、芳地さんは職場演劇からの書き手、そして地域で舞台づくりをしてきたことでの私ということ、向こうでは五十嵐さんも加わることになっている。

DDRにて

△入国・ベルリン▽ 六月十五日朝、汽車は東ベルリンの入り口「フリードリッヒ」駅につく。武装した兵士、列車の下を歩く軍用犬、厳重な検問。何も無いに等しいフランス入国にくらべて、考えていた以上のきびしい対外関係を感じる。そのことは、ウンター・デレンブルグ門とそれに続く「ベルリンの壁」を、西ベルリン側のかたに止まる観客バスの姿とあわせて見たときにも、聞いていただけではわからない現実がいま対しているなと思ったことでもある。

ドイツの街は、ベルリンにかぎらず清潔で

ある。駅構内・大衆食堂・タクシーなどでは禁煙、街路には二十メートルおきぐらいにゴミ捨て、車の往来の少ない広い通り。掃途、パリの紙くずの舞う街角に、日本に帰ったような親しさを感じもしたが逆にすがすがしいドイツへの思い出が残る日々だった。それにデパートで食料品を買い込んだり——泊った一流ホテルでの食事は少々格式ばって当方肌合わないため——、セルフサービスの食堂で何度か食べたりましたが、生活必需品の値段はだいぶ安い。一日二五マルク(三千円弱)の食費を支給されたが、三食と毎食のビール、ワイン、コーヒーなどで余るくらい。

ベルリンでは「演出ゼミナー」に講師としてこられた千田是也さんと同じホテルということで、パーティ・観劇などの行動を共にした。とくに夜半、われわれがおしやることもあれば、千田さんがわれわれの部屋にこられることもあり、ついつい一杯、あれこれ話ということになる。観劇後、夜の街を歩き、共産党元本部の建物の前、戦前ここで働き、ナチからの統制をうけた経験をきき、今さらながら千田さんの年輪に感じ入った。われわれには観劇の他に、文化者や友好委員会などの訪問や打ち合せの仕事もあった。

日本からはじめての労働者演劇代表団ということで、ふつう以上の気のつかい方と歓迎をしてくれたようす、われわれの出した要望はかなり無理をしても実現してくれたのだった。

決まった日程の大綱。

十五日〜十八日 ベルリン。観劇・労働者

劇団への訪問・交流、その他。

十九日〜二十五日 ゲルリッツ。労働者演劇

週間の活動に参加。

二十五日〜二十七日 ドレスデン。労働者芸術

祭に参加。

二十八日 ベルリン。「まとめ」の話し合い。

△ヘルリーナ・アンサンブル▽ まっさきに観た芝居が、ブレヒトの「第二次大戦中のシエウエイク」である。夕飯もそこそこにかけたのだが、今度は少しはやすぎて、近所を散歩、ヘルリーナ・アンサンブルのとなり大きなミュージックホールで、若い人たちの足がそこに向っている。こいつも観てみたい、とくに観客の反応もあわせて知りたいなど芳地さんと話す。

一階の前から二列目の席で観る。芝居はほぼ満員の観客を突によく笑わせるのだ。各場

この拍手、うまい演技や歌には拍手やかけ声が出る。シエウエイク役の俳優は、ここ二十年この役を演じ続けているとか。彼にかきらず、表現のすみずみまでできあがっている感じ、いわゆる名作・名場面をみている。観客もまた役者の芸を楽しみにきているという感じが強い。はじめてみる本場のブレヒトなのだが、現代におけるブレヒト劇の意味ということはどうなのだろうか、それは日本人だから思うことなのか。ブレヒト研究家の五十嵐さんにきくと、ブレヒトをうけつづけることについては、ここでもさまざまな考えが流動的に存在しているとか。

劇場で感じたこと。一つ、ヨーロッパでは幕間には客席に一人も残らず、外へ出てお茶をのみ、おしゃべりする(郷に入りてはと



ベルリーナ・アンサンブル

いうことで、われわれもそうした。)二つ、当り前のことだが、プロの役者は端役に至るまで大変にうまい。そのことで観客に徹底的にサービスをしている(ロンドンで観たミュージカルはその最たるものだった)。三つ、通訳として滞在中われわれにつけてくれたハンス君が、「TEATER」をうまく訳せない。われわれにとつての「演劇」「劇団」「劇場」はこの単語でまさに一つなのだ。

アンサンブルの芝居は、ドレスデンでもう一つ観た。ハイナー・ミュラーの「セメント」。ソビエトの小説を素材にしたということだが、革命直後の建設とそれに対する反動が渦巻く工場と村、男女の愛憎、党員のありようなどを一人の掃蕩兵を軸にして描いている。「オデューッセイ」をも下敷きにして、ようて、場面ごとのタイトルはそこから名付けられている。大きな半球状の装置をグルグルとまわし、工場の大きな機械は巨大なつりものとして処理する。幻想的な場面も現われる。ことばのわからないのは実にくやしいもので、内容そのものにふれることのできない思い、感じとしては現代そのものをも非ざしにしようとしているようなのだが。

△ハイナー・ミュラー▽ 彼の作品はもう一本観た。フォルクス・ビューネの「農民たち」だ。十年前の作品というが東独における戦後まもなくの農村改革をめぐる舞台が展開する。その中で党員のあり方、官僚主義の問題など、過去の話を通して現在までの課題をえぐっているようだ。ミュラーはいまだドイツでもっとも注目されている作家の一人ということだが、二本の芝居をみて、社会主義の歴史と現実と人間のあり方を執拗に結びつけて追求しているところ、そして、素材を過去に求めているところに、よかれあしかれ彼の問題があるように思える(後に労働者演劇の現況についていろいろな人と話合ったとき、現在を描くことのむずかしさというところが異口同音に出されてきたが、わたし自身の仕事とあわせて感じる点あり)。

フォルクス・ビューネの舞台は、劇場全体に、客席といわず舞台といわず、工事中の建物と思わせる白い布をはりめぐらし、一番は大舞台いっばいに二十段近い階段——部屋の場面でも外でもその全体を自由に使い、こなし、人間が上から下までころげ落ちたりする——、二幕は完全な平舞台で、オートバイや自転車多用するなど、テンポのはやい場面

展開、また顔の前だけをマスク的に塗りわけたメイクなど。なるほどそういえば、ドイツ演劇には表現主義の元祖的な歴史があったっけなどと考えこまれたのだが、「セメント」もあわせ、ミュラーのドラマの質そのものが、このような舞台スタイルを要求しているのかもと思う。

ミュラーとは関係ないことだが、ベルリン郊外ケベックの酒場での経験を書いておこう。DDRでの三日目、電線工場での演劇サークルと交流した帰り道、駅前の店にはいった。いわゆる「メーカー」ものでない酒を飲みかう街の人たち、席の間を飛び歩く若い女主人(?)。相当酔った老人がわれわれのテーブルに寄ってきて、英語でさかんに話しかける。「エックスキューズミー」といってはその度に威儀を正す。大声で歌っているグループ。この酒場の入口に近いところのケースに軍服が飾ってある。そうだ、ここはあの、東野栄治郎の演じた「ヒゲの生えた制服」の現地なのだ。あの話のとは、ここに伝わっていることなのだそう。

△ゲルリッツで▽ 今年の「労働者芸術祭」は、東独南部ドレスデン県で開催されてい

る。演劇はその東端、ポーランドとナイセ川で接する国境の街ゲルリッツの「ゲルハルト・ハウプトマン劇場」で連日行われ、われわれはここに一週間滞在した。

ゲルリッツは十二世紀からロシアとヨーロッパを結ぶ市として栄えたといわれるが、今でもその当時の姿をのこす建物がのこされ、ある意味では市ぐるみの博物館といった感じ。つまったスケージュールのあいまをみて、準備してくれた観光公社(?)のおぼさんの案内でぐるぐるとまわった数時間があったが、昔の旅人宿をそのまま生かして内装したホテル、入口の装飾を保存した住居など多い。訪れた外国からの代表団はわれわれだけということもあって、開会式での紹介にはじまり別れのあいさつまで、主催者の人たちは心のこもった歓迎をしてくれた。ここでの上演は、今年三月に各地で予選が行われ、選ばれた十三の労働者劇団が毎日上演していくのだが、われわれが観る芝居については、その日はじまる前にそのあらすじや問題点を説明してくれることもそれであった。

演劇祭の本部は、市の中央の労働者クラブ、上演後の合評会・ゼミナリーの大部分もここで行われ、われわれも毎日の何時間かをこ



中央がウエーク・ヴェルト

こで過ごすことになったのだが、ちょうど前の広場でお祭りというか緑日というか何日間か続いた。展望車やお化け屋敷、くじびき屋などなど、老若男女の街の人が夕方から集まってくる。ビールのみ、大きなソーセージをかじっているわれわれの前に、七十をすぎた老夫婦が「日本人かね」と話しかけた。その晩、劇場に「アッとおどろいた。その老女は劇場のクロークで働いていたのである。

日本の労働者演劇について

「歌舞伎」というイメージを強くもっており、それをどう受けついでいるのかなどの意見がくりかえされる。それから財政の問題、劇団のメンバーがそれぞれ金を出しあって維持するということがわからない。「あなたたちは金持なのか」という。

このゼミナリーに先立って、司会のアドリブ・教授と打合わせ、その要望を報告の中にできるかぎりくみ入れる努力をしたのだが、その要望を项目的にあげておこう。

- ・日本の労働者演劇の組織は
- ・劇団のメンバーの構成
- ・劇団財政はどのように維持されるか
- ・だれの要求や関心を舞台に集約しようとしているか———という観客が対象
- ・労働者劇団と他のアマチュア劇団との区別はどこにあるか
- ・アマチュア演劇全体に対して労働者劇団はどういう態度をもってしているか
- ・どのような作品を上演するか
- ・演技では特別な方法をもってしているか
- ・作品・演技で伝統的なものとの関連、また国際的連帯からの作品上演は
- ・劇団の指導体制はどうつくられる

劇団活動を維持していくための困難は職業劇団との関連

劇団内での教育はどのように行うか

労働者演劇を発展させるための課題は

DDRの演劇に対する関心はどうか

喜劇・ソビエト現代劇

ゲルリッツで最初に観た労働者演劇は、四つの一幕劇で構成されたソビエト現代劇だった。はじめの場は引越する家族とその部屋にはいる家族との生活感のちがいを描いたコメディ、二番目が足のふみ場もないぐらゐ妻が品物を買ひ込んでいる夫婦の部屋に泥棒がはいってくる事件で、物質と人間の欲望との関係をサーカスの演技で創るファルス、次がモノドラマで、親子の結び付きが断絶している息子に声のメッセージを録音しようとする父親の話、最後にアパートの住人たちがみんなで合唱練習をするのだが、一人ひとりのおもむくでなかなかうまくいかない喜劇ということですむ。芝居全体は、三場の父親であり、四場の中心になる管理人を軸に、一つのアパートで展開するように構成されているようだ。実に面白く、またうまい。演出はワイマール劇場の人だそうだが、人物の行動が生々と明確に描か

の演劇祭では、各劇団の上演のほかに毎日ゼミナリーがもたれた。「ソビエト演劇から何を学ぶか」「古典遺産をどう継承するか」「専門演劇人との協力」そしてウエークヴェルト氏の直接指導による「演出の仕事」などで、出席できるかぎりのすべてに参加した。

演劇祭四日目の六月二二日、「日本の労働者演劇について」のゼミナリーが開かれた。われわれ代表団からの報告のあと質問と討論が行われることになる。まず山部さんが日本の労働者のおかれていた状況、労働者演劇の歴史、課題を概括的に述べ、芳地さんが主として労働者演劇の創作活動を、とくに自作を例として、「人間蒸発」(一九六二)から「幽霊はどっちだ」(一九七五)の十年間、労働者の状況と欲求はどうなってきたか、自分はそれをどうドラマとして描こうとしたかの問題を報告、そして私から、地域での活動を創作劇づくり、観客との関連、地方自治体をもふくめた民主的な文化運動の推進の問題で説明、最後に五十嵐さんが、補足と専門劇団との関係、創造のあり方をめぐって述べた。通訳をいれて約一時間半である。

その後、質問。ことが通じないこともあったが、日本の演劇状況については、全くと



一幕劇の舞台

れていること、アンサンブルが見事にとられていること、舞台にひきつけられ、またびっくりした。あとでみると、この舞台が演劇祭の金賞、管理人を演じた俳優が俳優演技賞を獲得したそう。

演出兼主演の女性が女優演技賞を与えられたという「仲間たち」という芝居もソビエトの現代喜劇だったし、イエーナという市のガラス工場劇団が演じた「カンパネラと部長」というのもそうだった。観ることができなかったが、前回第一位の劇団が「ヴァレンチンとヴァレンチーナ」を上演している。こ

うしてみるとソビエト現代劇が多いのだが、偶然そう言ったとはいえないようだ。いくつかの劇団の活動家と話してみたり、ゼミナーでの発言などからすると、アルプゾフ・ローゾフ・ヴォロージンなどの名がかなり出てくる。私の劇団ではローゾフを三本上演、「イルクーツク物語」も演ったという、目を輝かせてくる若い人たちもいた。簡単に判断することはできないのだが、「人間」「個人」を重視するという方向、「これらの劇の問題はわれわれの現実の問題である」という報告とあわせて現況を考えてみねばならぬ。

もちろんDDRの作家のドラマも上演されたが、舞台の質としてはどうも落ちる。何本かを見たかぎりでは、喜劇の方に軍配があり、また才能のするどさが示されているようである。日本で通用しているドイツ人についてのイメージ——真面目で固くて——からどうも腑におちなかったが、あとで出てくる「カバレット」の説明をうけて、ああ、そことつながりがあるのかもしれないなあと思っただ。ドイツの人たちは喜劇を実に好んでいるのである。

〈昼食をとりながら〉

(問) 全国で労働者劇団はどのくらいですか。

(答) 労働者演劇は古い歴史をもっています。十九世紀の九〇年代からたくさんの劇団ができました。今は約一〇〇〇あります。

(問) 労働者自身の手による創作ドラマが少ないと思うのですがどうでしょう。

(答) その通りで、そこには問題があります。作品がないのではないのですが、作家がすぐ専門演劇人になることが多いのです。

(問) 演劇祭ではプロの演出家が指導している劇団が多かったようですが。

(答) それは一般的な傾向ではありません。しかしゲルリッツに来た劇団は各地からすぐれた舞台がえらばれてくるので、どうしても演出家が専門家である場合が多くなってしまうようです。専門劇団と労働者劇団との関係は緊密で、例えば、ベルリンの労働者劇団はそれぞれ「ドイツ座」「ヘルリナー・アンサンブル」「フォルクス・ビュネー」などと関係を持ち、援助を受けたり、その劇場で上演したりしています。

(問) それ以外に労働者演劇を向上させるための努力はどうしています。

(答) アマチュアの演出家の教育が大切です。

の感謝の気持ちをあらわすために招いた昼食会での会話の一部。

△ドレスデン▽ ドイツの「京都」といわれるドレスデンでの第一日は、文化宮殿での「労働者芸術祭」開会式、デйнаモスタジアムでの陸海空軍楽隊の大パレードで始まり、三日目、ツインガー宮殿内庭でのベートーベン「第九」の演奏、大公園での閉会の集い——各社会主義国から来た歌と踊りのアンサンブルの競演で終った。外国代表団の数も多く、ここでは各地での催しを総集した祭

典といっただろう。

ドレスデンでは、またまた千田さんと同じホテルで、市中を歩きまわる行動をほとんどごいっしょした。街頭でのビール、立食い、エルベ河畔に青年たちの催しが並んでいる中を歩いたり、ツインガーの美術館でも時間を費やした。パリ・ルーヴルはあまりにも数が多くてくたびれはしたが、ドレスデンでは、ラファエロ・ルーベンスをはじめじっくりと接することができたのだ。同じ宮殿内で中世の甲冑の展示をやっている。千田さんは「これこれ」といって飛びこんでいく。

ドレスデンは古い寺院あとが多い。そしてまた、第二次大戦で徹底したジェータン爆撃をうけ全市が潰滅した街でもある。広島島の原爆ドームと同じように、被災の記念の跡をそのままに保存してある街だ。

この街のあちこちには仮設舞台がつくれ、楽団やコーラスが演奏している。何百人規模もあれば、四・五人がうたっているものもある。年とったおばさん連中もあれば、小学生もいる。夜もう一度でかけた芳地さんの話では、河畔の青年たちの舞台ではデイスコで大騒ぎだったという。一方、私だけだった大劇場のオペラ「魔笛」では、昔ながら礼装

演劇大学と組合とは協力しあって、組合からすいせんのある者は大学で教育をうけ、再び労働者劇団に帰って活動できます。また演劇学者が積極的に労働演劇にとりくんでいます。その仕事ぶりはここでみられたことでしょう。

(問) DDRの労働者演劇の特徴は

(答) ふつうの労働者演劇のほかに労働者カバレット劇団が多くあること、(注・「カバレット」はいわゆるキャバレーである。戦前にも「赤いキャバレー」など労働者演劇の武器となったこと、千田さんからもおききました) プロは五つしかありませんが、アマチュアは五〇〇もあります。政治的な問題、諷刺的な内容など身近かな事柄をすぐ寸劇にしたてて上演します。この活動めきにしてDDRの労働者演劇は理解できないでしょう。

(問) 労働者演劇の当面している課題は。

(答) 労働者自身が大きな作品で労働像を描くことです。とにかく今日の人々の生活と欲求をドラマで扱うことは、アマチュア・プロを問わずむずかしいことです。内容が複雑になりますから。

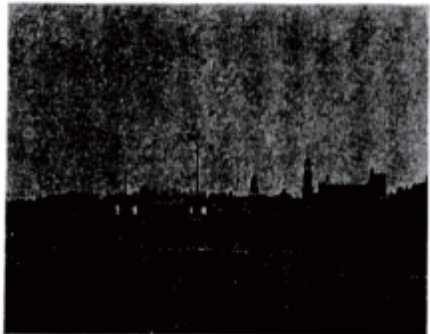
以上、演劇祭の主催者の人たちを、われわれ

の男女が座席を埋めていた。

「労働者の演劇」

わずかに二週間程度の滞在ではDDR労働者演劇の全局面をつかむことはできません。しかしこの地で、われわれは労働者劇団の上演を六本、他にミュージカルと寸劇を観、その全ての合評会と四つのゼミナーにも出席、また活動家たちとの独自の話し合いを何度かもった。専門劇団の芝居も三つ観ることができた。芸術、とくに芝居の場合、観客の反応もふくめて直接肌でとらえないと、話だけではどうしようもないことが多い。その意味で今回の経験は私にとって大切なものとなった。その経験のかぎりにおいて私が印象づけられたDDR労働者演劇の現状と問題を数点でまとめてみよう。

一、全体として舞台の水準は高い。もちろんゲルリッツでの上演は全国各地からえられた劇団(それらの中でも親ながら「おれたちぐらいいかなあ」と思う舞台もないことはなかったが)であるから当然であろう。感じるのは、メンバーの年齢構成が豊かであること(「四つの一幕劇」では五十代以上の男女俳優が若い人たちといっしょに大



ドレスデンの街

活躍していた)、稽古日数が長くとられて
いること(ベルリンで公開稽古に参加した
地域劇団では、秋の上演に六月の段階で一
応の舞台化ができており、去年から練習を
開始したと聞いていた。ただし一種のレバ
ートリシステムをとって上演活動は続け
ている)、観客組織をふくめ上演活動の保
障があること(ゲルリッツに集まった劇団
はこの期間ドレスデン県内各地で数回づつ
上演する)(ベルリンの工場劇団では数日
後ドイツ座で上演するが、七〇〇席全部売
切れていると聞いていた)など、全ての活
動にはあてはまらないとしても、おおよそ
はずれてはいないようだ。

二、右のことと関係して、専門人との協力関
係が密接なことだ。ほとんどの劇団が固有
の専門劇団と関連をもち、演出、その他の
援助をうけている。また希望によって専門
教育をうけたり、技術を学ぶ保障があり、
財政的にも安定している(できてまだ数
年、一年一作品という小さな劇団だが、去
年は四〇〇〇マルク(公定レート五〇万円
ぐらい)かVをもらい、今年はまだ少しふえ
るということ)。

これらは社会主義国として文化を振興す

る恵まれた条件だろう。ライブチヒの文化
センターの幹部と話した時、各劇団から選
出されるリーダーと専門家を交えて、アマ
チュア劇団の活動全体を計画するサークル
があり、レバトリのあり方や専門劇団
の協力、劇団指導部の教育などについて、
一九八〇年代までの課題を決めることにな
っていると話していた。

三、労働者の「カバレット」劇団の活動がさ
かんだということ(ドレスデンではどうし
ても観たいと思いい、文化省の担当者に骨を
おってもらったがどうしても券を入手でき
ず、前から予約してあった千田さんからそ
の夜話をきいた。二〇ちかい場面を二時間
で次から次へとこなし、諷刺をきかせたも
のが大部分とか)。この点について知るの
は、いろいろな意味でこれからだ。

四、労働者自身の現在の生活と欲求を描くド
ラマを創り出すことが確かに課題となつて
いる。個人・個性を問題にしなければとい
う発言を何度かきいたが、いいかえれば、
社会主義建設における現代的人間像を求め
るということになるであろうか。それは
「カバレット」演劇への民衆の強い要求と
基底部のところで深くかかわっている問題

であろうし、ハイナー・ミュラーなどの
作家についても共通の問題として、これか
ら続く課題なのであろう。

このようなことをうけとめながら、わたし
たちは日本で、自分の現場で何をするかとい
うことを絶えずつきつけられている。そのこ
とをおしすすめていくためにも、問題をは
きりさせていくためにも、視野を広げた「交
流」が模索され具体化されてほしいと思う。
東独滞在の最後の日、文化省の人たちに昼食
会に招待され、まよりの話合いの中で、お互
いの交流を深める保障をどうつくるかとい
うことが検討されたが、できれば、DDR代表
団の迎え入れ、次回の「労働者芸術祭」代表
団派遣などを、内容や課題をふくめて検討す
る機会をつくること。東リ演・西リ演が当然
そこに加わっていくことが必要であろう。

ヨーロッパは今年、百年来という猛暑で、
ビールやワインが実にくまなかった。街々や森
の多い平野の風景とともに、「あなたたちの
訪独は自分たちにとっても本当に良い刺激に
なった。ありがとう」と強く手をにぎりしめ
た人々の声、「わたしはずっと労働者劇団で
活動していきます」といった若い女性リーダ
ーの眼などが、今も私の中にのこっている。

劇評

松本清張作・寺島アキ子脚色

大岡欽治演出

霧の旗

——劇団潮流第18回公演——

関 口 晃 宏

(劇評家)

演出大岡欽治によれば「清張文学は戦後の
象徴」「多彩な清張の世界」と特徴づける。
そして「初期の短篇小説から長篇小説へと発
展、さらに推理小説の従来のプロット主義、
絵解き主義からふみ出した社会的視野を基礎
にした拡さ、フィクションとノンフィクショ
ンの相互関連により、社会と個のありようを
リアルに描き、一方古代史に対する深い知識
に立脚したおびただしい作品の数々は全く他
の追従を許さない」と説明し「ジャングル
の如き作品群」とも表現する。

劇団潮流のしかとの明言はないが、「多彩
な清張の世界」に挑戦することは、清張文学
の「大衆のひろがり」と、その視野の広さ」に
学び、そこへ新劇の伝統を結びつけ、具体的

には観客減という形で表れている新劇運動の
混沌に眺め、即ち大衆的新劇創造への路
をまさぐり出そうとしていることは充分推察
できる。確かにそれは現在の新劇運動にとっ
て必要な一つの見識であろう。

絵画修行の方法に名画の模写に始まりやが
て独自の画境を切り拓くというのがある。清
張シリーズ第一弾「左の腕」(高松昌治脚色
・演出)で昨年、極め付けと定評のある前進
座中村飯右衛門主演のそれを、脚本諸共なぞ
ることで「清張の世界」へ出発した。そして
今回の第二弾、18回公演大岡欽治演出「霧の
旗」は、初の舞台化ということもあり寺島ア
キ子に脚色を依頼し、さらに演技陣に俳優座
の松本克平、清水良英の出演協力も得、独自

の「清張の世界」構築へ踏み出した舞台であ
ったといえる。

松本清張作「霧の旗」は映画、テレビド
ラマ等にもなりよく知られた作品である。

幾つかの冤罪事件を弁護しその無罪を確定
することで名声を高め、今では一流有名弁護
士自他共に許す大塚欽三のもとへ北九州のK
市から柳田桐子(20才)が尋ねて来た。兄の
弁護を引き受けてもらうため、でなければ
兄は殺人罪で死刑になるという。大塚は愛人
河野径子との久しぶりの約束を果たすため時
間を急いでいたため事件内容も聞かず弁護料
が払えないことを理由に追い返してしまふ。
桐子の兄は死罪判決の上告中獄中で自殺す
る。それを伝え聞いた大塚は事件記録を取り
寄せ検討する内、桐子の兄の冤罪だったこと
を確認する。上京し「バー海草」で働く桐子
は偶然殺人容疑者となった径子の無罪を証明
する唯一の証人の位置に立たされる。径子が
大塚との秘密の愛を守るため殺人を行ったと
の報道は大塚の名声も一挙に失墜させる。名
声と無罪回復のため証言してくれと必死に懇
願する大塚に「不公平ですわ。兄は死んで径
子さんは生きています」と桐子は冷くはねつけ
る。そして酒で大塚を誘惑したあげく、偽証

強要と婦女暴行で告発し大塚を破滅に追い込む。

大塚のみならず桐子の兄、径子、さらには桐子も自分では意識しない全く偶然のことが破滅の因となっている。清張は戦後民主憲法下にも依然として存在するこの無気味さ、影、霧の中にはためく黒い旗をリアルに描くと共にそれを鋭く告発している。演出もそれに添って刻明に積み上げていく。劇団潮流が「霧の旗」を彩り上げた意図のもう一つはここにもあった。それは「この腐れ日本」「遺書配達人」と追求してきた系譜に属する。

脚色者寺島アキ子は、このテーマに添い原作用に忠実に劇を展開する。そして、総合雑誌記者阿部を新聞記者とし、大塚、桐子両者に好意を持ち劇中両者を結ぶ者として登場させ、また奥村という事務長を創り弁護士の仕事の特殊性を語らせ、大塚を立体的に浮き彫りにする役を果たさせるなどの潤色も加え、観客が納得できるように丁寧に二幕十二場の舞台劇としてまとめ上げ、劇団潮流「霧の旗」成功の土台を築いていた。難をいうなら、大塚が桐子の兄の記録を検討する動機が不明確なこと、各場の対話が一對一の点と線になっ

ダイナミックな展開を充分果たし得なかった問題点として指摘し得ると思う。

劇は、大塚の事務所、桐子が訪れるところから始まる。原作では大塚を「五十二歳の初老の充実を見せていた。」「永年の過去の突進からくる自信」「自負」「日本で一流」という言葉で説明する。幕開きの大塚にこの印象があるかどうかは、終幕の破滅へ向って気づかぬうちに一歩一歩転落していく姿、即ち「このような人でも」とその無気味さ怖さを観客に判らせる上で非常に重要であり、脚本では不明な公判記録調査の動機をおおきな点にもつながると思う。ところが藤本栄治演ずるところでは、彼の持つ「人のよさ」が表に出て、特に来客中に径子からの電話に出た時の甘さなど余計その印象から遠ざけた。この場でのテカテカした色の洋服もその感じを増幅していた。それにしても径子との時はどうしてヘナヘナになるのか。一幕二場もそうだが二幕三場の警察接見室の大塚など、ここでは警官の目もあることだし弁護士としての威厳を保持させた方が径子のためにすでに空洞化させられたものとして面白かったのではないか。

藤本の演技についていえば、破滅し奥村を初

め皆いなくなった事務所に一人いる大塚、幕切れ「わたしは径子との約束を破りたくなかったのだ。それで柳田桐子の頼みを、ことわったのだ」とぼつねんというせりふ、さすがだと思っただけに幕開きの大塚が惜しまれてならない。

昨年「遺書配達人」の松本克平出演の折は「学ぼうとしない」と不満を述べたが、第二回目ともなると劇団員も緊張が解けたか、松本克平、清水良英出演の効は確かに出ていた。何よりなのは、若い演技陣に演技とは何かが即ち役を引きつけるのでなく役の中に自然に入っていくということが判ってきたようだ。自分の持ち味を越えたプロの演技が芽生え出した。その著しいのが桐子の金子順子、阿部の小林滝三であった。

松本、清水の二人はかように成長した演技陣の中で安心して芝居をし全体をリードし舞台を引きしめて見ごたえのあるものにしていった。それだけに三ステージで干に満たない観客というのは惜しい気がする。



劇評

血を吐くセリフが欲しい

——熊と呼ばれるあいつ(関芸)を見て——

岸 本 敏 朗

(劇団四記念)

絵の事についてはまったくの門外漢を自認する私にとってこのレポートは少々億劫だった。まして今度のはどうも主役の吉田さん自身が余り見てもらいたくないともうらしたと耳うちされたりして、ますます気が重くなっていた。会場では仲議長が「いやー人手がなくて……」と自ら切符をもぎってくれた。しかし一方で、作者の柴崎氏が、この前の『鏡跡お蝶始末記』からどう一転してセザンヌになったのかぼんやりとした興味もあった。

芝居は良かった。一言にしていうならば、関芸が、一人一人の役者が、なにか久方ぶりに足が地にしっかりとついていた。かなり難解な芸術論が自らの日常の問題とダブって、鮮明にこちらに伝ってくる、それがこころよかった。「良い役者がいるなあ……」と思わされ、装置、照明も、奇をてらう事なく、実に

すっきりと無駄を省いて、透明であった。「こわい作家が、関西芸術座から出たものだと、わたしたちは自慢したいのである」(道井氏)という言葉の後で読んで無理なくうなづいた。

私はまったくの素人でストーリーを書くのにも気がひけるので一寸パンフから引用させて頂くと——

『近代絵画の父とよばれるセザンヌ。「印象派」の洗礼をうけながら、そこから脱けていったセザンヌ。ピカソやブラックに深い影響を与え、彼なくしては「立体派」や「抽象派」の成立は考えられないといわれているセザンヌ。

そのセザンヌの一生、および彼を取り巻く小説家ゾラ、画家マネ、モネ、ピサロ、ルノワール、ドガ等の関係を通して、人間の生き方とは……、また彼等が生きた近代資本主義と

いわれる時代とは……等の意味を鋭く問い、更に現代および現代芸術の問題にまで迫る」という事になります。

そして更に演出、道井氏によれば、この戯曲は二つの問題を提起しているという。一つは芸術家が権威や既成のものに憧憬している間は真の創造は生れないという事、(セザンヌは社会派クールベやロマン派ドラクロワに深く信奉していた)、それからもう一つは妹や妻を犠牲にしていくといった中で次第に自己中心の生活をし、そこから人間性の喪失を描かざるを得なくなったという敗北の歴史をみつめていると、いう事になる。

さて舞台——下手にやや高くした二重をおいただけの装置、白のカーテンが細くさかれ、ホリゾント前と、額ぶちのわくをかざり、一切の色彩は照明で明るくいろどられ、場所はずかしく丸筒形の白い椅子になったりテーブルになったりする置物をうごかして表す。幕開きはセザンヌ、ゾラが中学生、一寸無理だナア関芸の中年の役者では、と思っっているうちにどんだん年月を経てセザンヌ30才で一幕は終る。一時間半があつという間だった。二幕に入って、セザンヌが自分をくずと認識し、独自のものを追求し始める、まわりの画

家達もなかなかマークにこっている。主演の吉田氏も次第に年令をふかめていく。(まわりの画家がセザンヌをあざむく事に少し力点がありすぎた。彼等の追求するもの、重みも今一つあると、奥行が出たろう)やがてセザンヌはどこにも人間性を見る事が出来なくなつて、物と形と色彩の中で死んで行く、妹はそのなきがらの側でいう、「私の眼から見れば、皆様方は兄の敗北の歴史を賞讃なさっていられるのよ。だから、お願い。決して兄を近代絵画の父などとはよばないで。」

この二、三年、西リ演全体として創作劇は衰微の一途をたどった。それは地域に根ざすという事を根にもつてはと咲いた一連の創作劇の時代、一九七二年前後、以降特に下降の一途をたどったが私の中に一部の声として、特に職業劇団の内から、地域に根ざすという事だけでは不十分だろう、特に職業劇団としてはもっと広がり求めるものが加味される筈だという意見が心にひっかかっていた。しかしそれは何なのか——不鮮明のままで私には見えず、その所では常に心の中でいらいらが起きていたようだった。

そしてこの間、人間座の田畑氏の書きおろし、奇峰亭先生の幻の壺を見て、そして、同じく柴崎氏の書きおろし、熊とよばれるあいつ、セザンヌを見て、不忠儀に共通しているある種の感慨にうたれた事を正直に、間違っているかも知れないけれど、書く気になった。

セザンヌの事について『革新的とみえる印象派の運動は当時の庶民の生活を基盤としたものとはみえない。その又外側でセザンヌはただ「純粋」に描いていた「巨匠」である』とパンフにあるようにおおよそ民衆的ではないし、又十九世紀後半の激動するヨーロッパの中心フランスにあつてパリコムニエーの事が少し報告されるだけで、その芸術への影響もほとんどふれられない中で、兄、敗北の芸術家という事が強調される。

そして『奇峰亭』主人公の男はやっぱり自分の思う壺が焼けて日夜もんもんとしながら年月を経ている、そして行きつく所は「……どだい、焼物なるもん、思い付き次第。何を何に使つたからとて、一向かまへん。苦しうない——信楽火鉢は植木鉢になるし、すでに、茶碗は茶碗でなく、壺は壺で無くなるわ。かくて、そういう、ぎりぎりの、

かたちと色の、一切否定の、絶対自由の、トコトコゆきつく先の、そのまた先は——用途性そのものの消滅——総否定——これか？——そうか。うん。なるほど——わ、わかった」という事になって、男自身社会生活不適合者ようになっていく。

このように描かれたセザンヌと奇峰亭を見てそれはどのように描かれたものとして見る事は出来ない。それは余りにも共通しているし、演劇を転業として20年からやって来ている人達が今こそ裸になって今一度自分自身、芸術自身を見つめなおそうというあらわれでないのか、そしてそこからでないか、新しいものをうみ出し得ないという事でないのか、作者はうみ出し得ない奇峰亭なりセザンヌを否定したいのどうして民衆の方が見えなくてその芸術の軌跡だけがみえてしまう、それをどうすればぬけ出せるのかおしえてくれという叫びと開きなおりでないのか——そして何にもまして、自分達が賭けて来た演劇の仕事が決して敗北の歴史ではなかった事を、無に帰するものではない事を、信じて疑われないが、それが今、どう自分に確信させる事が出来るのだ。とひたひたとおしよせてくる、そのように私には思えた。

その点で演出の道井氏は公演パンフの中で見事に論破してられる。セザンヌをどう否定するか、大阪で芝居をするものがどう大阪人として自信をもつか、社会人としてどう「寄生依存の生活」の意識をのりこえるか、胸打たれる文章であるし、きつと、今度の作品では演技者一人一人、関芸の一人一人がその内容のすみずみまでわかつたにちがいないと舞台からうけとった事であった。

そこで——ようやと私の舞台評であるがどうしてそのような血を吐くような思いをちかに出さないだろうという事です。セザンヌは兎に角自分のものを求めて求めて画風を作りあげたにちがいないのに演劇はやはり大衆的でなければならぬという事からなのか、うまくしゃべられ、うまくミザンセームは組み立てられ、役者は次第にうまくふけていく、見ていて流れるように進んで破綻がない、確にそういう点では現在の関芸の力を遺憾なく発揮した。

しかし大衆的であるという事はそうではないだろうと思う。自己の内部にあるものを強烈に直接ぶつけていく、その事で、例えば演劇人として社会的に疎外された感覚は一般

のお客さんが「人間性喪失」の時代の中で疎外された感覚を呼びさまし、より大きな感動となつて大衆化されるのだろうと思うのです。その所に自信を持たないと、シラケたお客と一方的に思いこんで、それをどう喜ばせるかという事に重みがかかりすぎてしまう。と何のために芝居をやっているのだという無常感におちこんでしまう。そういう風に思うのです。

「セザンヌ」という芝居はもともと違った迫力を生みうる作品だと正直思います。そんな訳で、これは関芸が生み出した財産として、再演、再々演とは是非ねりあげて欲しいと思うのです。

(一九七六・一〇・一〇)



受贈誌深謝

季刊 えひめ 第4号

本号では松山市の生んだ著名な映画監督故・伊丹万作の特集を企画し、稲垣浩依田義賢、橋本忍といったひと達の想出追悼とともに坂本忠士氏らによる郷土色に富んだ貴重な資料を編んでいる。興味深い「評伝・丸山定夫」(神田泰雄)も連載4回目佳境に入った。

(発行所・松山市市坪町八六九一五松山文化団体連絡協議会・定価六〇〇円)

「演劇運動」 第2号

これは全通演劇サークルと全電通東京演劇集団が自らの仕事を深めるために役立つ目的とさらに「労働者演劇へのアプローチ」を試みた可成意欲的な機関誌ということが出来る。この号では、「人間乾期」の湯沢公演(全林野大会に出演)の立体的なルポルタージュと戯曲・作家研究に「芳地隆介」が特集されている。これに供した大橋喜一氏の稿は力作。(発行所・中央区銀座八一二〇一二六全通東京南部支部田辺昌気付八代表)定価二〇〇円

人間座公演・提携自立の会

「奇峰亭先生の幻の壺」

—「語り」のドラマへいきついた田畑作品

井上 満寿夫

(劇作家)

「奇峰亭先生の幻の壺」は、内容的にも現代演劇の問題としてもかなりしたたかな多様性を含んだ劇である。

そのことを探っていく前に、まず一応この種の批評文に必要とされることばを片づけよう。

作品解説文は、「この度の創作劇で僕達は、京都の代表的な伝統産業のひとつ『京焼』(「清水焼」)の世界に素材を求めつつ、資本主義固有の現象でもあり法則でもある、この生産と流通または創造と普及の間の不可解な関係にアプローチを試みてみました」と、その主題を明らかにする一方、この劇は、田畑実の「人形師卯吉の余生」(昭和45)から一昨年の明治中期に強行された「琵琶湖疏水工事」を描いた「琵琶湖疏水年代記」(上演名「河ひらく時代」)に続く、

「京都論」であるということも、作者の言葉として伝えられている。

劇は、京都清水、五条坂附近——京焼窯元「奇峰亭」居宅内と「連合窯」前、そして「ラ・マンチャ」と名付けられたスナック・バー店内を主要な舞台に設定し、それに時間空間を超えた非現実的な劇的空間を加えて、全三部——三幕で構成されている。

古き良き京焼に固執し、安易な今日の製法がら、さりとて自らに一流陶芸家としての才能もなく、ただできもしまい「交趾チャイナ」とよぶ壺の幻を思いえがくだけの「奇峰亭」主人の「男」(谷田章三)とも「奇峰亭」の女中で、いまは「男」の妻におさまる、経営悪化の「奇峰亭」を支える「女」(妻井喜美子)に加えて、丹波篠山の出身

で、先代から「奇峰亭」で陶工として働き、女中の頃の「女」を恋仲となりながら、「男」に「女」をとられ、陶工としての前途にも絶望し、いまは焼成工になっている、「老人」徳松(芦田鉄雄)。さらには四國

の「焼物屋」の息子で、「奇峰亭」に預けられて修業中の陶工見習いの「若い男」(草川哲生)と田舎の高校を出ていったん室町の織機問屋に勤めながら、いまは「ラ・マンチャ」の女になって「男」と愛人関係にあって、夢は外国旅行という「若い女」(宗重陽子)

——のこれら五人の登場人物の過去、現在、未来が時・空を超えて交錯して描かれるなかで、さきの主題が語られていく。いやあるいはその主題が語られていくプロセスで、それら五人の人間関係と過去、現在が明らかにされていくと言った方が適切かも知れないほどに、その両者はいまざり、比重に軽重がないのが、この劇のひとつの特徴であるところ。田畑自身がかつて言った次の言葉から推しはかれば当然のことであるかも知れない。

「『事実』と『虚構』のかかり合いついていえば、十九世紀に隆盛を極めたいくたの近代『長篇小説』が、その世界を真実にらしく見せるために常用した『時代背景』

や『事件の背景』という考え方は区別しなればならぬ」(「記録演劇・現代に於ける悲劇復権への営為」・創造誌一九七四年六月号)

この方法論の実践としての今回の舞台は、その多様で巧みな劇的構成とそれを全体的により発展させた演出に加えて、とりわけ「男」を演じた谷田章三(自立の会)の好演によって、その両者の統一・一体化は、戯曲段階よりも劇的成果をおさめたと思う。その一定の成功の要因は、いわば「事実」と「虚構」という二元論的方法を案じて、ひとつの人間の現実と収斂されたところにある。このことは、前作「琵琶湖疏水年代記」において、舞台と戯曲の間の間隙に苦しんだ作者を知るだけに、その苦しみをくぐりぬけた成果として評価したいのである。

それにしても田畑作品の饒舌さは一体どこからくるのだろうか。

「琵琶湖疏水年代記」は、明治中央政府の「富国強兵」「殖産興業」の政策に沿いながら、京都の工業化を意図した地方官と若きインテリゲンチヤの疏水工事の事蹟と自由民権運動の経緯を併せて描きながら、民衆にとっ

て「疏水」とはなんであったのがを問うた作品であったが、その饒舌さは客観的な歴史の記録に重点がかかっていた。内容的にはその延長線上にあって、危機に立つ「京焼」の歴史と現状を通して、いわばまるごとの現代批評論を試みた今回の「奇峰亭先生の幻の壺」の饒舌さは、登場人物のモノローグと語りと人物間の対話の形をとりながら直接的に観客にむかって語りかける「台詞」によって成り立っていたのである。

客観的記録性から変化して右に示した「語り」のドラマに推移していった要因は、さきに記述した方法論の問題にかかわっていることともあるが、もうひとつは、作者の現代に対するぬきさしならぬ心情の表現とみてしまったのだがいかかであろうか。評者には、作者がオモテの舞台で懸命に「生産と流通」「京都論」を展開しているウラ側に、田畑実の内

部から突きあげてくる叫びにちかひものが迫ってきて、「新劇を新劇たらしめる最少限必要な条件」として阿部好一が言う、「それは作品の主題が作者と肉体的なまでの深い結びつきを持つか持たぬかの一点にしか求めようがない」(創造誌・一九七六年九月号「演劇時評」)ことから言って、まさしくそれは

「作者の内面を通過して」感動をよぶ。この「突きあげてくるもの」の表象と田畑実が従来もつ「記録的演劇」への志向が饒舌さを生み、語り」のドラマにいきついたのであると思う。しかしこの饒舌さというものは、決して田畑戯曲固有のものでなく、昨今のつかこうへいの諸作品を挙げてもなく、現代演劇の特徴となっていることから考えてもはや時代的特徴となっている。そのなかにあって「語り」のドラマにいきついた田畑作品の大きな要素として、記録的要素を多く含んでいるのだが果してこの「奇峰亭先生の幻の壺」の世界にまでいきついたところで、あえて「記録性」という言葉を使っていうならば、それは絶対不可欠な劇的要素なのだろうか、という疑問がどうしても拭いられないのである。

この疑問を提出する評者の背景には、冒頭から延々と語られる「京焼」の歴史や現状からよりも、決して新しくはないが、「男」と「女」の「老人」徳松に加えて「若い男」たちが、人間的な心情と営みのなかで織りなすドラマにまさしく「京都」を感じ、劇的な興味を感じたことがある。こういえば、作者

はあるいはその興味を支え、それらの登場人物たちを劇的たらしめているのは、劇中で語られ、現実的にもそうである歴史と大状況であるという反論がかえってくるかも知れない。しかしその統一としての試みの劇という

ないのは、すでにお気づきの通り、この劇の一定のペースになっている「ドン・キホーテ」についてである。

評価を否定するのではない。それはそれとして評価しつつ、あえて疑問というよりも、卒直に言って不満として感じるのは、△男▽と△女▽そして△老人▽徳松▽の三者の関係における内面的形象上の問題である。なかでも△男▽にいわば△女▽をとられてなおかつ△奇峰亭▽にとどまって焼成工に甘じ、灼熱の熱たきに余生をおくり、カッ井二杯を喰べる前に必ず放屁する△老人▽徳松▽の内面的形象は、一定の想像力をかきたてはするものの、△男▽に對置する人間像としてももう少し深く提示してほしいというねがいを棄てきれないのである。

あえて作者が現代日本に「ドン・キホーテ」を登場させたその背景には、ハイネが「ドン・キホーテ」を読んで、「人類の永遠の幻滅を觀し」て涙を流したほどのことはなくとも、もはやツルゲネーフの対比を待つまでもなく、「ハムレット」では「ドン・キホーテ」の登場をうながさなければならぬほどに、作者の深い現実へのなげきと怒りを感ずる。だがしかし——というべきかあるいは逆にだからこそというべきかも知れないが、現代日本の「奇峰亭」は、「喜劇に転化」することなく、悲劇的結末を迎える。

陶芸家として絶望の果てに、△女▽に駆け落ちを迫り、△女▽に試みされ裏切られた△徳松▽の人間の現実には、△男▽の饒舌な絶望とはちがった僅のものが内在している筈である。

△若い男▽と△若い女▽に手にとりて去られたあと、△男▽は「焼物・焼物——いたい焼物で何や。(中略)近頃流行のオプジェたら。あのオプジェで、またいたい何やねん?(後略)と自問自答をくりかえしながら、突然狂ったよう笑い続ける。そして店へやってきた修学旅行生に侮辱され、からかわれ、フラフラと外へ出て、坂の途中で倒れて動かなくなる。△女▽はそれとまるで無関係のように材料注文の電話をかけつつづけ、

△老人▽は黙々と薪を割りつつづけるところでストップ・モーションとなり、それまで静かな京のたたずまいをみせていた背景が、ビルや京都タワーの黒い影に侵蝕されて幕が降りる。その幕ぎれはなんともせつない。

田畑実の前掲の「創造」誌にこう書いた。
「かりにも、『記録演劇』なるジャンルが成立し得るとするならば、その任務は『完璧な同時代史』を悲劇的形式に書き上げることでなければならぬ、と理解している」と。

「ドン・キホーテ」が現代日本ではやはり右の如き悲劇の主人公として書かれねばならなかったことはまことにくやしい。ぜひ「喜劇復権の営為」としての「ドン・キホーテ」の登場をうながしたい、というのがもはや紙数が尽きてこの拙文を終るにあたってのねがいである。妄言多謝。



劇評 國

「国鉄演劇祭」を観ての若干の感想

新 木 祥 之

(劇団四記念)

その日私は演劇を観にいった。神戸職演連の舞台しか知らない私が、いろんな想像や期待を抱いて「働くものの演劇祭—第二四回国鉄演劇祭—」の会場に赴いたにしても、その想像や期待は職場演劇の創造成果に寄せるもの以外ではなかった。

「企業系列での協議会組織として特筆すべきは、全国的な組織をもつ『全国鉄演劇サークル協議会』で、結成が五年であるから、すでに二十年近い歴史をもつ」と評価されているし、それは決して平坦な道程でなかったことも国鉄職取工場演劇部に多くの先輩・友人をもつ私には充分理解できたことだった。だから一九六八年の東働演座談会で国鉄大宮の小島康男氏が「最盛期には五〇サークルもあったのがいま一六サークルなんだから、量的にへっぺっている。が質的には高まっているとい

える」と自負している言葉のかけにむしる国鉄演劇協の志向を感じたりしたのもだった。幕が開いた。

先陣は岡山演劇集団(岡山サークル)で、「夜の対話」(滝ノ内吉一作)。サークル・プロフィールには「昭和三八年結成以来二五回の公演を重ねるなかで、五人の書き手を育て、国鉄演劇協の優等生。」とあった。国鉄を退職して学校の夜警に再就職した男が、生きれば生きるだけ恥をさらしているという思いと情性のような生への執着との相剋におびえながら、遂には自分の影に射殺(現実的には心不全)されてしまう。そして、男の影は立消える際に「自殺と出るか、他殺と出るか、心不全と出るか、新聞がどう書立ようか、休みなく働きた。お前さんの死は、決して、無駄にはならんだらう。じゃあ、お晩さまのところまで逢おう、アバヨノ」

と感嘆符つきで幕をきった。岡山の人たちも戯曲に沿って淡々と演じてみせたので、まったく静止的な舞台になった。静止的といったが、私にはこの男は既に屍蠟化しているに見える。確かに「男」は夜警の仕事をしているし、妻との確執、国鉄在勤中の事件など現実生活も出てくるが、それらはすべて心情を裏付ける背景で、劇行為を生み出してこない。

「影」のかかわりも「男」に對して劇的な意味で刺激になっていかなない。「対話」とはなっているが実質は「モノローグ」であるこの戯曲、書き方についての厳しい討論を「国鉄劇作グループ」としてやって欲しい。ところで、私は滝ノ内氏とは交際がある。当日も神戸職演連の代表として表方に陣取って、パンフを配り作品集をすすめたりしておられた氏は、国鉄を退職した人である。一見元氣そうに活動しておられる氏が「男」の心情に溺れたような作品をものしたと、その事実に伴う年退職者の無残を感じた。「お前、思想的に弱いぞ」などという話でなく、そういう世代、そういう思いに呻吟している人を抱えた神戸職演連のサークル活動のあり方に深刻な課題を投げかけているのではないだろうか。二番手は劇団あり(米子サークル)

「『なんでもやりこなそう』の意欲は関西演
サ協随一」ということで、「日本繁栄学入
門」のなから大橋喜一作「金権体質」「立
入資格証」を取りあげた。佐々木初夫（議
員）、小山喜久夜（姉）を中心に、演技力の
あるサークルと見え、だから、二つのエビソ
ード部分は、職場演劇では議員の標準体質は
見付からないものか、とか、妹があそこでヒ
ステリックに演つちやったら、二人の思想的
立場がとんでしまふな、とかかなりゆとり
ある観客になれた。それだけに、物価高騰、
七六春闘、秋年闘争での国鉄値上げと賃上げ
についての職場内の声、ロッキードと語りつ
なげる「語り」が演劇的にはマイナスになっ
ていた。二つの短篇を語りつたが、そこで
観客のアクチュアルな意識を呼びさまそうと
試みるのは、かなり達者な演技者がその日の
観客を考慮し、日々の動向に敏感に対応して
成立するのではないかと私は経験的に理解し
ている。

続いて、だるま座（愛媛サークル）で、
作、演出助手、装置、演技、と大車輪の藤本
文夫の「制限時間」であった。「六人の侍が
キャストであり、スタッフでもあり、遙々無
二『おもしろい芝居』を志して精進」と紹介

四団体の舞台を観終って、演劇を観にい
た私としては、正直なところがかかりした。
敵しい条件のなかで演劇サークルを持続して
いくこと、それ自体がたまたかである。そ
のたまたかを共有している仲間が年に一回集
つてきて交流し激励し合うことは大切な計画
に違いない。

しかし、それは『働くものの演劇祭』と銘
打った場合に市民（観客）が普通にもツイメ
ーシとは距つたものである。それに神戸にい
て、働きの演劇を創造、普及している各
地の仲間の舞台を観られるのは、おおきな喜
びである。たとえ小品にしろ、精いっぱい演
劇としてぶつけてきて欲しいと、あの夜集つ
た誰れもが願っていた筈だ。今度集つて来
てくれた三地区のサークルもそれぞれに劇団内
至はそれに類する名を持っている、各地では
きつとその地の観客を感動させる舞台を創
ておられると推測するところで今度の舞台に
卒直な不満を述べる。

もし、企画とその目標が曖昧であるなら、
国鉄演サ協で深めて、内容に即した集會名に
してもらいたい。

されているとおり、演出・効果・舞監・大道
具・小道具助手、といずれも藤本さんに劣ら
ぬ活躍ぶりであり、このサークルの楽天性は
舞台に溢れていた。しかしかんせん、侍は
助役を演じた藤本さんだけで、あとはどうも
雑兵程度にしか成長していない。だから荷物
取扱時間を八時から二〇時までで制限するこ
とで、駅勤務の合理化をすすめる一方、但し
書で客サービスの低減をごまかそうとしてい
る国鉄当局の顔として立廻る助役の狼狽ぶり
だけがコミカルに浮き出でてしまっていた。い
ま問題なのは、合理化のしわ寄せをもちにか
ぶっている労働者と国鉄利用者である市民と
が、矛盾の中でぶつかり合ひながら、元凶国
鉄当局への憤りを共有していく方向をまさぐ
っていくことではないか？といわずもがなの
疑問が観劇後に残るのは国労組合員や利用者
になった若い人たちが生きて、いなかった故
だ。しかし、それは若い人たちの責任ではな
い、演出がこの作品の構想を十分に演技者の
身体に叩き込む、努力をおこたっていたか力
柄を持っていなかったかである。折角の楽し
いサークル、今後の『精進』に期待はおおき
い。

将に、真打ち登場の感で「九〇〇一列車接

近」が始まった。作・島源三。

神戸職演連には、以前「小さな駅のあるも
のがたり」で早川昭二演出で痛めつけられて
きた人も多し。ある創造体験は、それを受入
れるにしろ否定するにしろ、今度の芝居づく
りのいい下敷になったことがうかがえる。ス
ピード感のある楽しい舞台だった。実は私は
この芝居を評するにはもともと不適任であ
る、「小さな駅——」では演出助手、演出の
梶君とは高校以来の仲間、職演連の方々とは
永年の付き合い、おまけに四代会から客演を
してゐるで、批評者としては四方眼くらしの
状態なのだから。それでも気になることの
一、二はあった。ひとつは、演出が、作品の
テンポに若い演技者をつけていくことに苦
勞して（それは渡辺、坂井の若手がよく応え
て好演）、人物デッサンの綿密さを欠いてい
たように思えた点で、石田助役の履歴が形象
に浮びあがってこなかった、廻りを固めるべ
き宮、森、青田が付合ひ程度にしか役をつ
れていないなどが例である。もひとつは、芝
居がトントンと快テンポですすむのに、幕開
き、暗転、幕切れが、どうも間が悪い、一言
でいえば舞台監督が創造者ではなかった点で
ある。

第14回東京働くものの演劇祭

- | | |
|--|---|
| 10月28・29日（木・金） 勤労福祉会館
演劇サークル麦の会
傷だらけの手
作・藤川健夫、演出・吉岡利根雄 | 11月17日（水） 勤労福祉会館
演劇集団石るつ
氣まぐれワタ
作・境野修次、演出・秋山昇 |
| 10月30日（土） 勤労福祉会館
東京・沖縄文化集団ゆんた
南風の島（仮題）
振付・鏡波弘美、構成・永井和子
演出・山里忠司 | 11月18・19日 勤労福祉会館
全通・全電通演劇サークル集団
日本生態学序説
作・芳地隆介、演出・大島純一郎 |
| 11月5・6日（金・土） 勤労福祉会館
演劇サークル土くれ
日本海流
作・菅龍一、演出・福田悦雄 | 11月20日（土） 勤労福祉会館
演劇集団土の会
現代幻想劇「昨日の私」
11月19・20日（金・土） 目黒区民
演劇集団ぶどう
コイナさん達の午後
作・B・ブレヒト |
| 11月11日（木） 四谷公会堂
サークルまわりみち
天国への遠征
作・椎名麟三、演出・川口健 | 12月10日（金） 勤労福祉会館
演劇サークルあなぐま
心の診察記録（カルテ）
作・伊東東作、演出・久菜一興 |
| 11月12・13日（金・土） 四谷公会堂
世仁下乃一座
説経節・小栗判官
賽の河原の船遊び
作・演出 岡安伸治 | |

観劇雑感

— 劇団大阪・青年劇場・未踏・銅鑼・労基 —

萩坂桃彦

八月のゼミもおわり、やれやれと思う間もなく早や十月である。九月の十日頃には台風十七号が襲い、一つの例でいっても長良川の決潰という惨憺な爪跡を残した。この酷さは、車窓からではあったが、こぼやさんの目撃した話をききながら、その爪跡を見ることが出来た。劇団大阪の「ひしめきあう不毛の季節から」を観て飯りであった。

ぼくのみた9月18日の舞台は楽日でもあった。最良の出来だったそうである。うち上げの席には作者のこぼやさんを据えて、劇団きづがわの林田時夫氏やわだちの又川邦義氏なども見え、お世辞でない賞讃の言葉がゆき交った。劇団大阪もめっきり力をつけてきたという評価なども、そこでは出た。

昨年、「豚」「海の墓」の一幕物公演を見ているので、ぼくもそう思う。たしかにこの集団は骨太くなったようだ。

劇団大阪の「ひしめき」が岐阜のそれといろいろと似ていながら、彼らが実は、はぐるまの舞台を知らぬというのがおもしろかった。つまり、そのことで、この戯曲の表われる姿の一つの答えが出るのである。

「書けない黒板」でもそうだった。どこの舞台も、教師と生徒のいきいきした生感が魅力になった。やはりこの作者の特徴の一つには、人間や人間の関係に対する描写に、確かさとして巧妙さがあるらしい。会話は躍動的で、人を得ると殊更にそれが際立つ。

戯曲の底流となっている管の「不毛の青春」に対する作者の、或はデスベリートな思いつきだが、深刻とはならず、俳優や観客を喜ばせるエンターテイメントに変化するのである。はぐるまの昌夫役の三島幸司の醸し出した独特の甘さや、岐阜、大阪のどちらにも出た不良学生群像の喜ばれ方などが、それだ。

ことを知った。同じ、客席との溶け合いにしても、微妙なちがひがあるのである。それにしても劇団大阪の役者たちがうまくなっていたことはうれしいことだ。

岐阜ではデユニットで出したギタリストがここで竹田幸雄ソロの奮闘で、男っぽい声量で、稍メロディが単調だったとはいえ、やりつくしていた。この芝居では、この歌い手はかそけく出るのが望ましいのだから、岐阜も同様、どうやらそうはならない。ここが文字づらの戯曲がナマになった時のちがひである。主役の昌夫（北野孝夫）は岐阜の三島幸司がちらついて困ったが、高校生らしい、ひたむきな真卒さは出ていると思う。家庭で奏でるトーンも先ずまずのアンサンブルで、妹の節子（中村英子）がのびのびとやっており、母親（西口伊砂子）が端麗な容色を庶民化していた。父親の斎藤誠は、役をリズムでとらえて一つの進境を見せたと思えたが、あの大阪弁の勉強は行き過ぎでもあり、むしろその歯切れは江戸弁であり（彼は東京育ちだと思ふ）、そう言えばそんな関西の落語家があったが、独り、カラカラと廻っていた。この役は幕開きでの音櫓がとりにくいのであ

このことは演出がそこに力点を置くということなしに出てくるのであった。

劇団大阪の演出（堀江ひろゆき）の仕事は戯曲の一句一節を踏みしめるような手堅い作り方だっただけに、そのことが余計はつきり出たとさえ言えるのである。

本来深刻な教訓劇であるべき管の「ひしめきあう不毛の季節から」が、このように役者や観客を喜ばせることの秘密を蔵していたことは、可成り地味な悪い話である。やはり作者は、知り過ぎる程に芝居作りを知っていたということになるのだろうか。

もう一つ新たに得た感触があった。それはこの戯曲の持つローカル・カラーについてだった。

劇団大阪はこれを大阪弁に直して、そのとりほぐし方も決して悪くはなかったがやはりこの戯曲の土壌は中部地方の都市、言うなれば岐阜だと思ふ。

国鉄職員である父親にせよ、二流校に吹きよせられた生徒たちのロマンチズムにせよ、賄婦おさとなどに出てくる一種のどこかさなほ過密大都市の棘とげした環境からは出て来ない。はぐるまの舞台が客席と渾然一体となった秘密の一つはそこにあったという

る。おさと（梁礼子）はセリフ言いに苦心のあとが見えたが、生活をにじませるまでにはいかなかった。ここでも、はぐるまのおさとが良かった。

不良学生の星野（清原正次）や浅見（福井晴成）や子持ちの役者でも羽がのびせるし、ネブカ（川村和江）などは置いただけで味が出てくる。

むしろ、ここでは昌夫の同級生チ坊（北尾利晴）と鈴岡（坂本富代）との線がくつきりと出、これは予想に反して、健康な芝居じゃないかと思えるようになった。

「書けない黒板」の山田先生の糸をひく村井先生（高津征郎）には、戯曲のめんでも息継ぎが苦しい。従ってこの教師の苦悩はもう一つ浮べぬが、チ坊の線が一本くつきりと浮んだのは収穫である。生徒指導課長（杉本進）との対決にもちからが入っていた。

紗幕をつかってみせた、受験勉強に余念のない学生たちの影像や手際よくみせた場面の進行も、当然といえば当然だが、破綻がなかったのはやはり力がついたということであるだろう。ここまで来ると、望ましいのは、劇団大阪は「自前のウラ」を持つことである。

さて東京では、青年劇場・未踏・銅鑼の仕事が相次いでいた。

青年劇場は勝山俊介作「愛」の三部作（瓜生正美演出）であったが、ぼくは既に老化したので、いずみ・たく氏の音楽は別として、この「愛」の倫理の正しさ、美しさといったものが瑞々しくは入りにくくなっている。瓜生氏の演出もそれを確信し過ぎるようであって、勝山氏の戯曲と重なりすぎるとぼくには思える。ただ、「魂」「鳩」「嵐」と並べてみて、「鳩」が殊の外躍動した舞台となったのが不思議でならない。湯沢麻の役の高安美子という女優さんのおかげであろうと言ったら当然であろうか。

「鳩」の舞台は過去に2回ほど見ており、いわば、青年劇場「極め付」の感があったのだが、それが高安美子の湯沢麻で記録が破れた。むしろ、この「鳩」の出色の印象のために「魂」の母親小竹伊津子の、かの女で支えることのできた深みも、「嵐」の一種のディスカッションドラマのスタイルで筋を通そうとした話も印象はうすれるのである。

三つの作品にはそれぞれ一人づつ解説役がつく。「朗読劇」という一見取りつき易い感

じのものが、こうして並べてみると意外にむつかしい構成であったことがわかる。

戯曲には作者の文体があって、そこから一定の形容の出でくるのはやむをえぬが、あの三人の解説役が、ああも似てくると、かえって一人でも足りたと思えてくるし、その方が簡明になるのではないかと考えたりしたが、或はこの意見は乱暴にすぎるかもしれぬ。申し上げついでに駄足すれば、パンフレットで見た瓜生さんの文章で「革命的ロマンチズム・リリシズム」という字句がぼくには気になつてならなかつた。

劇評といえど主観的にならざるをえない。好みに偏向のあるほくのような場合いっそう免れがたい。せめて心にもないことだけは言うまいと思うのだが、真意の伝わらぬことも多いようである。褒めていれば無難だけれどそういう訳でもないだろう。

未踏の「朴達の裁判」は、しかし、ぼくの好みに合つた。どうもこの集団に対する傾斜よりも「平沢計七」「強盗猫」をみて来て、こんどの「朴達の裁判」でますます強まった感じだが、やはり立川雄三という仕事師のぼくにとつての魅力だろろうと思う。労働者階級

に対する彼の愛情は、真率であり、確かで、強靱に思える。

小説(金達寿)の「朴達の裁判」も好きであつて三回は読んでゐる。だからその馴染からいってもこの作品の批評には満を持したが、脚色も舞台にも、やはり一本とられた感じだつた。ただ一点、しいて難を言えば、前向きだか後ろ向きだか判らぬけれど、川芝河の詩「灼ける湯き」などに重ねた立川氏の昂ぶりが、この作品(舞台)の僅かな破綻になつたとぼくは考えたいのである。

愚直愚鈍としか見えぬ農奴上りの朴達が、南朝鮮の王政の下で、身体ごと、破格の「革命性」を身につけてゆくという、それこそ革命的ロマンチズムを何とかこん日の金芝河の抵抗と重ねたいという志向は誤つてはいないが、そこから生ずる若干の性急さは、朴達の変革のリアリティを端折るのだ。端折つたとぼくは思つたのだ。しかし、そのことも朴達の役に末永克行という好俳優(客演)をえて、一応の分止りを見せられては、歯ぎしりをしてひき返らざるを得ない。

末永克行の朴達に好みの違いはあるかもしれないが、ぼくは喜んだ。むしろその際立ち方が、彼の周りの似たり寄たりから特別とな

つてきて、下手をするやと民衆の英雄となる危惧がある。しかし、ここにも配慮がきいていてその似たり寄りの役に、岡部政明、横柳

二、池田生二、和沢昌治、神山寛といった手堅い役者を配して、朴達が揉みにもまれて全相沢(島田彰)のセリフにもある感嘆詞「ああ何という連中だろろう」にそぐわつてくる。そしてこの朴達ごときを愛し慕ひむ女性丹仙(牛崎教子)をうまく美しく出す。(美人というのではない)

ぼくはなにかと抗いつつも、未踏の「朴達の裁判」を褒めたいのである。

さて、銅鑼の「イカサマの冒険」に移るがこれがまた面白かつた。

著名な一人の老軽業師の、職業的行詰りと類魔が、彼を尊敬する少年科学者の啓示によって甦えるというたつた二人だけの芝居、といたつたらひどい説明になると思うけれど、ナイヤガラの漢布を背景に、老軽業師と少年の合体した「イカサマ」となった偉人が、歓喜の中に綱渡りを見せるのが幕切れなのだ。あながち当らぬこともないと思う。

劇中何10分かは、老軽業師ブロンディン(森幹太)が少年カルロ(柳沢謙二)を肩車に乗せて緊迫したセリフの対応を見せる、と

いう珍しい試みがあつて、森さん大変だなとそればかりよけいな配慮として働く。それに

はひとつには俳優森幹太に対する既成のイメージが災いしている。「土」の勘次、「炎の人」のゴッホのあの重さ。時にはどこか教育者の容貌を携えてくるあのしたたかさ。さすがに動ぜず、この軽業師の役を仕了すけれど、根源的な、もっとも気楽な「軽業師」芸人そのものを見せるのはむつかしい仕事になつた。道化の哀しさ、美しさ、きびしさ最後のひと齣で出たときにぼくは感動した。

戯曲から舞台の構築という演出の仕事で、限られた手勢の中で意欲的に試みている最近の早川昭二氏の作業は注目に値すると思う。当然そこでは抜きさしならぬ関係で、俳優とのかかりが出てくる。「橋」の鈴木瑞穂、「イカサマ」の森幹太といった人たちの協合作業と情に、一方では新しく俳優を生み出すという苦しい仕事も伴なう。こんどの「イカサマ」の若者役柳沢謙二がそういうことであるかないか判らないが、見ていて、いかにも産み出されたという感じのさわやかな出現であつただけに、ぼくはそう思う。

二時間余、客席で、心が締めつけられっぱなしという経験も近頃ではないことだつた。

さて、最後に劇団労芸の「裸の町」の公演にふれてこの饅舌を終りたいと思う。

マンモスプロダクションで半身不随の形関東プロダクションが夏の東リ演ゼミをひき受けることで活気づき、9月11・12日は新発足の感じのブロッカ会議になつた。そこでなにかと弾んで決められたことの一つに「観劇交流」があつた。ぼくもせめて関東プロダクションあたりは見ることしようと考えたのである。しかしこれも、なかなか忍耐の要る仕事であることは、芸の客席に坐つた時に別の形で知らされた。

会場は国電大井町駅前品川文化会館小ホール。一等地である。快晴。研究生公演「三幸福」を添えて見せたのだが、それが宣伝の枠外だったのか、始まった時(昼の部・一時)には客席は僅か数人。狭い舞台に大道具の持込みが多く、演技者は殆んど立て、勿論或は坐つて、そのために動きの乏しいセリフ芝居になつてしまつた。蘇義先生(赤峰源三郎)などそれなりの努力だが表情やセリフでこの劇の童話的などかな雰囲気を出すには技術的に日が浅い。むしろこの芝居に演出があるとなれば、あんな大道具なんか一切とつばらつて役者を思いっきり動かすべきである。登場人物で少年林吉(戸神真由美)で

やっと思がつけたのはそのためである。それにしてこの種の新人公演は客席からの支援がなかつたら教いようがないだろうと思う。

「裸の町」になつてぼくはまた一つ客席を前に出た。この芝居は云つてみれば「額縁芝居」なので、客席の数を無視して専ら独り鑑賞の姿勢に変えたのである。

おもしろいことに演出(荒井敬亮)の姿勢もそのようだったのである。戯曲の腑分けもゆきとどいており、人物の設定もわるくない。ただ金貨増山金作(富塚武男)は、ぼくの子想からは立派すぎた。猫背で小柄な金貨増山金作を考へていただけに、これは堂々としていて、容れものに比してむしろ威容である。

そういうイビツな感じはあるにしても良くやつていた。往年映画では、この役が小杉勇、富久が島耕二だつた。その富久、労芸の富久(能登始)は可成り足りない。あんなに詠嘆的情熱一辺倒に役に扮しては違つたし、エロキッシュンの中も少しいし、第一発音が、余つたり足りなかつたりするのである。せめて正確に潤舌法位はマスターしてからでないかと、真船の戯曲は無理ということになるだろう。辛うじて、富久の妻喜代(中川陽子)が良かった。ほぼ適格にこの役は出ていたと思う。

八田さんとのこと

黒 沢 参 吉

八田元夫さんが亡くなった。

一〇月四日の東演の劇団葬に参列するつもりが、風邪をこじらせて果たせず「演劇会議」から出席する萩坂氏に、あわせて東演の弔意をとどけてもらう始末になった。

そのかわり、という訳では全くないが、本誌に追悼の頁をもうけるといので、資格は甚だ疑わしいがその役をうけもたせてもらうことにした。

先生とよぶひとを、小学校卒業以来もつことなかつたのは、変屈なほど、この敬称にこだわる。ひとから先生とよばれると、こそばゆくて逃げだしたい気分になる。自分がそうだからか、職業が先生であるひと以外、なるべく「さん」と呼ぶ。

でも、気がついてみたら八田さんのことは

いつも、先生とよんでいた。かって生徒であったことも、弟子であったこともないが、何となく自然にそうだった。

八田さんをはじめ見たのは、築地小劇場の楽屋でだった。一九三四年の末か五年のはじめ、一七才の小僧っ子だったばくは三好十郎さんの口ききて、新築地劇団に入れてもらえるかもしれない僥倖を胸に（そんな可能性は、多くの資格からも劇団の条件からも皆無の筈だが、ガムシヤラなばくの志願に手を焼いた三好さんが、うまく劇団にジョーカーを渡したのだろう）、家をとびだしてセッセと稽古にかよった。

稽古は、三好さんの「妻恋行」と、藤田満雄（山本安英さんのご主人）さんが蘆花の原作から脚色した「灰燼」の二本で、八田さん

ルやあちこちの工場を駆けまわった。

そのテアトロに、四七年後半から八田さんの「演出修業」が連載された。広島で原爆に殺された丸山定夫さんたちのさくら隊が、移動上演した三好さんの「獅子」を、覆面演出してきた八田さんの記録風な演出論で、毎号待ちかねて読んだ。あとで単行本になったが、そのシステマティックな叙述が、当時絶頂期の自立演劇の演出者、役者に与えた影響は大きかった。

焼失した築地小劇場跡に近い築地四丁目に、そのころ二階建てのおんぼろビルがあった（先日バスで通ったら、昔のまま残っていて懐しかった）、そこに新演劇人協会、移動演劇連盟、東京自立劇団協議会等々が雑居していて、演劇ビルとよばれ、多くの光芸社もそこに居候していたので、いつか八田さんと顔見知りになった。ことに八田さんは、松尾哲次さん、陣ノ内鎮さん等とともに、自立劇団の指導に熱心だったから、出先の工場や発表会場でも、よく一緒になった。

ある日、演劇ビルの東自協の部屋で雑談していたら、そこへ昇奮した八田さんが踊るような足どり入ってきて、ワシづかみにした原稿を頭の上でバサバサ振りながら、傑作が

出たゾ、労働者の戯曲がここのまできたぞノと叫んだ。その原稿は、堀田清美さんの「子ねずみ」だった。

その後、ひとの芝居の写真をとるだけでは満足できず、川崎へひっこんで芝居をやるようになってから、八田さんばかりでなく東京の芝居の世界とは、距離ができた。多摩川をはさんだ隣りだが、地方劇団というものにはそんな穴の中みみたいな状況と雰囲気がある。その上、五〇年問題がらっげなぼくらの劇団をもゆさぶった。そこから遠いはずには、一〇年かかった。

八田さんに又お逢いするようになったのは六〇年安保のころからで、八田さんは新劇人会議の中心的なメンバーであり、ぼくらの劇団は建設座から京浜協同劇団になり、六三年には東演演が生まれた。

ぼくらの劇団の当時の演出者一郡山勝利君が、かって演出研究所にいた縁もあって、何度か芝居をみてもらうこともできた。その都度、駅前のみ屋へつれこんだ八田さんを見て、意見を書きたがった。褒められた記憶は一度もないが、ひとりひとりの演技について、あそこはこう、ここはこう、ていねいに

は「妻恋行」の演出だった。「灰燼」の演出は、岡倉士朗さんではなかったらうか。少年のぼくには「灰燼」の方が、わかりやすく面白かった。この二本立の上演は、三五年二月大阪でやられたが、築地ではやっていない。ところで、このときの山本安英、薄田研二、東野英治郎、永田靖といった俳優さんたちの稽古姿は、いまだにクッキリ憶えているのに、八田演出の印象はまるで残っていない。

六、七年前、八田さんのお宅でその話をしたら、「妻恋行」は好きな芝居だ、東演でもやらせたいんだよ、と言われた。執念ぶかさというか、息のながさというか、そんなものを垣間みた気がした。

戦争末期、写真屋でメシを食っていたばくは、敗戦後、舞台写真をはじめた。光芸社と名のつて、俳優座、文学座、新協劇団、文化座など、それから東京や神奈川の自立劇団の舞台を撮り、それらを染谷格さんの好意で毎月テアトロの巻頭にのせた。

築地小劇場の舞台写真をとった坂本万七さんの桃源社の跡継ぎの意気ごみで、ライカ2台上に米軍の闇フィルムをつめて、焼跡のホー

話してくれた。ボソボソだが、いつも厚味と温かみのある指摘だった。

「妻恋行」の話がでた訪問は、うちの劇団の稽古場をたてる資金カンパのおねがいだったが、八田さんは無造作に応じてくれた上、一時間の約束を倍以上のぼしていろいろ話してくれた。話題は全くいろいろだったが、中心は労働者の演劇活動にかかわってで、ぼくには八田さんが、この活動の未来に大きい希望を託していること、シッカリした根拠でそう考えていることがよくわかった。それが嬉



しかった。自然に先生と呼ぶことになったのは、このときからだとおもう。

二年前の春、劇団へ体操の指導にきてくれた東演の小川雅功君と、うちの広沢綾子君が国際結婚し、その祝う会に八田さんに下村さんと揃って出席、さいごに花嫁が凛々しく大太鼓をうつ姿に、ほうと見惚れていた。八田さんはワリカシ（ひとのことはいえたりでないが）、かわいい女の子に弱い風であった。（註・写真はその席のもの）

ことし三月二日、東演の「六つの断章」をみにいった俳優座劇場で、開幕直前カメラ手最前列の席へそと坐る八田さんを見かけ、入院中ときいていたから、幕間に見舞いをいうと、ちよいと病院ゆけて来たんだよ、なにたいしたことないんだ、といった返事だった。何だか元気がないな、とおもった。細川ちか子さんが亡くなった翌日で、それが八田さんとお逢いした最後になった。

「演劇との対話」や「からだ文化の出発点だ」を上梓してからは、体操の話―七〇才といえどいかに体がやわらかいかの話を、逢うごとにきかされた。そういう話にのりやすく、自分の教室でも真似ことをやって腰を痛

めたりするタチのぼくは、あのぶんでは八〇才位までピンピン頑健であろうとおもいこんでいたので、赴報は寝耳に水だった。去年、千田さんに来ていただいた東り演の、二月の大学には八田さんからじっくり話をきくコーナーをつくって……などと考えたのも、あとの祭になった。

去年八月号のテアトロは、8・15三〇周年の特集で、「戦後演劇の原点を検討する」座談会と、何篇かの評論―回想をのせたが、座談会での八田さんの発言は木下順二さんその他の人々のそれと、とくに戦争責任の問題をめぐって微妙にうかがっていた。

また、評論のひとつ、永平和雄さんの「戦後新劇の起点―戦争責任の欠落」では、かみあう余地のないきめつけようが、他の人々とともに八田さんにもむけられている。たしかその翌月のテアトロ（手許に同誌が見当らず、不正確だが）で、八田さんはおそろしく感情的な調子で永平評論にこたえた。いや、こたえにならない態の文章だった。戦争責任のとりようについては、木下さんが話の中で引例している、自らの傷をいやでもいつもなめながら何とか歩いていくタイプと、何とか罪ほろぼしをという誠実良心派タ

イブとは、別々にでなく、たとえば八田さんの中にも（むろん、ぼくの中にも）同居しているのではないか。書斎で自分の内側と向きあっているときと、創造集団であれ運動体の中で活動しているときとは、異ってくるだろう。俗にいえば、それが生きている人間ではないかとおもう。

永平さんの八田さんへのきめつけは、全く反省してするりと別人のように変わり前のことは忘れて一生懸命民主的運動をやる―木下さんの分類に従えば、第二のタイプへのそれと読める。このきめつけにぼくは不賛成だ。敗戦後、新劇のリーダーたちが戦争責任のとりようを誤ったのは事実だし、それが今日、創造運動としての日本演劇の衰退の一因であることも否定しないが、だからこそ八田さんにしても、七二才まで生き恥をかいたり苦しんだりしなければならなかったのだろう。朝日の夕刊にのった尾崎宏次さんの短い追悼文が、心にのこった。戦争中の生き方について晩年までくるしんでいたのを、私は話のはしはしから聞いた」といふ一節で、胸がいたんだ。

ゲンバク一年・八田元夫という年賀状は、もう貰えない。

八田元夫氏・追悼

「八田先生、僕達は 佐様奈良とは云いません」

岩城薫
（全国鉄演サ関西ブロック
協議会常任幹事・岡山職
場演劇集団代表）

岸本氏より八田先生について書いてくれと云われた時、スナナリと引受けたことを今悔いている。二十年もの間色んなことを先生から学んだようだが、まとまって何一つ果してないことを考えると、申し訳なさで一杯である。あんなこともあった、こんなこともあった、と原稿用紙の前に思い出す度に、涙が溢れそうになって結局何も書けず十日たってしまった。身体の中に風穴があいたみたいでやり切れない気持ちでたまらない。まだ先生が亡くなったことが信じられない、だがそれは信じなければならぬ。今の私は混乱していることは確かだ。混乱の儘で先生のことを書くのは大変失礼だと思う。もしかしたら間

違ったことを書くかも知れない、併し許して欲しい。私にとって先生の存在は余りにも大き過ぎたから……。

一九五六年春第三回国鉄演劇祭中四国大会で岡山へ先生が来られた時が私と先生の出会いの最初だった。先生もこの第三回が国鉄演サとの関わりでの最初だった。

当時の演劇祭はコンクールの形式だった。私は今のコンクール形式はサークル演劇を決して成長させないと先生に云った、と先生は「私もそう思います、だがそれを正すのは諸君の任務です」私は横面を張り飛ばされたような気がした。

その頃岡山にはサークルはなかったがコン

クール形式の間違いを正す課題に取り組みざるを得なかった。その翌年第四回演劇祭では同鉄劇研として参加し全国鉄初の中四国ブロック協議会結成をうながし関西ブロック協議会と引き継がれ今も猶唯一のブロック協として続いている。

私は以来先生の出される課題を真剣になって取組んで来た。「心の目で見えるセリフを」「興味の質を変えて行こう」「常に一兵卒の気持を持って」書いて行くとキリがない、が正直な所何一つ確実に実現させたものはない。今更悔いても仕方がないが……。

或る寒い夜のことだった。東京で友人と一杯やった後たまらなく先生に会いたくなって電話をした。確か二時はとうに過ぎていた、と先生はすぐ来なさいと叮嚀に道順を教えてください。不案内の東京でやっと明前の駅へたどりついたがさてそこから判らない。

駅前の店で聞いてさぐりさぐり先生の家の玄関口にたどりついた。出て来た奥さんが「あらっ八田と会いませんでしたか、岩城君はさっさと道に迷うに違いない、途中途見に行つてやるって……」。恐縮して待っている、首巻をしてトンビを羽織った先生婦がって来た。開口一番「あつ来てたのか良かっ

た良かった、さあ僕が燭をしてやるからな」と嬉しそうな顔で目の前で燭をして「さ、のめよ、僕は盃一杯だけ交際してやるから後は好きにやれよ」。三好十郎遺品の椅子に腰を下ろして色んな質問に終始にこにこ笑い乍ら答えてくれた。もう十数年も前の話だ。それ迄の先生に対する或種のこわさはすっかり酒と一緒に流れてしまった。

病氣上りの先生は二十年間殆んど酒と肉は口にされなかった。演サ協での会食の時はいつもジュースだった。或時「先生ジュースを盃に入れて飲んで酒の感触が出来ますか」とか「岩城君僕は役者じゃないよ、でもねえ水なら出るだろうけどジュースじゃねえ」と大笑いされた。私と先生のかけ合い漫才の始まりである。以来私と先生は時折りかけ合い漫才をやった。

数年前の岡山での演劇祭の時私の書いた歌舞伎パロディ五人男を全国鉄演サのリーダーを集めて上演することになった。公演の前日ブツケのケイコの時である。私が夫々の役者にダメを出していると横に坐って見ていた先生が又夫々の役者にダメを出された。「先生演出は僕ですから黙って下さい」と云うと「岩城君これが黙ってみておられるか」。又

しても押問答、舞台の役者がそれを見てゲラゲラ笑い乍ら「おい演出は先生か岩城かどっちだ」「演出は俺だ」「岩城君僕に黙ってろと云うのか」。爆笑爆笑でケイコにはならず翌日の公演は役者が思い思いの演技を見せて正に演出不在も甚だしい芝居になった。「先生がドピン口を叩くからこうなっただんですよ」「岩城君あれを黙って僕に見ろと云う方が無理だ」と又かけ合い漫才、今だに全国鉄演サの語り草になっている、あの時の楽しそうな先生の顔は嘗ってなかった。今度の松山公演で又あれをやろうと関西では計画していたのに……。

創造については本当にさびしい先生でした。いつの演劇祭でも全部が片付くまで作業服（私達は戦闘服と云う）を脱がないのも先生の「常に一兵卒の気持を持って」に学んだからです。

「先生僕達はさようならとは云いません、先生は僕達の中に生き続けられるのだから……」

◇編集附記・八田先生の告別式は10月4日午後一時・信濃町千日谷会堂。岩城さんの涙声の弔詞が印象深かった。

八田元夫演出の醜態

八田さんの仕事を多く見ているわけではないが遺作となった「勳皇やくざ瓦版」（作・吉永仁郎）は付度をふくめて実に「八田元夫の面目躍如」と言えようである。やくざ否定やこれを諷刺して見せることはそんなに難しくないが茲に出てくる「黒駒の勝蔵」のように、演出者からかくも珍妙に愛されて出てくるのは珍しい。然も甘くない。この甘くなさは、八田さんの、長い、叩き上げられた芝居修業の中から出てきた辛さである。

きめの細かさやデッサンの確かさは定評があるが、同時に芝居の面白さを追求してやまぬ劇しさも、独得だと思ふ。茂木憲さんがこの辺の所を「スタニスラフスキー・システムとやくざ芝居と、大衆芸能的手法との三結合」とうまく言われているが、確かにそうである。

八田さんの唇はある時何故か美しくなった。そこから、実に複雑な笑いが、声にはならず洩れることがあった。辛刺で皮肉で暖かかった。遺作「瓦版」にはそれが溢れている。（萩）

盆 待 ち 一 幕 浅 野 良 二

登場人物

山村ヨネ 軍人遺族・独居の老女
田中源助 ヨネの隣人・中年の建築業者
警 官 定年前の巡査
モンペの女 ヨネの近所にいた主婦
相談係 地方世話部職員
その他戦死した息子の声、マイクの声。

時

昭和四十八年八月

所

神戸の或る町の裏通りにある山村ヨネの家
遠くからの盆おどり呼込みの音楽で暮あく

と、

壁のハメ板が殆んど落失し、粗壁だけになっっている古い家。

玄関は表通りに面しているのでみえないが、裏の勝手口が主な出入りに使われているらしい。

八月十三日の夕方近く、仏壇にはハスの花が活けられて、お盆のお供物が並んでいる。

物干竿には洗濯物がたくさん干してあり、ヨネ、外を掃き終え、空を気にしながら洗濯物を取入れようとすると、隣人田中源助、くわえタバコで、うちわを使い乍ら登場。

ステテコ、ランニングシャツに腹巻という、ゴロ寝から起きてきたような恰好。腹巻の真ん中がふくれているのは、タバコとマッチが入っているらしい。
（この男は余程タバコが好きらしく、ヨネとの対話中も、ひっきりなしにタバコを喫う）
うちわでタバコと将丸を払って掛ける。

田中 決心はついたか？…。

ヨネ （イヤな顔して洗濯物を取入れようとす）

田中 おばはん、そんなもんあとまわしや。先にワイの話をきけ。（ヨネが尚も洗濯物

にこだわっているので業を煮やし)きけっ
ちゅうたら!

ヨネ (不服な顔でブツブツ言い乍ら将几の
端に掛ける)

田中 こないだの返事きかして貰おかい。ほ
れはれ、老人ホームのこっちゃん。このボロ
家のこともな、ひっくりかえりて決着をつけ
ろ。

ヨネ ……(沈黙の顔に苦笑が浮ぶ)

田中 何やその顔?…鼻の先で笑うんか?…
おぼはん、この田中源助をなめとんな
ッ!

ヨネ ……(苦笑のまま)

田中 ツンボカッ!

ヨネ ……(しばらく黙っていたがやがて情
然と)きこえてま!

田中 (思わずひるみ) ……き、きこえてた
ら返事せんかい!これはな、ワイだけの考
えではないんぞ。近所中全部が…その…
自治会長も、婦人会長も、民生委員もじ
ゃ。つ、つまりやな、みんながそない思て
ると言うこっちゃん。

ヨネ ……(憤りがまだおさまらない)

田中 思ってるんやないッ。言うてるんじ
ゃ。

ヨネ (冷笑し乍ら否定する意味で首と手を
振る)

田中 ちがうてかい?…フン。知らんのはお
ぼはんだけじゃ。こんな話、誰がわざわざ
ここへしにくる?世間ちゅうもんはな、臭
いもんにはフタをせえ、うるさいことには
近寄るなじゃ。それが当世の人情と言うも
んやぞ。ところがワイはそうはいかんの
や。なんせお隣りさんやさかいな、逃げも
かくれもでけへんのや。もしもの時には一
番にとやかく言われるんはワイとこなんや
ぞ。迷惑この上ない話や。しょうがないや
ないか。

ヨネ ……(顔をしかめ、首をかしげる)

田中 フーン。何かい、迷惑ちゅう意味がわ
からんてかい?…難儀やのう…おぼはん
はな、ひとり暮らしやし、身寄りはないし、
それに年も年やし、いつぱっくりいくやら
わからへんのやぞ。

ヨネ (田中を睨みつけボツンと) 上げつな
い…。

田中 アレ?えげつないて?…新聞にやて…
…イヤ、おぼはんとはは新聞とってないや
ろけん、ラジオでもしよ中言うてるや
ろ?…死んでから一週間目にみつけたやと

か、なかには半年もわからなんだというん
もあるんやぞ。そんな時世間の奴らはどな
い言う?隣におって何をさらしとったん
や、とこうくるにきまっとんや。なんせワ
イはジゲの者ではないよってにな、みんな
の風当りも一倍強い害や。あいつら何をぬ
かッしよるか?…それに警察やてワイのと
こへい一番に調べにきよるわい。これが
迷惑でうて何や?まあまあそんな怒った
顔すな。そこでや、な?おぼはん。ここん
とこはようきいとけよ。老人ホームへ入っ
たらな、病気になるても世話ぐらいはして
くれるやろさかい、誰もしらん間に死んど
ったちゅうようなことはないんや。第一、
隣近所に迷惑がからへん。そこんところが
一番カンジンなことなんやぞ。どうや?ワ
イの言うてることはちゃんとしてスジが通って
るやろ!

ヨネ (悲しい顔になって空の一点をみつめ
ている—間—) ……わかつてるんかい
な?…早う迎えにこんさかい、こんなこと
言われるんや。海の底であらうとどこであ
らうと行くがいな…。

田中 (タバコをふかし乍らげんな顔)
な、何やて?海の底?…アホらしもない。

おぼはんの行く先は老人ホームノ

ヨネ、突如狂ったように笑う。

田中源助、只、啞然とヨネをみつめる。

間—ハンドマイクの声、やや速くから
次第に近づいてくる。

マイクの声 御町内の皆さんにお知らせしま
す。自治会主催によります盆おどりは、
児童公園で行う予定でしたが、お天気が悪
いため、体育館に変更することになりました。
皆様方の熱心な御要望によりまして、
雨でも行いますので、多数御来場下さ
い。

マイクの声 繰返し乍ら次第に遠ざかって
ゆく。

ヨネ (俄かに浮き浮きして) 盆おどりに来
い言うてまっせ。あんたおどり好きだっし
ゃろ?行ってきなはれ。

田中 そんなもんどっちでもええんじゃ。怒
ったのが急に気違いみたいに笑いだし

たとおもたら、今度は盆おどりで浮き浮き
か…ワイの話は一体どないな?…たんや!

ヨネ ……何の話でしたかいな?

田中 ……(怒る言葉も出ず、目だけむい
てタバコ喫う)

ヨネ (ひとり言のように) ワタイはいつも
ここで居ながらの盆おどりや。歌きくだけ
でも結構たのしいもんや。けん、来年は
どないやろ?…きけるかな?

田中 ワイの話はきかんのかッ!

ヨネ (瞬間けわしい顔) ……誰がどない言
うたて、ここ動けるかいな。お盆には仏さ
んが戻ってきてやいうのに…アホらしも
ない。

田中 ……ほな、仏さんが戻ってくるさかい
動かれへんてかい?

ヨネ ……おかしおまっか?

田中 ……(呆れて、ヨネを賤める許り)

ヨネ おとうさんはなア、去年五十年忌すま
したんやさかい、まあまあ一応の義理はす
んでますわ。けん、史郎は…あの子はま
だまだおまつりしてやらなア、戦争のあつ
たあの遠い海の底から戻ってくんのやさか
い、ここにおらんとあかん。なんして動け
るかいな。

田中 ウッフッフ。笑わしたらいかんで。ウ
ッフッフ…(笑いこける)

ヨネ 笑いなはれ、なんぼでも…ワタイは
な、お盆が来るのん楽しみに生きてるよう
なもんや。お盆が来なんだら、遠い昔にク
ビクってますわ。そんな年寄りの気持、
誰にもわからへん。ワタイは絶体ここ動
かへんのやノ(空を気にして洗濯物の方へ
立ちかける)

田中 ま、待たんかいノ雨はまだ降らへんわ
いノ(強引にひきとめ)おぼはん、話をけ
つたいな方へ逸らしたらあかんのやぞ。仏
さんやなんてな、人の目にはみえんもん
や。幽霊と一しよで足があるワケやなし、
どこへ宿替えしたかて訪ねてくる。そんな
もんをタテにとってこの家を動かれへんや
なんて、そんなこと誰にも理解でけへんの
やぞ。

ヨネ そやさかい誰にもわからんこっちゃん
言うてますがな。あの世というのはな、十
万億土とやらいうて遠いとおまんのや
そう。そこから仏さんきてんやさかい、
勝手に宿替えなんぞしたらえらいこっち
ゃ。仏さんウロウロして…そんな罰当り
なこと…口にするだけでも気がとがめる

がな。南無大師遍照金剛。南無大師遍照金剛。南無大師……。

田中 やめんかい。気色の悪い。アタマいかれとんのとちがうか？……ひょっとしたらな、息子の仏が悪いんかもしれんぞ。一べんオガミ屋にでも頼んで、おぼはんが悪いんおとしてもらわないかんわ。

ヨネ それはあんたらの勝手やが……そんなことしたら、きっと仏がとり憑くわ。怖いでエ。へっへ……。

田中 ア、アホぬかせ。ワイみたいながみつい男に仏がとり憑いたりするかい。地獄のエンマはんでもワイにはシャッポンぬぎよるわい。ワッハハハ……。いかにいかに。笑うてたらあかんのや。一寸油断したらじつきにこれや。まるで神がかりみたいやさかい、人からは氣違ひみたいに言われるし、カンジンの話もかいくかみ合わへんのや。けんどな、ワイはお隣りさんやさかい、黙つてみとられへんのや。このポロ家やてもうじきへたつてしまふぞ。メリメリときて下敷きにでもなつたらどないすんのや？

ヨネ ひと思いに死ねたら結構。

田中 ちえッ。へらず口叩きくさつて……そ

田中 何とか言わんかい。

ヨネ ……言うたらあんた怒る。

田中 怒るようなこと言うつもりか？

ヨネ ……やめとこ。

田中 言わなわからへんやないかノ言えッ。

ヨネ (しぼらくためらっていたが) ……ここにアパートが建つのに、なんでワタイが老人ホームへ？……。

田中 ちえッ。ぬかすやろと思てたら案のじょうや。おぼはんノいざの時のことをちとは考えてみいノ寝込んだ時に一体誰が世話すんのや？ワイとこのヨメハンや娘がおぼはんのシシバとるんか？おぼはんの顔みるんもいやや言うてんのに。そんなことになつたらワイとこに家庭争議が起るわ。おぼはんはここにひとりでおつてはあかんのや。そんな簡単なことがわからんのか？ヨネ ……そんななら、シシバとるんはいややが、ここの土地と家はほしいと……。

田中 な、何ぬかっしやがる。おぼはんはな、明日へたばるかもわからへんのやぞ。その腹くくつてるんか？どうや？!

ヨネ、無言で唇をかむ。

次第に悲しくなるヨネの顔。

んなんやさかい世間の同情がないんじや。

ヨネ 同情？……(冷笑して家の方へ目を反らす) なんぼポロでもな、こは自分の家や。家があつておまけに遺族のお金もろてる者がなんして老人ホームへなんぞ……。(冷笑)

田中 ハッハハ。(大きく手を振つて) タダの老人ホームやと思てるんやろ？違う違う。ゼニコのいる老人ホームじゃ。ワイが責任もつていれたるんや。なんせおぼはんは年金が月二万円あんのや。不足分はワイが出したる、イヤ、出さしてもらうと言つてらんやないか。その上、月々の小遣いやて不自由させへんのやぞ。

ヨネ 田中はん。遺族のお金が二万円やなんて……あんたそんなことどこで……。

田中 そらアお前それ位のこととは……へっへ。なんせ他人のワイがおぼはんの面倒みようちゅうんや。いろいろ調べてるわい。ヨネ (わざと相手にきこえるようにつぶやく) ほんまに油断ならんなア……それに月々の小遣いやなんてそんなもん……フッフフ。

田中 な、何やて？……ま、まあええわい。つ、つまりやぞ、ひとり暮らしの年寄りを助

金おどり呼込みの音楽流れる中で一問一

田中 ほれみい。だんだんわかつてきたやろ……世間の奴らはな、ちっとも寄りつかんくせしてその実は、ウの目タカ目で見たくさるんや。おぼはんをだまして甘い汁吸うたりでけるかい。なア、ようわかつたやろ？ついでに言うとかけんどな、アパート建てるには何百万……ではもう足らんや。何千万というゼニコがいるんや。勿論銀行で借るんやが、元金も利子もきちんと返していかならん。そんなややこしいこととともおぼはんでは無理や。そやさかい、おぼはんがここの不動産一切をワイに任してくれたら……つまりやな、権利をゆずる契約書というんにハンコ押ししてくれたらええんや。任しとき。ワイには心安い司法書士やら不動産屋もちゃんといつてらんや。ワイに任したら万事もいことやつたるし、おぼはんの面倒もみるんやさかい、言うたらおぼはんは気楽なもんや。なんせ身寄りがないうんやもんな、財産残してもしよがないんやぞ。それに、財産ちゅうもんはな、面倒みてくれる者にゆずるんが世間の常識というもんやぞ。

けて、それそれ、その何や、老人福祉のためにいささかでも……いやその……いささかなりとも……ちえッ、なんでワイがこないなむずかしいこと言わんならんのや？この田中源助はな、伊達や粋狂で建物を商売にしてるんや。このポロ家叩きつぶして、こへアパート建てる位朝飯前や、そこからあがつてくる家賃でおぼはんを死ぬ迄面倒みたる、いや、みさしてもらうと言つてるんや。こんな結構な話ほかにあんのか？

ヨネ ……。

田中 どうや？涙がちょちょぎれるようなええ話やろ？何も考えることあれへんのや。素直に乗れ。

ヨネ (無言で首を振る)

田中 ほな、どない言うたらわかるんや！

ヨネ (首を振つて) ……どうもフにおちん。

田中 何やて？……するとワイがインチキでもやるぞ？……。

ヨネ ……(苦笑)

田中 ははん。わかつた。ワイがおぼはんを

だますとでもおもてるな？

ヨネ ……(苦笑)

ヨネ ……。

田中 おぼはんノびっくりすなよ。とつておきのありがたーい話をきかしたるさかいのう。ええか、ようきいとけよ。おぼはんには仏まつりが一番カンジンなんやさかい、ワイはそこまで考えてるんや。正直なところ、ワイは抹香臭いことは大嫌いな性分やが……おぼはんがワイの言う通りにするんや。嫌いやとか好きやとか言うたらへんのや。幸い遠い親せきに高野山の坊主がおる。そいつにでも頼んでおぼはんこの仏さん……勿論おぼはんが死んだらおぼはんも入れてや、全部永代供養にしてもろたるがどうや？無縁仏になつては浮ばれんぞ。

ヨネ ……。

田中 どうなんや、一体？

ヨネ ……。

田中 ワイがこないに腹割つてるのにまだわからんのか？

ヨネ そない言うたかて……。

田中 呆れたなア……こんなええ話出してんのにええ加減に折れんかい。そらアな、ほつちらかしになつてる年寄りが、世の中をすねてる気持はわからんことない。依こ地

になって、とげとげしゅうなって……おぼはんの気持ようわかる。けんどな、まるで針ねずみやぞ。一寸でもさわったらくしゅッときよるんや。そやさかい誰も寄りつかへんのや。ところが世の中はようできとる。捨てる神あれば拾う神ありや。その神様から折角お声がかかっているんやさかい、逃がしておくもんかい。すべった転んだの時、頼りになるんは一体誰や？民生委員か？警察か？それとも隣りの神様か！

バラバラと雨。

田中 田中上上がりかけると、将凡の端にいたヨネがひっくり返りそうになったので危くつかまえ、

田中 ええかノ老人ホームへ入るんやぞッ。

家ワイに任すんやぞッ。ワイの言うことがおかしにおもたら、民生委員にでも誰にでもきいて貰えッノ（走り去る）

ヨネ、たよりない腰付であわてて洗濯物を取入れ、雨にぬれた顔や手を拭く。

盆おどり呼込みの音楽をきき乍ら、ぼんやり雨をみつめていると、涙があふれ出

てくるヨネ。

間――。

ヨネ、仏壇の前に坐り、線香をたてて合掌。

異様な音響効果で、舞台下手にモンペの女現れ、スポットあてる。

モンペの女 おぼさん。わかりましたで。未帰還兵のことを調べてくれるところがね。灘にある県立の中学校やそうよ。一中言うてたずねていった方がようわかるんやて。そこにね、戦争の後始末をやっている地方世話部とかいうんがあつて、係の人が調べてくれるんやそうよ。おぼさんみたいに戦死の公報はけえへんし、死んでるんやら生きてるんやらさっぱりわからなくて困っている人がぎょうさんおるんやて。そこへ行ってきいてみたらどう？こっちから言うていかんとね、戦死の公報はなかなか出してもらえんやとか言う人もあるんよ。ほっといたらあかん。いつまで待っても何も言うてこんのとちがう？ほんまに、親ひとり子ひとりやのにむごいなア……。

スポット消え、モンペの女退場すると、「相談係」と表示した机に向っている軍服（階級章などははずした）の男にスポットあてる。

相談係

（立ったままで）息子さんが入隊された朝鮮の部隊と言いますのはすな、たぶん大尉という所に原隊のあった陸軍部隊だと思われませんが……残念乍ら記録が残っておりませんが……確かなお知らせはできないんですが……その留守部隊にいて復員してきた者の報告では、部隊が比島作戦に……つまり、フィリピンでの戦いですな、それに参加出動したことになったようでして……それは先ず百パーセント確かな情報だと思うんですが、しかし、その部隊からはまだ一人も復員しておらんようです、果して目的地へ上陸したもののか、それとも途中でどうかなったのか……何しろあの頃は瀬戸内海にまでアメリカの潜水艦が入ってきたという極めて不利な戦況でしたので……それにこれもまた留守部隊の者の報告なんですが……渡航中に敵の、つまりアメリカの海軍部隊の攻撃をうけたと

か……我々の常識では、そういう場合は必ず飛行機と潜水艦の両方にやられたものと想像されますので……たぶん輸送船も護衛の軍艦もことごとく沈んだのではないかと……しかもそれが朝鮮とフィリピンの間

のどこの海なのかも残念乍らわかっていないありさまでして、もしその通りだったとしますと、まことにお気の毒なことになるんですが……。

スポット消えて相談係退場。

スライド。

死亡告知書

本籍 兵庫県神戸市兵庫区谷
山通四丁目十二番地
陸軍上等兵 山村史郎

右昭和武拾年壹月貳拾九日ルソン島方面ニ於テ戦死セラレ候条此段通知候

昭和二十一年八月二十七日
兵庫地方世話部長 秋山 久

留守担当者

母 山村ヨネ殿

スライド。

日本国天皇は故山村史郎を勲八等に叙し白色桐葉章を贈る

昭和四十四年七月二十六日贈をおさせる

大日本
國 勳

昭和四十四年七月二十六日

内閣総理大臣 佐藤 栄作
総理府賞勲局長 岩倉 規夫

第一五六一三二四号

スライドのある間に、

声（エコーをつける）お母さんよ……お盆には帰るぞ……海の底の部隊がみんな一しよに帰るぞ……ラッパ吹いて帰るぞ……待っててくれよ……。

合掌していたヨネ、幻聴の息子の声に思わず立上り縁先へ出る。
異様な音響効果で現実に戻る。
ヨネ、がっくりと坐り、じっとしている。
間――（雨の音にダブって盆おどり呼込みの音楽流れてくる）

ヨネ、思い直して洗濯物をたたみはじめる。

また、涙があふれ出てくるヨネ。

制服の警官が自転車をやってくる。

自転車を手口にもたせかけ、荷台に二つ折りにして積んであったポスターを抱えて家の中へ飛込む。

警官 ひやア、えらい目におおた。ごめんよ
（雨にぬれたポスターをポンポン平手ではたき、ハンカチでぬれた服を拭く）

ヨネ、あわてて涙をふき、チャリ振返るが、わざとしらんフリして洗濯物をたたむ。

警官、台所の上り框に掛け、汗をふきふ

き声をかける。

警官 おばあさんノワシやワシや。元気でおらんかいな？

ヨネ (振返らず)へえ。どうにか息だけしとりませわ。

警官 そんな情ないと言わんと……盆おどりにでも行ったらどうや？雨やけんとな、体育館やさかいべつちよないで。それそれ、音楽が鳴ってるがな。雨の日の盆おどりやなんて随分オツなもんやで。そう思わんか？

ヨネ へえ。

警官 なんと気のない返事やなア……一寸こつち向いてんか？……

ヨネ 洗濯物たたんでまんのや。

警官 そんなもんこつち向いたてでできるがな。

ヨネ こんなおばあんの顔みたかてしょうがおまへんで。

警官 ハッハハハ。弱ったなア……すまんけんど一寸だけ扇風機こつちへ向けてえな。もう暑うて暑うて……(汗を拭く)

ヨネ (扇風機を警官に向ける)

警官 ……風、けえへんがな。

ヨネ ええことおまへんで。またブタ箱へ逆戻りさしたんやもん……あれはな、お国のために大事な息子捧げた者にするにかいな？……

警官 えらい話出してしもうて……(タバコを踏んづける)

ヨネ タバコの火、あんばい頼んまっせ。

警官 ハイよ。(再び踏んづけ、ひとり言のように)だんだん悪うなってるがな。

ヨネ ほんまに、悪い世の中でしたわ。まるで真ッ暗闇や……。あれからしばらくは、おまわりさんが糞泥棒にみえてなア……

警官 一寸待ってえな。警察がそんなことする筈ないんやがなア。

ヨネ いいええ、げんにこのワタイが……

警官 わかったわかった、そらア腹が立つたやろ。けんとな、誰もがひと握りの米で血まなこになって、つまり、米が人間を変えてた時の悲しい出来事や。昔のことはええ加減にご破算してくれや。なアおばあさん。その罪亡しに……いやいや、そうやないわ。つまり、そのかわりに言うたらなんやけん、今はワシがこうやって元気かい言うて顔出してるんやさかい、そこんとこの誠意はくんでもらわな……

ヨネ 今、デンキ入れるとこだすわ。電気代やてなかなバカにならんのでなア。(洗濯コンセントを差入れ、ひとり言のように)今日び、二万円やそこそこでは食うてチョコんやもん……

警官 (困惑した顔でタバコ喫う)

ヨネ (洗濯物をたたみ終えて不意に振返り)まだ風いきまへんか？

警官 (びっくりしてタバコを落す)イ、イヤ、きたきた。おおきにおおきに……(拾いあげたタバコをヤケにプカプカふかす——短い間——)……おばあさんの気持、

わからんこともないんやが……そういつまでも根にもたんと、昔のことはええ加減に忘れてくれなア……

ヨネ ……

警官 こないだ聞かしてもろたやないか。おばあさんが警察嫌いになったワケちゃうんか……それそれ、終戦後に米のカツギ屋しよった時になんべんも警察にあげられたちゆうアレやがな。

ヨネ ……警察がヤミ屋を取締るのん当り前でっせ。

警官 ちがうがな。おばあさんが怒ってるのはそのあとのことや。

ヨネ なにもあなたが悪いことしたワケやなし、それにここへ訪ねてきてくれたのはあんなだけですよってになア。つらい話や。

警官 上ったり下ったりで、まるでエレベーターや。しかし、ここへ訪ねてくるのはワシだけやなんて、そんなことないやろ？

ヨネ (首振って)誰がしまっかいな。

警官 いや、ホームヘルパーというのんは大体寝たきり老人が専門みたいになってるよ

うやから、おばあさんのとこへはこんかもしれんが……民生委員やとかボランティアという奉仕員の人がちよいちよい顔出して

る筈やで。おばあさん下忘れしてんのとちがうか？

ヨネ いいええ。ワタイはまだまだボケとらしまへんで。民生委員の人とはあんまりつきあいおまへんのや。いつやったか、ずつと前に一べんだけ来てくれてでしたが、今はもう人が替ってるやとかいう話でっせ。

ヨネ けんとな、おまへんの人に会えますけんど近いうちにこんだの人に会えますわ。老人の日にいたくお金は、役所へ取りにこいやったのが、今年からは民生委員の人が持ってきてくれてやとかきいてまんのや。ボラなんとかいう人は知りまへんわ。

ヨネ (しばらく考えて)……あアアア、あれでっか……ヤミ屋から取上げた米を警察の人たちが寄ってたかって失敬したッちゃう……

警官 シッ。大きい声やなア……(外を気にし乍ら)おばあさん頼むで。

ヨネ (声をひそめて)ほんまに、人さんにきかれましたナリの悪い話や。

警官 おばあさん。ええ加減に忘れてくれな困るがな。人を殺しても……いや、こんな例えはどうかと思うんやが……殺人事件でも十五年たつたら時効や。しかも戦争がすんでもう二十八年にもなるんやさかい、もうそろそろ時効にして貰わな……

ヨネ ジコウ？

警官 消えてしまふこつちや。消滅やがな。

ヨネ ほんま、つまり、帳消しで？

警官 まあそうやがな。

ヨネ ようそんなムシのええことを……

警官 ムシがええて……ハッハハハ。おばあさんにかつたらかなわんなア。

ヨネ けんとな、取締る人がヤミ屋の米を失敬すんのもどうかと思うのに、ワタイがそれをみつめて怒ったさかい言うて……

警官 ももええがな、おばあさん。

警官 おかしいなア。そんなことない筈やけんとなア……？

ヨネ ほんなら一べん警察で調べておくんなはれ。

警官 いやア、そないまでせんかて……

ヨネ ……とかく役所できめたことやとかい

うもんはな、メイモクだけみたいなのが

おまんや。そやさかい胸中のモヤモヤ

は全部あなたにぶつつけることになりまんのや。あなたもたいがい迷惑やなア。

警官 (苦笑)なんやらワシが代表して責め

られてるみたいやけん、ぶっちゃけたと

こな、交番所の平過査がメクジラたてて走

りまわったてどうにもならんのや。あんまり無理言わんとしてくれよ。

ヨネ けん、そんなこと言うてる間に年寄り

りはみんなあの世へ行ってしまいまっせ。尤もワタイらみたいな役立たずはいっそのこと首でもくって……

警官 おばあさんノそんなヤケ無茶言うたら

いかなわ。おばあさんにそんなことしても

ろたら困るさかいワシがこうやって訪ねて

くるんやないか。頼んまっせ。ワシやても

うじき老人の仲間入りや。そやさかい老人

の気持は誰よりもようわかるんや。けんど

な、人口十萬や二十萬の小さい自治体やらならんでもできるやろが、百三十萬の大世帯となるとそう簡単にはいかんや。ここはよその都市にくらべたら老人福祉はようやうな方なんや。今はな、国全体で六十才以上の老人が千二百萬人もあって、つまり、十人に一人は老人という割合や。しかもそのうちの六十萬人はひとり暮らしで、またその半分が寝たきりということになってるんや。

ヨネ ええ……寝たきりにだけはなりとうないな。あれはつらいことや。なんとかしころっとお参りできんかいな。

警官 (手を振って) そんなつもりで言うたんとちがうがな。弱ったな。ハッハハハ。ころっといきたいのは誰しもの願いで、何もおばあさんだけやないで。この神戸にはな、おばあさんみだいなひとり暮らしが五千人からおるんや。寝たきりの不幸せな人もぎょうさんおるんやさかい、住む家があつて健康な者は幸せやと思わにゃ……。

ヨネ そうでっしゃろか……ワタイみたいな年寄りが幸せ……(静かに首を振る)

警官 いや、そんな話はもうやめとこ。今

むごい目にあうこともないんや。それに、警察の人やてヤミ屋から取上げた米を、よろまかしたりすることもないんやさかいな。

警官 (外を気にし乍ら) またそれをむし返すんかいな。何も戦争とは関係ないがな。自衛隊は軍隊とはちがうんや。わからんのかいな。

ヨネ (首をかき上げて) ワタイはな、自衛隊いうたら昔の軍隊と一しょやときいてまんのや。こないだの労働組合の若い衆もそない言うった。

警官 そんな奴の言うことマトモにきいてたらあかんがな。あいつらはアカなんや。氣いつけらな……。

ヨネ ……ようわからんな、なんのこつちやら……(首を振り乍ら) けんど、自衛隊には飛行機も軍艦もおまんのやろ?

警官 オヤオヤ。労働組合は一体何をおばあさんに吹き込みよつたんや? ほんまにアカの連中にかかったらかなわんな。そら、自衛隊には飛行機も軍艦もあるがな。今はもう軍艦やなんて言わへん。護衛艦と言ふんやが……そんな当り前やがな。今どき鉄砲と刀だけで国が守れるかいな。そ

日はな、おばあさんの元氣な顔みるんが第一で、それに、このポスターを張りしてもらうんがそのついでというところや。

ヨネ またかいな。こないだもな、労働組合の若い衆が選挙に反対やとかいうのん張りしてくれ言うて……。

警官 それは小選挙区制反対やろ? そんなもんとはワケがちがうんや。(ポスターをひろげて見せる) 同じ張りしてもらうんなら表の方がよう目立つな。ワシも定年が近づいたさかいにこの頃はこんなことが仕事みたいになってしもうてな。

ヨネ (老眼鏡をかけて念入りにポスターをみる) ……この字は何と書いてまんの?

警官 自衛隊募集や。

ヨネ ええ? 自衛隊? ……それはひよつとしたら自衛隊いうんちがいまっか?

警官 そうや。自衛隊のことや。

ヨネ ……警察と自衛隊は一しょでっか? 警官 いやいや。一しょではないんやが……どっちも公共の安全と秩序を守るためにあるんやさかい、そこそこはまあ一しょや。

ヨネ ……すると、自衛隊と警察は親せきで……?

うやろ? ハッハハハ。おばあさんはな、ヒマをもてあましてるんやろけん、ワシはこれでも結構忙がしいんや。それに、ポスターも張りしてもらえんのにこれ以上ねばられたらかなわんわ。

ヨネ ……あなたがねばつてるんやがな。アハハ。けん、あなたといさかいすんのんなんやら気がとがめるな……。

警官 そらそうや。ワシはおばあさんの味方やもんな。そんならこのポスター張つてもええんやな?

ヨネ (困った顔で黙る)

警官 ……やっぱりあかんのかいな。(溜息ついて) おばあさんよう考えてくれよ。これはな、国民にとっては大事なことなんや。自衛隊がおらんなら一体誰が国を守るんや?

ヨネ (首を振って) そんなむずかしいこと、めめらにわかりまっかいな。けんども、もう戦争だけはゴメンや。あれはイヤ。 (激しく首を振る)

警官 戦争戦争で……違うがな。労働組合の奴らは……(舌打ちして) おばあさんは、オカミから年金もろてるんやから、ほかの人とは立場がちがうんや。オカミには

警官 おばあさん。そんなことどっちでもええがな。ワシはこれを張りしてほしいんや。(腕時計をみて) やや、もうこんな時間かいな。こらいかん。早うすまして帰らな……これ、張つてもええな?

ヨネ ……。

警官 ええんやな?

ヨネ (もじもじし乍ら) つらいな……。

警官 え?

ヨネ なんやらあなたの顔つぶすみたいで……。

警官 それはまた何でや? このポスター断る人はめつたにないんや。

ヨネ ほんなら尚のことつらいがな。こら、困ったな。ワタイは自衛隊いうのん大嫌いなんや。なんせあなた、かけ甲斐のない一人息子を戦争で死なしてらんやもん……。

警官 おばあさん、その話は何やらおかしいぞ。息子はんのことならよう知ってるがな。あなたの息子はんはな、国を守って戦死されたんや。自衛隊も国を守るために必要なんやから、あなたみたいな人が卒先して協力してくれないかんのや。

ヨネ けん、ワタイはもう戦争はコリゴリなんや。戦争さえなかつたらな、こんな

協力してくれな困るやないか。

ヨネ それを言われるとどつらい。つらいな。けん、今日はお盆の十三日や。戦死した息子も戻ってきたまんや。そんなもん家の前に張られたら、仏さんいよがって入ってきまへんがな。うっ。とだけやおまへんで。戦争ではぎょうさん死んでまんのや。その仏さんが戻ってくるお盆にそんなもん張つてまわる人おますかいな。あなたにはえらい悪いけん、壇でもまいて浄めさせてもらいまっさ。

警官 壇? 壇? ……なめたら辛いアレか?

ヨネ そうでんがな。壇はみな辛いとしたもんや。さあ、もうぼちぼち仏さん戻ってくる時分や。そんなもんこの家へ持込まれるとかなわんかなわん。あなたもよりよってこんな日にえらいもんを……(立上り) 南無大師遍照金剛。南無大師遍照金剛……

(台所へ)

警官 (呆れて) ワシはナメクジとちがうで。壇なんぞまかれてたまるか。(フツフツ言い乍ら小雨の中を去る)

ヨネ、南無大師遍照金剛をとこなえんら壇を抱え壇をま……とすると、

四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス

田中源助、盆おどりにゆくりしい恰好で
 傘さして出てくる。

(その頃既に流れてくる音楽は、盆おど
 りの歌曲に変わっている)

田中、警官の後姿をみて、老人ホームの
 ことなどでヨネが警官に訴えたと思ひ込
 み、立止って家の中を睨みつける。

田中 くそババアノケ、警察へたれ込みくさ
 ったなア!?

ヨネ、無言で憤然と壇をまく。

田中、びっくりして散って散ってくる壇を傘で
 防ぎ乍ら後退する。

ヨネ、尚も懸命に壇をまく。

狂気にも似たそのすさまじいヨネの様子
 に、さすがの田中源助びっくり仰天、お
 それをなして逃げ去る。

辺り、俄かに暗くなり

突然、稲妻、雷鳴、雨激しく降る。

間—。

ヨネ、何かを探るようにきき耳たてる。

盆おどりの歌曲にダブって、幻聴の、進
 軍ラッパが聞こえてくる。

ヨネ、あわてて仏壇にろうそくを点じ、
 線香をたてる。

ラッパの音とともに、同じく幻聴の軍靴
 のひびきが、他の音を打消すように、次
 第に、おびただしくなっていく。

—幕—

(一九七六年三月改稿)

作者住所

浅野良二

〒654 神戸市須磨区東町

TEL〇七八(七三五)六五七五

あとがき

◇毎年十一月が公演のピークですが、そこへ
 手の届かぬ所で、夏の総会・ゼミ特集号を出
 すことになりました。このもどかしさはやりき
 れませんが今の所仕方ありません。

◇八田先生を失いました。告別式の盛大さは
 そのまま悔しさの大きさをしました。

◇本号より登場の広告「四季ファブリックハ
 ウス」は目下NHK朝のテレビ小説「火の国
 に」に活躍中の河東けいさんの御尽力。

◇いよいよ、灰色選挙に入りました。これも
 もどかしいことだらけですが、何とか黒白を
 つけたいものです。(もも)

演劇会 34号 定価三五〇円

一九七六年十一月二〇日 発行

△編集委員▽黒沢参吉・若尾正也

こばやしひろし・仲武司・土屋清

岸本敏朗・萩坂桃彦

△発行所▽演劇会 発行所

川崎市川崎区渡田4-11-3

荻坂方電〇四四(33)〇七七五

△誌代銀行振込▽

川崎信用金庫小田支店一三三五二七